

# 宇土城跡（西岡台）X

— 平成11～13年度発掘調査報告書 —

2009

熊本県宇土市教育委員会



# 宇土城跡（西岡台）X

— 平成11～13年度発掘調査報告書 —

2009

熊本県宇土市教育委員会





宇土城跡 (西岡台) 周辺  
航空写真 (上が北東)



宇土城跡航空写真 (南西より)



主郭・千畳敷航空写真（南より）



千畳敷虎口周辺調査状況  
（東より）



千畳敷南東側調査状況  
(南より)



横堀跡 S D02から出土した石塔 (南より)

巻頭図版 4



土師質土器や瓦質土器などの土器類



様々な種類の国産及び貿易陶磁器



## 序 文

宇土市周辺地域には、中世に築城された数多くの城跡が残されており、地域の大切な文化遺産として保存・継承されています。なかでも宇土城跡（西岡台）は宇土氏や名和氏の居城として広く知られており、その規模は県下の中世城跡のなかでも最大級を誇ります。

宇土城跡は昭和54年3月に国の史跡に指定され、56年度より保存整備事業を開始しました。現在、西岡神社北側の第1ブロックと千疊敷及び周辺の第2ブロックの整備を完了し、平成18年度から三城及び周辺の第3ブロックの発掘調査に着手しました。

主郭・千疊敷の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や柵列跡、門跡などを検出しました。また、千疊敷を囲む横堀跡が未完成で掘削単位（小間割）の跡が残されていたことや、石塔を用いた城破り跡が九州で初めて確認されるなど極めて重要な成果が得られています。また、調査で出土した土師質土器や瓦質土器、中国や朝鮮半島などからもたらされた貿易陶磁器は、往時の宇土城における生活の様子を今に伝える貴重な資料です。

以上の調査成果を反映し、歴史的背景に基づいた整備を行うため、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て事業を進めています。これまでに掘立柱建物跡の平面・立体表示や堀跡の復元、城破りに用いられた石塔の野外展示などの遺構整備、トイレや花木広場などの便益・休養施設の整備を実施しました。

最後になりましたが、発掘調査ならびに保存整備工事にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育委員会文化課、保存整備検討委員会の先生方をはじめ、関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。

平成21年3月

宇土市教育長 木下博信



宇土城跡（西岡台）の位置

左：1/20,000,000

右：1/2,000,000



## 例 言

- 1 本書は熊本県宇土市神馬町に所在する国指定史跡・宇土城跡（西岡台）の平成11～13年度発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査（11年度：第11次、12年度：第12次、13年度：第13次）は、史跡宇土城跡保存修理事業（国庫補助事業）に伴い宇土市教育委員会が実施した。なお、13次調査については個人住宅建設に伴う発掘調査であるため、本書では取り扱わない。
- 3 調査地は宇土市神馬町579・615-11に所在する。
- 4 発掘調査は藤本貴仁が担当した。
- 5 発掘調査に伴う遺構実測図は、藤本・野村健一郎が作成し、実測図作成の一部や遺構図化を株式会社埋蔵文化財サポートシステム及び株式会社ダイチプラン、株式会社スカイサーベイに委託した。
- 6 発掘調査時の写真は藤本が撮影した。遺物写真については、木下洋介（宇土教育委員会）の助力を得て藤本が撮影した。
- 7 遺物実測図作成および遺構・遺物実測図の製図は、境美和・春川善子・瀬上幸恵・山口陽子、出土遺物観察表の作成は境・春川・山口が行い、藤本がこれを補佐した。また、本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 8 出土した陶磁器は大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）、石塔は前川清一氏（熊本県教育委員会）にご指導いただいた。なお、中国製の白磁・青磁・染付の分類は以下の文献によった。  
 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会  
 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁陶の分類について」同上  
 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」同上
- 9 本編で用いた平面直角座標は日本測地系を使用し、方位は座標軸（日本測地系）を基準とした北をあらわす。また、レベルは標高を示す。
- 10 遺構は建物跡・門跡をSB、溝跡・横堀跡・堅堀跡をSD、井戸跡をSE、遺跡をSF、Pはピット、その他の遺構をSXと略表記する。
- 11 本書の執筆と編集は藤本が行った。
- 12 出土遺物・その他の関連資料は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

## 本文目次

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境と歴史的環境	5
第2節 宇土城跡に関する歴史	7
第3節 縄張りや発掘調査について	8
第3章 平成11年度（第11次）発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 検出遺構	14
第3節 出土遺物	18
第4節 小結	27
第4章 平成12年度（第12次）発掘調査	29
第1節 調査の概要	29
第2節 検出遺構	29
第3節 出土遺物	35
第4節 小結	47
第5章 平成13年度（第14次）発掘調査	49
第1節 調査の概要	49
第2節 検出遺構	54
第3節 出土遺物	58
第4節 小結	85
第6章 まとめ	87
第1節 横堀跡SD02について	87
第2節 千疊敷の虎口と城破りについて	88
第3節 竪堀跡について	89

## 挿図目次

図1 「城破り」を伝える新聞記事	2	図15 遺構外出土遺物（1/2、1/3）	22
図2 宇土城跡（西岡台）の位置（1/800,000）	6	図16 12次調査区配置図（1/1,000）	30
図3 宇土城跡周辺遺跡分布図（1/25,000）	6	図17 S F01周辺遺構配置図（1/100）	31
図4 宇土半島基部の中・近世城跡（1/100,000）	8	図18 S F01土層断面図（1/50、1/60）	32
図5 宇土城跡縄張り図（1/3,000）	9	図19 S F01石塔出土状況（1/80）	33
図6 千疊敷周辺検出遺構集成図（1/1,000）	11	図20 S B23実測図（1/40）	34
図7 11次調査区配置図（1/1,000）	14	図21 S D18周辺遺構配置図（1/50）	36
図8 11次東調査区遺構配置図（1/120）	15	図22 S D18土層断面図（1/50）	37
図9 11次東調査区土層断面図（1/30、1/50）	16	図23 S F01出土遺物1（1/3）	38
図10 11次西調査区遺構配置図（1/100）	17	図24 S F01出土遺物2（1/2、1/3）	39
図11 S E01実測図（1/60）	19	図25 S F01出土遺物3（1/10）	40
図12 S D02出土遺物図1（1/3）	20	図26 S D01、S D18、遺構外出土遺物（1/3、1/10）	41
図13 S D02出土遺物図2（1/2、1/3）	21	図27 14次調査区配置図（1/1,000）	49
図14 S E01出土遺物（1/3）	22		

図28	14次南調査区遺構配置図 (1/200)	50	図41	SD02出土遺物6 (1/10)	68
図29	SD01周辺遺構配置図 (1/100)	51・52	図42	SD02出土遺物7 (1/10)	69
図30	SD01検出状況土層断面図 (1/80)	53	図43	SD02出土遺物8 (1/10)	70
図31	SD02周辺遺構配置図 (1/100)	55・56	図44	SD02出土遺物9 (1/10)	71
図32	SD02、SD04土層断面図 (1/80)	57	図45	SD02出土遺物10 (1/10)	72
図33	SD02石塔出土状況 (1/60)	59・60	図46	SD04出土遺物 (1/3)	72
図34	SD19周辺遺構図 (1/100)	61	図47	SD19出土遺物1 (1/3)	73
図35	SD19土層断面図 (1/60)	62	図48	SD19出土遺物2 (1/3)	74
図36	SD02出土遺物1 (1/3)	63	図49	SD19出土遺物3 (1/3)	75
図37	SD02出土遺物2 (1/10)	64	図50	SD19出土遺物4 (1/10)	76
図38	SD02出土遺物3 (1/10)	65	図51	ビット及び整地土層出土遺物 (1/3)	76
図39	SD02出土遺物4 (1/10)	66	図52	遺構外出土遺物 (1/3)	77
図40	SD02出土遺物5 (1/10)	67			

## 表目次

表1	宇土城跡(西岡台)発掘調査の経過	4	表3	11次調査出土遺物観察表	24
表2	宇土における名和家当主と主な歴史的事象	10	表4	12次調査出土遺物観察表	43
			表5	14次調査出土遺物観察表	79

## 図版目次

巻頭図版1	宇土城跡(西岡台)周辺航空写真(上が北東) 宇土城跡航空写真(南西より)	図版5	SD02出土遺物1
巻頭図版2	主郭・千疊敷航空写真(南より) 千疊敷虎口周辺調査状況(東より)	図版6	SD02出土遺物2 SE01出土遺物1
巻頭図版3	千疊敷南東面調査状況(南より) 横堀跡SD02から出土した石塔(南より)	図版7	SE01出土遺物2 遺構外出土遺物
巻頭図版4	土師質土器や瓦質土器などの土器類 様々な種類の国産及び貿易陶磁器	図版8	12次調査区航空写真(上が北) SF01調査状況航空写真(上が西)
図版1	11次調査区航空写真(南東より) 11次東調査区航空写真(上が北)	図版9	SF01調査前状況(東より) SF01調査状況(東より)
図版2	SD02調査状況(北より) 11次東調査区調査前状況(南より) SD02検出状況(南より) SD02底面の段差(北より) SD02調査状況(北より)	図版10	SF01調査状況(北より) SF01土層堆積状況(東より) SF01土層堆積状況(西より) SF01出土石塔及び貝類(南より) SF01出土石塔(東より)
図版3	11次西調査区調査状況(東より) SX04検出状況(東より) SD02とSD19の土層堆積状況(北より) SD02排水溝状遺構検出状況(西より) SD19検出状況(北西より)	図版11	SB23周辺調査状況(南より) 整地層検出状況(西より) SB23検出状況(南より) SB23調査状況(東より)
図版4	SE01調査状況(西より) SE01礎群出土状況(北より) SE01埋土半截状況(西より)	図版12	SF01調査状況(東より) SF01石塔など出土状況(西より)
		図版13	SD18調査状況(北より) SD18調査状況(南より)
		図版14	SB18土層堆積状況(北より)

	S B18礫群出土状況（北より）		S D02上層出土石塔出土状況（東より）
	同上（東より）	図版22	S D04検出状況（北より）
図版15	S F01出土遺物 1		S D04調査状況（南西より）
図版16	S F01出土遺物 2		S D19調査前状況（南東より）
図版17	S F01出土遺物 3	図版23	S D19調査状況航空写真（上が西）
	S D18及び遺構外出土遺物		S D19調査状況（西より）
図版18	14次南調査区航空写真（上が北）	図版24	S D19検出状況（北東より）
	S D01周辺航空写真（上が北）		S D19土層堆積状況（東より）
図版19	S D01調査状況（6次T 3、北より）		S D19石塔出土状況（南より）
	S D01検出状況（T 1、北より）	図版25	S D02出土遺物 1
	S D01検出状況（T 3、西より）	図版26	S D02出土遺物 2
	S D01検出状況（T 4、北西より）	図版27	S D02出土遺物 3
	首長厩館に伴う張り出し部検出状況（西より）	図版28	S D04出土遺物
図版20	S D02調査状況航空写真（上が北）		S D19出土遺物 1
	S D02検出状況（北より）	図版29	S D19出土遺物 2
	S D02調査状況（北より）	図版30	S D19出土遺物 3
	S D02調査状況（南西より）	図版31	S D19出土遺物 4
	S D02下層出土石塔出土状況（東より）		ピット及び竪地土層出土遺物
図版21	S D02上層出土石塔出土状況（南西より）	図版32	遺構外出土遺物

# 第1章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯と経過（表1）

昭和49年1月、宇土市立鶴城中学校の改築移転計画に伴い、その移転用地として宇土城跡<sup>1)</sup>の所在する独立丘陵（通称：西阿台）をあてることが市関係機関の協議で決定した。当地は「伯耆殿屋敷跡」として昭和47年12月23日に市の史跡に指定されていたため、宇土市教育委員会が主体となり49年3月から51年3月まで発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代前期の首長居館を囲む巨大な塚跡、主郭である千畳敷を圍繞する横堀跡、掘立柱建物跡をはじめとする数多くの遺構を検出し、古墳時代や中世を中心とする多量の遺物が出土した。これを受けて遺跡保存の気運が高まった結果、宇土城跡は恒久的に保存されることになり、中学校移転は中止されて史跡公園として整備・活用する方針が打ち出された。

昭和54（1979）年3月12日の官報告示によって国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である『史跡宇土城跡環境整備計画』を策定し、同年、保存整備工事に着手した。本計画では宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示・休憩施設などの整備を計画した。

第1ブロック（西岡神社北側地区）は平成元年度におおむね整備を完了し、9年度には学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足した。現在、同委員会の指導のもと、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を進めており、10年度には新たな基本計画となる『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』を策定した。

第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の保存整備に関しては、平成元年度より着手したが、その動きが本格化したのは9年度からである。第2ブロックの主な整備施設を列挙すれば、千畳敷を圍繞する堀の復元（9・10・13・15・17年度）、16・17号建物跡の平面表示（11年度）、休憩施設を兼ねた19号建物跡の整備（12年度）、トイレ（14年度）、案内板（15年度）、城門と柵（17年度）などで、17年度に同地区の整備をおおむね完了した。なお、第3～5ブロックは、一部で防災工事や遺構保護盛土工事が行われたほかは未着手である。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査を開始したのは、平成2年度の4次調査からである。現在まではほぼ毎年調査を行っており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡を検出したほか、虎口や城門跡、横堀跡、竪堀跡の調査を実施した。また、千畳敷の横堀跡が未完成であることや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られており、その成果については報道機関への発表や現地説明会の開催、発掘調査報告書などで一般に公開している。

本書はこれまで実施した計21次にわたる発掘調査（平成20年度現在）のうち、史跡宇土城跡保存修理事業に伴い平成11～13年度に実施した第11・12・14次調査の発掘調査報告書である。なお、13年度に実施した個人住宅建設に伴う第13次調査は、本書が保存修理事業に伴う調査報告書であるため今回は取り扱わず、別途報告する予定である。

## 第2節 調査の組織（敬称略、役職は当時）

—平成11～13年度発掘調査—（第11・12・14次調査）

調査主体 宇土市教育委員会

# 中世宇土城跡に「城破り」

市教委発表  
築城知る手掛かりに

宇土市教委は五日、同市神馬町の国指定史跡・中世宇土城跡の堀の一部と登城道の跡から、五輪塔が大甍に投げ込まれた「城破り（しろわり）」の跡が見つかったと発表しました。城破りは城を隣城にするまでの儀式。石塔を使った城破りが確認されたのは九州では初めて、全国でも千葉県の本城跡や世子城跡など数例にとどまっています。城破りは破城（はじょう）とも呼ばれ、中世の城郭では堀を壊したり、埋めたりするか、土砂で

出入り口を大きく方法が一般的。同市教委は昨年十二月、発掘調査を始めた。見つかった五輪塔の部材や石塔の破片は百十三個に上る。城の主郭（本丸）への出入り口付近の堀や登城道に集中しており、意図的に投げ込まれた後に土砂で埋めた形跡があることから城破りの一種とみられるとしている。五輪塔は中世の墓石、供養塔、風空輪、火輪、水輪、地輪などの部材を重ねて形作られる。中世宇土城は一〇四八

（永承三年、築城されたと伝えられ、以後、菊池氏や宇土氏、名和氏が入城した。豊臣秀吉によって所領された小西行長が一五八九年に十七年、東側の城山で新城近世宇土城の築城に着手しているため、十六世紀末に城破りされたと考えられている。市教委は「キリシタンであった小西行長が、仏教に基づく五輪塔を使って城破りをした可能性もあり、興味深い。近世宇土城の築城の経緯を知る手掛かりになるのではな



中世宇土城の堀跡で大甍に見つかった石塔—宇土市神馬町

いか」と話している。八日午前十一時と午後一時、市教委文化振興課から現地へ発掘調査説明会を開く。問い合わせは64(22) 6500。

図1 「城破り」を伝える新聞記事（熊本日日新聞、平成13年12月6日付）

調査責任者 坂本光隆（宇上市教育長）

調査事務局 教育部長 安田豊（11年度）、町田圭吾（12・13年度）

文化振興課長 今村謙二（11年度）、中野洋（12年度）、吉永栄治（13年度）

文化振興係 木下洋介（文化振興係長、11年度）、高木恭二（同、12・13年度）、野田  
恵美（参事、11・12年度）、松田安代（同、13年度）、淵上真行（主事、  
11年度）、藤本貴仁（技師、調査担当）、一安隆正（主事、12・13年度）

#### 発掘調査及び整理作業員

本田亘、村山初夫、前田昭三、野添重友、本田栄子、村山艶子、前田房子、橋本チエ子、小畑律子、古山節子、福田フミエ、園田佳代子、浅川レイ子、山田敏江、山形ユキコ、釜賀ヨウ子、白石節子、稲葉マシ子、野村健一郎、丸地見典、平木君代、山口陽子、淵上幸恵、田中真佐子、西谷美智子、松岡鉄夫、山本忍

#### 史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆（委員長、熊本大学工学部）、服部英雄（九州大学大学院比較社会文化研究科）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部）、加藤允彦（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）、高野茂（熊本中世史研究会）

#### 調査指導及び協力者

本中真（文化庁記念物課）、宮武正登・高瀬哲郎（佐賀県立名護屋城博物館）、柴田龍司（千葉県文化財センター）、大田幸博・古城史雄（熊本県教育委員会）、上田耕（鹿児島県知覧町立歴史民俗博物館）、美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、鶴嶋俊彦（熊本県人吉市教育委員会）、黒田裕司（熊本県三加和町教育委員会）、森本朝子（福岡市教育委員会）、鶴田倉造・舟田義輔・村田房夫・吉田恒・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会）

#### 一 整理・報告書作成一（整理作業：平成14・15年度、報告書作成：20年度）

責任者 坂本光隆（宇土市教育長、14・15年度）、木下博信（同、20年度）

事務局 教育部長 町田圭吾（14年度）、吉永栄治（15年度）、山内清人（20年度）

文化振興課長 高木恭二

文化財係 山本和彦（係長、14・15年度）、松下敏親（同、20年度）、松田安代（参事、14・15年度）、下田志穂里（参事、15年度）、一安隆正（主事、14年度）、村田嘉奈子（参事、20年度）、藤本貴仁（18年度より参事、整理・報告書作成担当）、村上淳子（主事、20年度）

整理作業員 境美和、田中由美、林和美、春川香子、平木君代、淵上幸恵、山口陽子

#### 史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆（委員長、熊本大学工学部）、服部英雄（九州大学大学院比較社会文化研究科、14・15年度）、千田嘉博（奈良大学文化財学科）、稲葉健陽（熊本大学大学院社会文化科学研究科、20年度）

#### 調査指導及び協力者

本中真・加藤允彦（文化庁記念物課）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、大田幸博・木村元博・帆足俊文・前川清一（熊本県教育委員会）、美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、黒田裕司（和木町教育委員会）、佐藤伸二・辻誠也・濱口俊夫・根本なつめ・村田房夫・吉田恒（宇土市文化財保護審議会）



## 註

- 1) 西岡台の東約300mの低丘陵には、近世にキリシタン大名小西行長が築城した宇土城跡(城山)が所在し、混同を避けるため、通常、中世の宇土城跡は「宇土城跡(西岡台)」や「宇土古城」と呼ばれている。本書では特別のことがわりが無い限り、「宇土城跡」とは「中世の宇土城跡」を指すこととする。

表1 宇土城跡(西岡台)発掘調査の経過(ゴシックは今回報告)

年度	回数	調査地点	主な検出遺構	備考
昭和49・50年度	1次	千疊敷周辺、三城周辺ほか	塚跡(古墳時代)・横堀跡・溝跡・掘立柱建物跡・標跡・門跡・土環墓(中世)	市立鶴城中学校移転に伴う発掘調査。古墳時代の首長居館と中世城跡の重複を確認。古墳時代首長居館の確認は全国で2番目。調査成果を受けて中学校の移転中止。
51年度				『宇土城跡(西岡台)』本文編・史料編刊行。
62年度	2次	三城周辺	堀跡・溝跡(中世)	遺跡状況把握のための発掘調査。『宇土城跡(西岡台)』Ⅱ刊行。
63年度	3次	三城周辺	掘立柱建物跡(中世)	遺跡状況把握のための発掘調査。
平成2年度	4次	千疊敷北東側	掘立柱建物跡・溝跡(中世)	保存整備に伴う発掘調査開始。以後継続する7次までの千疊敷の調査で、重複する多数の掘立柱建物跡を検出。
3年度	5次	千疊敷南側	掘立柱建物跡、虎口(中世)	千疊敷において、平面プラン「L」の字形の切通し状を呈する虎口を確認。
4年度	6次	千疊敷北西側、同南東側帯曲輪	塚跡(古墳時代)・掘立柱建物跡(中世)	
5年度	7次	千疊敷西側、同東側及び北側帯曲輪	横堀跡(内堀・外堀)・溝跡・門跡?(中世)	虎口前面の堀跡から大量の石塔残欠出土。
6年度	8次	千疊敷東側、同西側及び東側帯曲輪	虎口	
9年度	9次	千疊敷南側平場、同西側帯曲輪	塚跡(古墳時代)・横堀跡(中世)	千疊敷及び周辺地区の遺構表示開始。
10年度	10次	千疊敷北側帯曲輪	横堀跡、圍塼、塼塼(中世)	千疊敷北側堀跡で小間割(掘削単位)確認。掘削途中で中止されたことが埋土の堆積状況から判明。掘削途中の中世城の堀跡が確認されたのは全国初。宇土城跡で初めて鉄砲玉出土。
11年度	11次	千疊敷東側帯曲輪	横堀跡・塼塼(中世)	千疊敷北東側で大規模な塼塼を検出。『宇土城跡(西岡台)』Ⅲ刊行。
12年度	12次	千疊敷東側	虎口・門跡(中世)	千疊敷の切通状虎口の踏面は、地山掘削面をそのまま踏面とするI期と盛土敷地上面とするII期の2時期あることが判明。II期に伴う門跡を確認。『宇土城跡(西岡台)』Ⅳ刊行。
	13次	三城南側平場	溝跡(近世以降?)	史跡指定地に隣接する個人住宅建設に伴う発掘調査。
13年度	14次	千疊敷北東側、同南東側帯曲輪	環跡・方形張出し(古墳時代)、横堀跡(内堀・外堀)(中世)	虎口前面の堤から多数の石塔残欠出土。これを意図的に地山土を多量に含んだ土砂で虎口周辺の堀を埋めていることが判明。5・12次調査の成果をあわせ、虎口周辺で行われた城破りと考えられる、石塔を用いた城破りは九州では初めて確認。また、1次調査で確認された千疊敷南西側の張出しと同規模・同形状の張出しを同南東側で確認。『宇土城跡(西岡台)』Ⅴ刊行。
14年度	15次	千疊敷北東側、同南側帯曲輪	塚跡(古墳時代)・塼塼(中世)	古墳時代の首長居館の大きさをほぼ確定。千疊敷北東側の塼塼が斥候部まで延びる可能性高まる。『宇土城跡(西岡台)』Ⅵ刊行。
15年度	16次	千疊敷北側、同南東側、同西側帯曲輪	塼塼・横堀跡(外堀)(中世)	10次調査で検出した塼塼は千疊敷北側に向かって延びることが判明。同北東側の塼塼の規模・深さをトレンチ調査で確認。『宇土城跡(西岡台)』Ⅶ刊行。
16年度	17次	千疊敷北西側帯曲輪	塼塼跡	千疊敷北西側で大規模な塼塼跡を検出。『宇土城跡(西岡台)』Ⅷ刊行。
17年度	18次	千疊敷南側平場、同東側帯曲輪	横堀跡、塼塼跡	千疊敷東側で塼塼跡を検出。また、千疊敷南側平場で道として利用されていた斜路を発掘し、SD02を検出。
18年度	19次	三城南側帯曲輪、同南東側帯曲輪	道路跡、溝跡(中世)	三城南側で朝溝を伴う道路跡、同東側平場で上段からの山輪から続く溝跡SD07を検出。『宇土城跡(西岡台)』Ⅸ刊行。
19年度	20次	三城南西側帯曲輪		
20年度	21次	三城東側帯曲輪	掘立柱建物跡	三城東側に隣接する帯曲輪で掘立柱建物跡を検出。『宇土城跡(西岡台)』Ⅹ刊行。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境と歴史的環境

#### (1) 地理的環境 (図2・3)

熊本県宇土市は、熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部に位置し、東西約24.8km、南北約7.6kmで面積は約74.19km<sup>2</sup>である。宇土半島は北側に有明海、南側に不知火海（八代海）と面し、先端部に天草諸島が連なる。山地群は木原山や主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地、三角岳火山系山地に分けられ、基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩類などの大岳火山岩類である。半島に占める平野部の割合は比較的小さい。

宇土市の北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており、その南側には緑川の支流である浜戸川が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が広がっており、北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝である。

宇土城跡は、熊本県の中央部を貫流する緑川によって形成された沖積平野西側、通称「西岡台<sup>にしおかだい</sup>」と呼ばれる標高約39m、東西約750m、南北約400mの独立丘陵に位置する。本丘陵及び周辺には、後述するように縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が点在している。

#### (2) 歴史的環境 (図3)

宇土城跡（1）周辺は、縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている。宇土城跡周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡として、石ノ瀬遺跡（2）、轟貝塚（3）、西岡台貝塚（4）、馬場遺跡（5）、北園遺跡（6）がある。

石ノ瀬遺跡では、道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期の押型土器（早水台式）が出土しており（高木・木下ほか2001）、近くに集落の存在が想定されている。轟貝塚は縄文早期末から前期の轟式土器の標式遺跡として著名である。発掘調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、人骨、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土している（藤本2008）。轟貝塚の東約60mの距離にある西岡台貝塚は、宇土城跡が所在する標高約40mの独立丘陵西側裾部に位置している。地層は2つに大別され、下層が轟・曾畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする。1983・1984（昭和58・59）年の発掘調査で、縄文中期とみられるドングリなどの堅果類の貯蔵穴が5基検出された（木下・高木ほか1985）。馬場遺跡からは曾畑式土器が出土しており、北園遺跡は縄文時代から中世の包蔵地である。また、時期は明確ではないものの野鶴貝塚（7）や椿原貝塚（8）がある。

続く弥生時代の遺跡として、中期後半の黒髪式の壺形土器が出土した北平遺跡（9）、後期の集落とみられる下松山遺跡（10）がある。また、城山遺跡（11）は、前期から後期まで継続する拠点集落の可能性が高く、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、終末期の土器群が多量に出土している（富樫ほか1982、高木・木下1985）。

古墳時代になると、前期に巨大な首長居館が造営された西岡台遺跡（1）があり、城山遺跡には本首長居館と同時期に一般成員の集落が形成されていたとみられる。また、首長居館と対応するように、熊本県最古の前方後円墳で船載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳（12）や迫ノ上古墳（13）、スリバチ

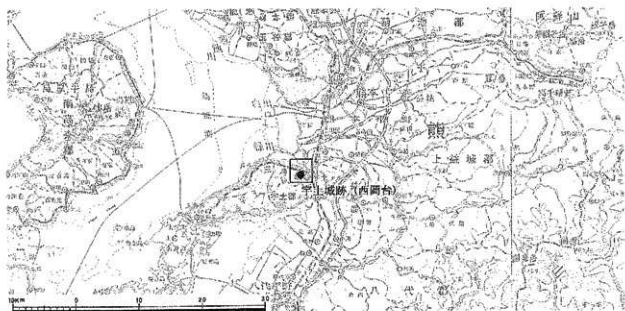


図2 宇土城跡(西岡台)の位置(1/600,000)

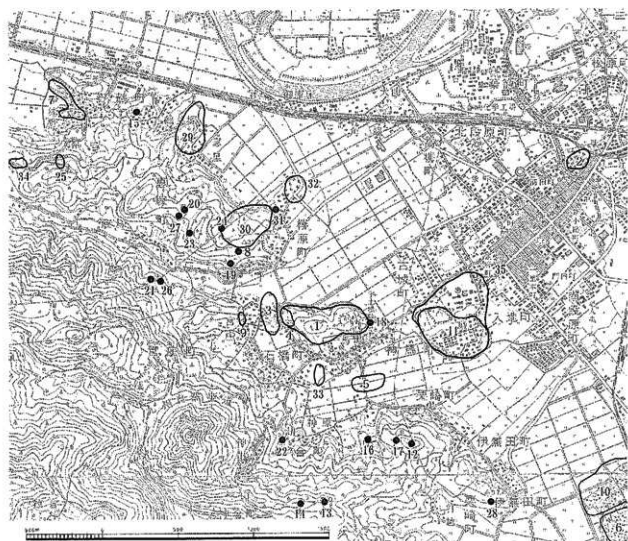


図3 宇土城跡周辺遺跡分布図(1/25,000、图中番号は本文と対応)

山古墳 (14)、天神山古墳 (15) など前期の前方後円墳が相次いで築造された。これらの前方後円墳は、西九州を代表する前期の首長墓系譜であり、当時、宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと考えられる。しかし、中期以降、前期以来の首長墓系譜は漸絶し、前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神合古墳 (16) や猫ノ城古墳 (17)、西岡台箱式石棺 (18)、中期の所産とみられる椿原石蓋土塚墓 (19) がある。

後期から終末期になると横六式石室を主体部とする東畑古墳 (20)、仮又古墳 (21)、山王平古墳 (22)、金嶽山古墳 (23) などの円墳や、県下で唯一の終末期の方墳である椿原古墳 (24) などが築造された。多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群 (25) や仮又2号墳 (26)、東畑2号墳 (27) も後期に属するとみられる。その他、築造時期が不明の久保1・2号墳 (28) があり、恵里遺跡 (29) や椿原遺跡 (30) は古墳時代の包蔵地である。

古代には西岡台遺跡や城山遺跡で須恵器や土師器が出土しており、前者では破砕された土馬も出土している。中世になると宇土氏・名和氏が居城した宇土城跡が築城された。主郭 (千疊敷) やその西側に位置する曲輪 (三城) の発掘調査で、掘立柱建物跡や横堀跡、門跡などが検出され、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した (平山・高木ほか1977)。

椿原遺跡では方形居館を取り囲む箱堀が検出されており、本遺跡に隣接する名和家菩提寺の曹洞宗宗福寺跡 (31) には、名和武顕や名和行興の位牌、名和行直の墓石が残されており、眼下の椿原宇船津周辺には中世の港湾施設である宇土津 (32) が存在したとみられている。また、陳の前遺跡 (33) や伊津野遺跡 (34) でも中世の上器・陶磁器が出土している。

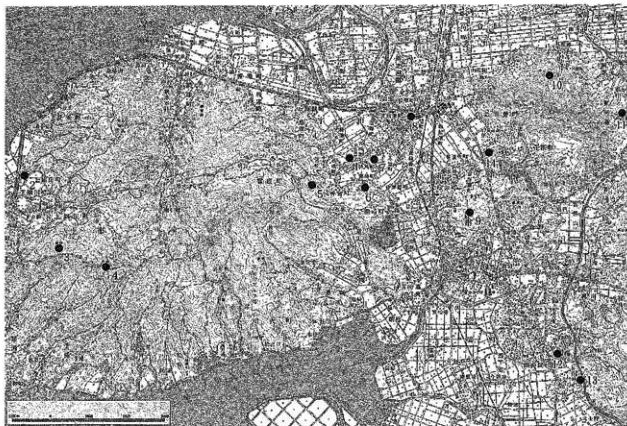
近世になるとキリシタン大名小西行長によって近世の宇土城跡 (35) が築城されたが、関ヶ原の戦いで敗れて処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡などを検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土した (木下1981・1982、高木・木下1985)。

## 第2節 宇土城跡に関する歴史 (図4、表2)

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主の宇土氏と名和氏の居城である。「三宮社記録」『増補訂正肥後国誌』下巻によれば、永承3 (1048) 年に築城され、以後、菊池氏の一族が相次いで宇土城にいるとの伝承があるが、それを証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が天正16 (1588) 年に宇土城主となり、翌年に近世宇土城の工事を着手した天正17 (1589) 年から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5 (1600) 年の間と推察される。

宇土氏は宇土庄の荘官の地位にあった菊池氏一族と伝えられる在地武家領主であり、宇土高俊が文献上での初見である。正平3 (1348) 年、征西將軍懐良親王を宇土津に迎え入れており、南朝方として活動した。以後、宇土氏については引き続き本拠を維持したとみられるが、文亀3 (1503) 年、宇土為光が守護職をねらって守護菊池能運と争い失敗、滅亡した。

名和氏は代々伯耆国長田邑を領した有力武家である。名和長年の孫顯興は正平13 (延文3年、1358) 年、一族を挙げて伯父義高が建武の恩賞として得た肥後國八代庄に移り、南朝方として活動した。以後、八代を中心として南北に勢力を伸張したが、文亀4 (1504) 年、名和顯忠は居城の古麓城 (八代市) を菊池氏・相良氏によって追われ木原城 (熊本市富合町) に一時移るが、その後、宇土氏滅亡後の宇土城に入った。



宇土市管内図5万分の1地形図(収録番号:平6九宮路37号)を使用

- 1 宇土城跡(西岡台) 2 田平城跡 3 鎌岳城跡 4 大岳城跡 5 白山 6 城ノ越(陣跡) 7 宇土城跡(城山) 8 石ノ瀬城跡 9 高城跡 10 木原城跡 11 阿高城跡 12 豊福城跡 13 竹崎城跡 14 花園山城跡

図4 宇土半島基部の中・近世城跡(1/100,000)

以後、名和氏は木原城のほか田平城(宇土市)・阿高城(下益城郡城南町)・豊福城(宇城市松橋町)・矢崎城(宇城市三角町)など陸上・海上交通の要衝に支城を配した。名和氏が宇土を拠点としてからも相良氏とは争いが絶えず、豊福城をめくり幾度となく争ったことが相良氏八代支配時代の日記風記録『八代日記』から知ることができる。その大きな要因として、豊福城が八代と宇土のほぼ中間地点に立地すること、甲佐から宇土半島へと通じる街道と八代から隈本へと通じる街道との交錯地という交通の要衝に位置したことが推測される。

また、『八代日記』によれば、天文19(1550)年に名和行興と豊福城代皆吉武真との内紛や、永禄5(1562)年の行興死去後、その弟で豊福城代行直と幼主行憲の後見役の内河氏との対立があり、行直は宇土城に討入って名和氏継承を果たし、内河氏は堅志田城に逃れたことが記されている。また、永禄9(1566)年には行直と老者の一人賀(加)悦氏との間に争いが起こり、『宇土取乱』れたとの記述がある。

天正15(1587)年、豊臣秀吉の九州平定によって名和顕孝は宇土城を開城した。その後、顕孝は筑前国内に替地となって小早川氏の家臣となり、江戸時代になると顕孝の子孫は柳河立花藩士として存続した。同16(1588)年には、人吉・球磨を除く肥後南半部を治めた小西行長が宇土城に入ったが、翌年には新城の築城に着手した。

### 第3節 縄張りや発掘調査について(図5・6)

宇土城跡の曲輪は、西岡台の東西に並んだ2つの高位部に所在する。東側が「千畳敷」と呼称される

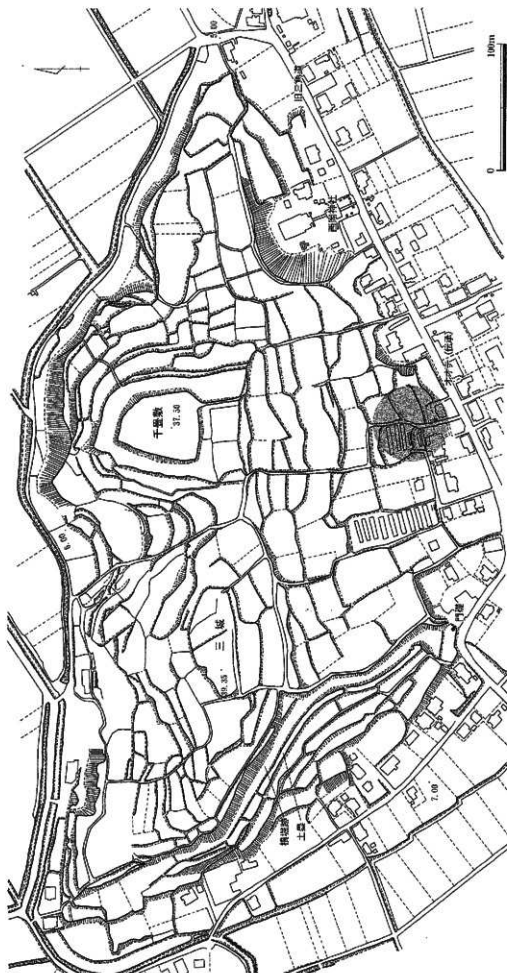


図5 宇土城跡縄張り図 (1/3,000, 1974年測量)

主郭であり、標高約37m、東西約50m、南北約65mの削平地である。発掘調査によって多数の掘立柱建物跡や櫓跡、門跡、虎口跡、横堀跡、塹壕跡を確認した（平山・高木ほか1977、藤本2000・2001・2002・2003・2004・2005・2007）。西側が「三城」と呼称される曲輪であり、標高約39m、東西約80m、南北約35mの削平地で、掘立柱建物跡や門跡、道跡、溝跡を検出した（平山・高木ほか1977、木下・元松1988）。これら曲輪の周囲は堀を配したり、削り出しによって急峻な崖状地形を造作し、これと帯曲輪のセットを連続して配することで曲輪を防御している。

これらの遺構や包含層から、大量の土師質土器や播鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼・瀬戸焼などの国産陶器、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイ産や朝鮮半島製の陶磁器など、13～16世紀代を中心とする遺物が出土した。

三城の西側約50mには地元で「カラホリ」と呼ばれている長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mの長大な横堀跡が南北方向に配置され、その西側に並行して高さ2m程の土塁がある。この横堀跡は堀底に側溝を有し、南端付近から門礎とみられる巨石が出土していること、中世以来の古道である三角道と交わることから平時には堀底道として利用していたと想定される。丘陵南側は比較的幅広い削平地が階段状に連続する地形をなし、「オオテ」と伝えられる地点もある。おそらくこの付近に領主や家臣団、一般民衆の居住地が形成されていたと考えられる。

中世宇土城跡の城下の様相に関しては、文献資料が皆無に等しく、発掘調査も行われていないため、その実態についてはほとんどわかっていないのが現状である。しかし、「陳ノ前」や「馬場」などの城に関連するとみられる地名、伝大手や中世以来の「三角道」の存在から、前述した西岡台南側の削平地には、領主や家臣団、一般民衆が居住する集落が形成されていた可能性が高い。

表2 宇土における名和家当主と主な歴史的事象

当主 (家督相続時期)	歴史的事象
名和 顕忠 (1504-1510)	文亀4年(1504)宇土城跡に入る。 永正8年(1511)相良長毎、豊福城跡で宇土の兵・豊福の守兵と久具川を隔てて防ぐ。
名和 重年 (1516-1517?)	※重年は家督継承疑問
名和 武頼 (1517-1546)	大永7年(1527)相良氏、豊福城を退出し、家臣の皆吉伊豆守が豊福城に入城。 天文4年(1535)相良氏との和解直後、豊福・大野の合戦に名和氏の兵数百人討ち死し、豊福城落城。皆吉伊豆守は宇土に退散し、相良氏、豊福城に入城。 天文5年(1536)相良・名和両家の婚儀執り行われる。 天文7年(1538)宇土城焼ける。 天文11年(1542)宇土城再び焼け、城下段原も類火にあった。
名和 行興 (1546-1562)	天文18年(1549)名和行興、木原六郎宮柁門を築築、領内長浜に天満宮三社、神山に白山福現を建立。 天文19年(1550)豊福城代皆吉武真が、宇土城を攻め、行興敗走し、武真宇土城に入るが、その後退去し、行興は宇土城に帰る。 天文20年(1551)大友義統、肥後に侵攻、竹迫城・隈本城を降し、宇土城を攻める。 天文22年(1553)名和氏、宇土氏を降す。
名和 行憲 (1562-1564)	永禄7年(1564)行憲9歳で死亡。
名和 行直 (1564-1571)	永禄8年(1565)相良氏、豊福城を攻める。
名和 顕季 (1571-1587)	天正7年(1579)川尻を領する。 天正14年(1586)顯季、筑前岩屋城攻めに参戦。 天正15年(1587)豊臣秀吉、九州平定のため大阪城を出発。顯季、宇土城を開城し退去。

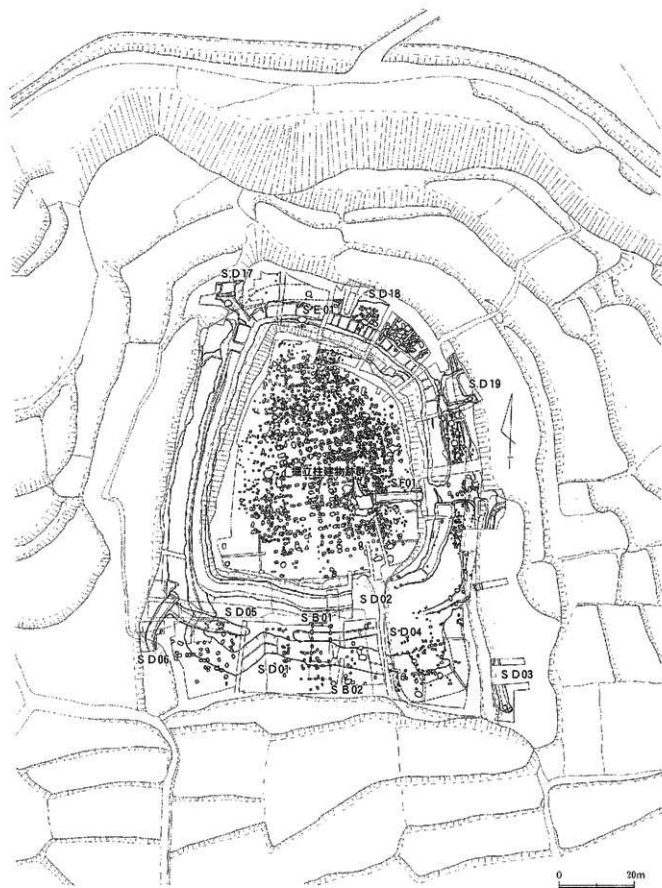


図6 千畳敷周辺検出遺構集成図（1/1,000、1～14次調査まで）



明治22年の宇土城跡周辺の地籍図と縄張り図を比較すると、多少地形の変化が見受けられるが大幅な改変は認められない。ここで注目されるのが、カラホリの配置状況である。現在のカラホリは道で途切れているようにみえるが、現地踏査の結果や昭和49年測量図から判断すれば、現在より南へ約100m程度延びていたと推定され、カラホリ東側の防御を考慮しての造作とみられる。

カラホリが三城付近だけでなく、西岡台南麓まで延びていることは注意すべきであり、厳密な意味ではあてはまらないものの、これはいわゆる「惣構え」的な配置状況といえよう。カラホリの東側には陳の前遺跡（弥生時代～中世）があり、城下に関連した遺跡と推定される。

宇土城跡の曲輪は千量敷と三城がほぼ同じ標高、広さであり、曲輪間の階層性は顕著ではない。千量敷には横堀と堅堀が配置され、三城にはそれらの痕跡がないことで千量敷が主郭と判別できるが、いずれにしても求心性の弱い並立的な構造である。

千量敷や三城の発掘調査で検出された建物跡は、全て掘立柱建物跡であり、礎石建物跡は確認されていない。また、2間×数間程度の建物が多数を占めており、小規模かつ等質的で瓦も出土していない。このような状況から領主クラスの館が曲輪内に立地したとは考え難く、名和氏の居館は西岡台南側に存在したとみられる家臣団などの屋敷群の近くに存在した可能性が高い。

#### 引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1977「肥後における名和氏と宇土氏」『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 福栗雄陽 2007「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 宇土市
- 井上 正 1959「南北朝・室町・戦国時代の宇土」『宇土市史』同上
- 宇土市史編纂委員会編 2002『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 同上
- 宇土市史編纂委員会編 2003『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 同上
- 木下洋介 1981『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅰ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇土市教育委員会
- 木下洋介 1982『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集 同上
- 木下洋介・高木恭二ほか 1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 同上
- 木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集 同上
- 高木恭二・木下洋介 1985『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集 同上
- 高木恭二・木下洋介ほか 2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第9集 同上
- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 同上
- 富樫卯三郎ほか 1982『宇土城跡三ノ丸跡』弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査 宇土城跡三ノ丸跡発掘調査団
- 藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2001『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上
- 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 同上
- 藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上
- 藤本貴仁 2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上
- 藤本貴仁 2005『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上
- 藤本貴仁 2007『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集 同上
- 藤本貴仁 2008『新貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集 同上

## 第3章 平成11年度(第11次)発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査の概要(図7~11)

11次調査は平成11年6月から同12年2月までの約9ヶ月間にわたり断続的に実施した。調査地は10次調査に引き続き千疊敷から一段下がった平坦面東側の帯曲輪状平場(11次東調査区)と、千疊敷北側の10次調査区に隣接する斜路跡(11次西調査区)である。その他、10次調査1~4区のセクションベルトの掘り下げや、10次調査に引き続き井戸跡SE01、竪堀跡SD18(次章にて報告)についても補足的な調査を行った。

東調査区では、横堀跡SD02の調査を中心とした。当該調査範囲の一部については、平成5年度の7次調査と同9年度の9次調査でトレンチ調査を実施し、SD02が存在することは事前に確認しており、10次調査で設定した1~4区に引き続き、11次調査ではセクションベルトを挟んで2つの調査区(5・6区)を設定した。

表土剥ぎ後にSD02を検出したが、一部に遺構が検出できない範囲があり、別の遺構とみられる落ち込みが認められた。SD18と同様にSD02に直交する竪堀跡の存在が予測されたため、本遺構をSD19とした。その後、6区でSD02を検出し、写真撮影を行った後、SD02の埋土の掘り下げに着手した。

SD02とSD19にまたがるセクションベルトで堆積土の状況を精査したところ、遺構の重複関係が確認できず、SD02とSD19は同時期に堆積したことが判明した。このことから、両遺構の掘削時期の前後関係は明確ではないものの、廃絶時期は同時期と考えられる。その他、SD02からSD19に向かって下降する排水溝状遺構や、内側壁面で足掛け用と推測される掘り込み跡SX04を確認した。

一方、西調査区は千疊敷の搦手と想定される地点であり、昭和40~50年代まで農作業道路として利用されていた。本調査区については、搦手に関する遺構が残存していないかを主眼におき確認調査を実施したが、関連するとみられる明確な遺構は確認できなかった。

出土遺物については、土師質土器の坏や皿が数多く出土し、瓦質土器の摺鉢や火鉢、備前焼の摺鉢、中国産の青磁・白磁・染付の碗や皿、銅銭、五輪塔の残欠、鉄砲玉、鏡式不明の弥生小型仿製鏡片などが出土した。

#### (2) 調査日誌抄

平成11年		9月8日	SD02下層で礎が集中する地点を確認。
6月3日	前年度の10次調査で検出した井戸状遺構SE01の追加調査開始。	15日	5区SD02完掘状況写真撮影。
16日	平成11年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。	17日	竪堀跡SD19とSD02との境界部分に水抜き状の溝跡検出。6区SD02埋土掘り下げ開始。
8月2日	東調査区に5区と6区を設定し、表土剥ぎ開始。平成5・9年度調査トレンチ埋戻し土を排上。	30日	第2回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。
10日	遺構検出作業開始。	10月6日	6区SD02下層で石塔残欠群が出土、写真撮影。
18日	横堀跡SD02を検出。	16日	6区の精査、写真撮影。
22日	遺構検出終了、写真撮影。	19日	10次調査で検出した竪堀跡SD18の調査を再

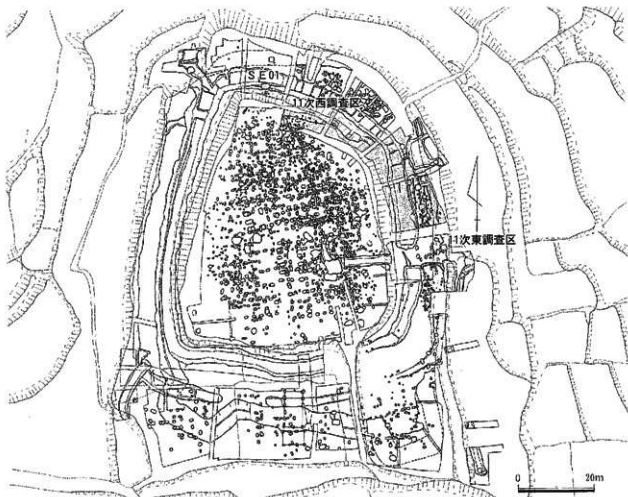


図7 11次調査区配置図 (1/1,000, アミは調査範囲)

	平成12年
開。	
21日 SD18の精査及び写真撮影。	1月14日 西調査区の表土下層で弥生小窓仿製鏡片出土。
11月5日 1～4区セクションベルト掘り下げ開始。	21日 SD18セクションベルト掘り下げ。
24日 第10・11次発掘調査成果の記者発表。	3月2日 第4回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。
28日 発掘調査現地説明会(参加者約80名)。	
12月16日 第3回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。	
22日 千景堂北側斜路部分の調査開始。	

## 第2節 検出遺構

SD02 (図8・9、図版1～3)

検出規模は、長さ25.2m、幅3.9～5.7m、底幅2.3～4.0m、深さ1.1～1.7m。断面は逆台形を呈し、壁面の傾斜角度は内側で約55°、外側で約45°で、千景堂とSD02底面の比高差は約7mである。6区南側の虎口付近が最も幅が広いことから、虎口の守りを意図した可能性がある。

調査区北側では、底面で北側に落ち込む3箇所の段差が存在する。その比高差は約20～30cm程であり、5区北側が最も標高が低く、30.3mを測る。また、本区の東側にSD19が存在し、SD02の外側壁面の一部は検出できなかったが、両遺構にまたがる上層断面を精査した結果、時期の前後関係は認められないことから、並存していた可能性が高い。

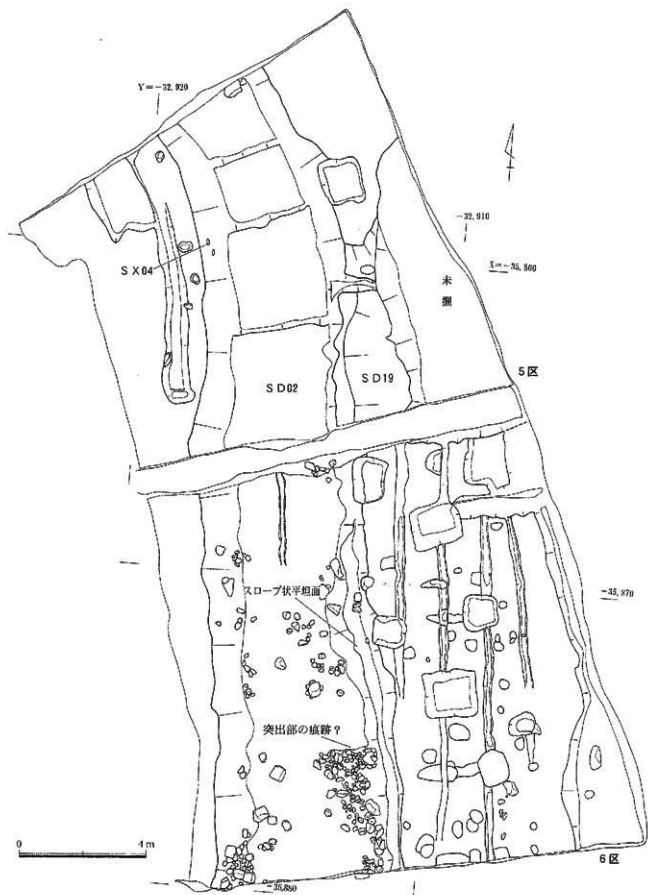


図8 11次東調査区遺構配置図 (1/120)

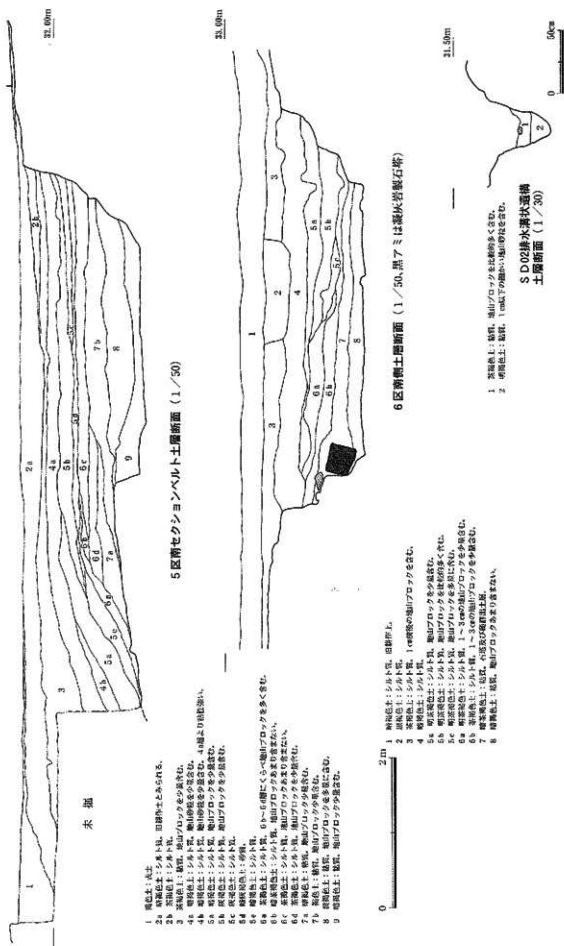


図9 11次調査区土層断面図 (1/30, 1/50)

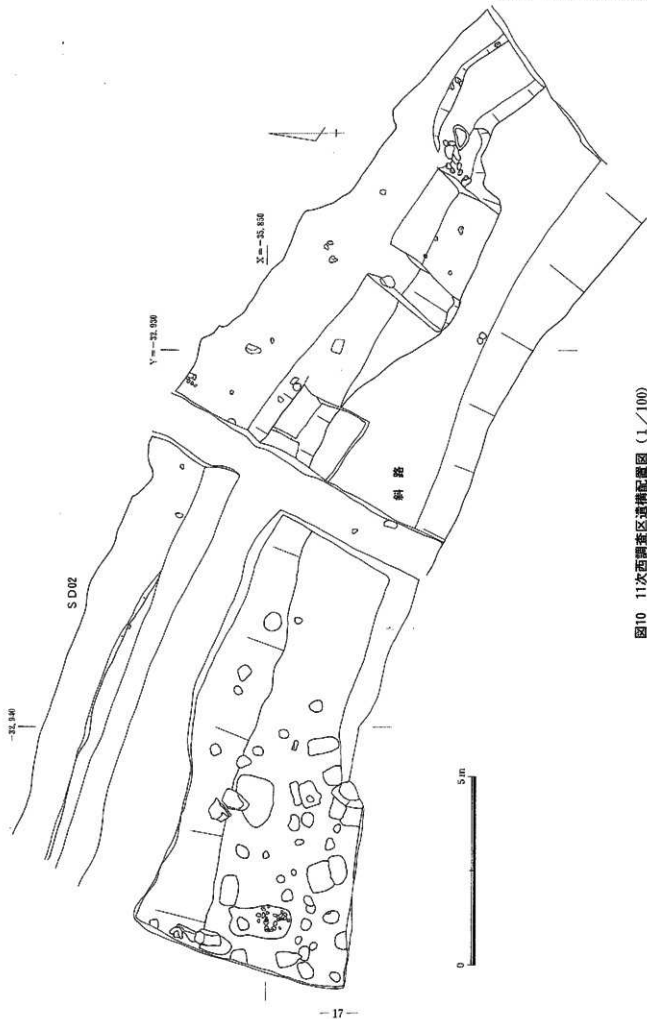


図10 11次西調査区遺構配置図 (1/100)

6区では外側壁面にSD19から通じるスロープ状の平坦面を確認した。幅0.4m程度で、SD02とSD19が交わる付近からSD02外側壁面にかけてスロープ状に南側へ向かって徐々に高くなっており、虎口付近で上りきるように造作されている。また、10次調査で検出した突出部の痕跡とみられる基盤層(地山)の掘り残しを確認した。

その他、SD19と交わる地点では、長さ1.3m、幅0.4m、底幅0.1m、深さ0.4mの排水溝状遺構を検出した。底面はSD02側からSD19に向かって下降しており、配置状況や形状から判断してSD02の水抜き用溝として利用されたとみられる。また、内側壁面に足掛け穴とみられる2箇所の掘り込み跡SX04を確認した。

埋土より中世の土師質土器の坏や皿、瓦質土器の火鉢・播鉢・甕、備前焼の播鉢、中世の白磁・青磁・染付の碗や皿、銅銭、埴壇、五輪塔などの石塔残欠が出土した。また、虎口に近い範囲では、城破りに伴うとみられる石塔残欠や安山岩が集中して出土した。

#### SD19 (図8・9、図版1~3)

本調査で初めて検出した千疊敷北東側に位置する堅堀跡である。SD02と接しており、北東-南西方向に主軸をもつ。検出規模は、長さ5.6m、幅6.4~9.9m、深さ1.3mで、断面は逆台形を呈する。SD02と接しているものの、堆積土の状況からは重複関係が確認されなかったことから、前述したように並存していた可能性が高い。

#### SE01 (図11、図版4)

10次調査で検出した素掘りの井戸跡である。SD02の千疊敷側壁面の犬走り状に掘り残された段差上から検出した。

検出規模は長径2.3m、短径1.4m、深さはSD02底面より3.7m、SD02上端より5.2mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、足掛け穴とみられる掘り込みを西側壁面で確認した。また、埋土上層より安山岩の巨石が投棄された状態で出土したが、当該巨石群の上位は地山掘削土で満たされており、巨石下位も同様の掘削土が堆積していた。このことは、井戸を廃絶するときに地山掘削土や巨石を投棄することで一気に埋めたことを示唆する。明確な重複関係は認められないものの、SD02掘削時に生じたとみられる排土が本遺構の埋め戻しに利用されたと想定される。

埋土より土師質土器の坏、瓦質土器の播鉢、染付の碗が出土した。

## 第3節 出土遺物

#### SD02 (図12・13、図版5・6)

1~9は土師質土器で、1~6は坏、7~9は皿である。これらの底部は全て糸切り離しであり、調整は回転ナデ技法である。磨耗のため調整技法が不明な6・9も、その他の土師質土器のプロポーシオンや焼成の状態から判断して、同様とみられる。1~6については、口縁径より8cm前後の1・2や9cmから10cm弱の3~6の大きく2つに分類できる。器高も口縁部に比例して後者が前者よりも高い。7~9の口径は11~12cm程度であり、底部径も坏より一回り大きい。

10~20は瓦質土器で、10~12は火鉢、13~19は播鉢、20は甕である。10~12は口縁部に1~2条の突帯が廻り、肥厚する口縁部端部と突帯間に菊文のスタンプが施される。10・12は深鉢形、11は浅鉢形の

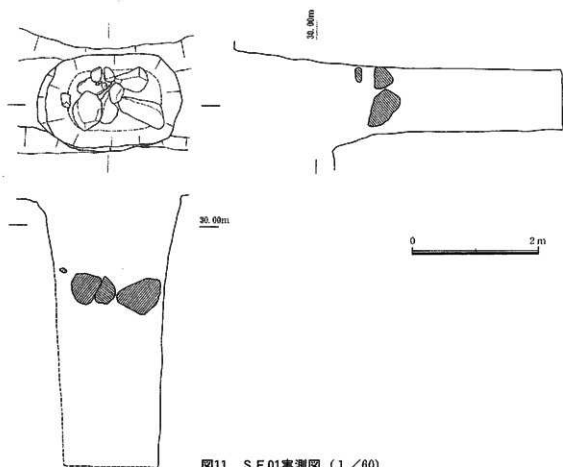


図11 SE01実測図(1/60)

ものであろう。13～19はユビオサエヤナデにより整形し、内面には数本単位の播目を施す。底部付近まで残存している資料には、使用による摩滅がみられる。19は口縁部内面に粘土帯を貼り付けて整形しているため、体部より器壁が厚い。20は焼成が良好で須恵質である。連続する山形のタタキを施し、内面はケズリを施す。

21・22は増埴。皿状を呈し、器壁が厚い。内面から口縁部外面にかけて地金を強熱融解した際に生じた不純物が付着している。

23は備前焼の播鉢である。口縁部は断面三角形状を呈しており、播目は10本単位で底部側から口縁部側へ施される。24は16世紀代の中国製の施釉陶器壺(四耳壺?)で、内外面とも施釉されている。

25～27は白磁で、25・26は皿、27は碗である。25は口縁部の釉薬を掻き取ったもので、13～14世紀前半。26は景徳鎮窯系の端反り皿で、16世紀代。27は中国製で壺付から高台内にかけては部分的に釉を剥ぎ取っている。12～13世紀代。

28・29は青磁の碗で、いずれも龍泉窯系である。28は口縁部外面に雷文帯を施したもので、14世紀末～15世紀中頃。29は外面に鎮蓮弁文が施文されており、13～14世紀中頃。

30～32は染付で、30・31は碗、32は皿で、全て景徳鎮窯系である。30は外面に蒸葉文を施したもので、16世紀前半から中頃。31は見込が盛り上がるいわゆるマントーシン型で、見込に人物が描かれ、高台内に「大明年造」の銘がある。16世紀後半。32は見込に玉取獅子とみられる文様が描かれ、壺付は釉剥ぎを施す。16世紀前半から中頃。

33は石塔火輪、34は銅銭である。33は阿蘇溶結凝灰岩製で、頂部に空風輪を載せるためのホゾ穴がある。大きさから判断してミニチュアとみられる。34は方孔の元寶通宝で、中国北宋の元豊年間(1078-



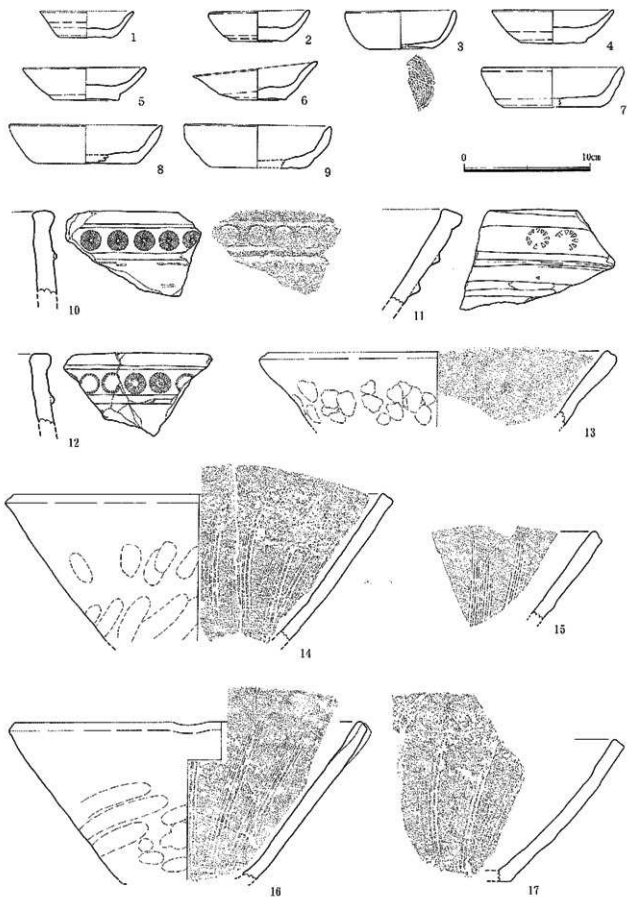


圖12 S D02出土遺物圖1 (1/3)

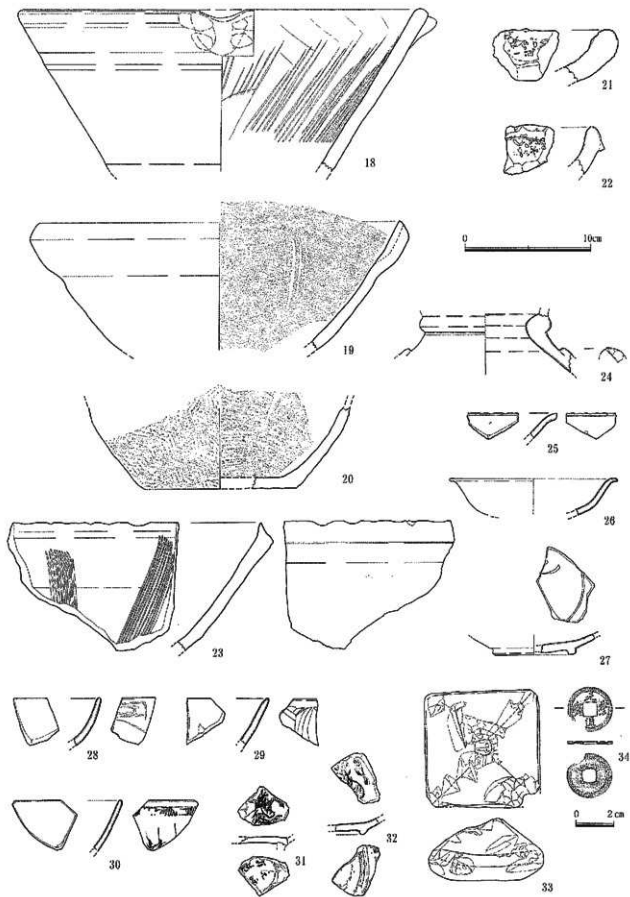


図13 SD02出土遺物図2 (34は1/2。それ以外は1/3)

1085) に鈔造されている。

SE 01 (図14、図版6・7)

35~39は土師質土器の坏で、全て底部糸切り離しである。35~37・39の口径は9cm前後とほぼ同じ大きさであり、38は11.0cmとやや大型である。36の底面には指頭押圧痕、口縁部周辺には油痕が残り、灯

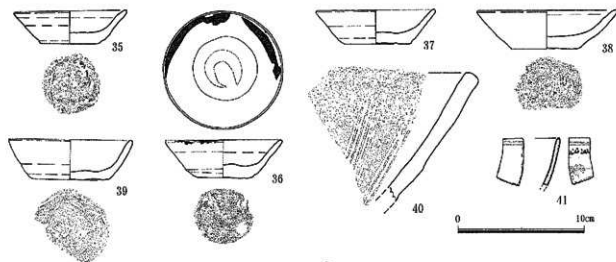


図14 SE 01出土遺物 (1/3)

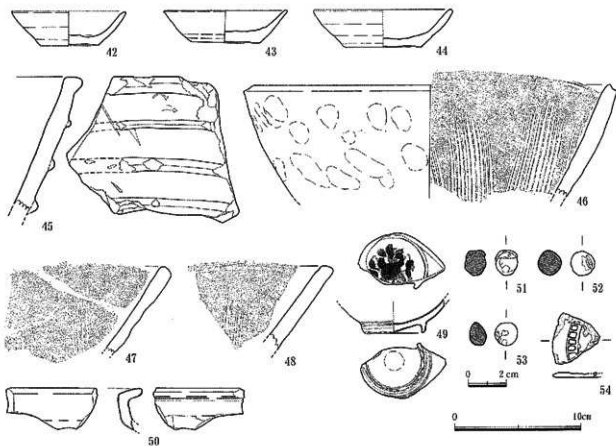


図15 遺構外出土遺物 (51~54は1/2、その他は1/3)

明具として使用されている。

40は瓦質土器の播鉢である。ナデ後、5本単位の播目を施す。41は染付の碗で、口縁部外面に波濤文が施文されている。16世紀前半から中頃。

#### 遺構外出土遺物(図15、図版7)

42～44は土師質土器の坏。内外面とも回転ナデで、底部糸切り雕しを施す。45～48は瓦質土器で、45は火鉢、46～48は播鉢である。45は深鉢形とみられ、口縁部から体部にかけて3条の突帯が巡る。46～48の外面はユビオサエやナデ、内面は底部から口縁部に向かって播目を施す。

49・50は陶磁器で、49は染付の碗、50は青磁の香炉である。49は景德鎮窯系の碗で、疊付は軸剥ぎされており、見込に花卉文が描かれている。16世紀末から17世紀初頭。50は龍泉窯系の香炉で、口縁部が外側に大きく屈曲している。14世紀後半から15世紀中頃。

51～53は鉄砲玉である。直径1.2～1.3cmとほぼ同じ大きさであり、51には笠状の付着物がある。54は弥生小型仿製鏡である。鏡式は不明であるが、平縁で櫛歯文が確認できる。鏡背には赤色顔料が付着している。

表3 11次調査出土遺物観覧表 (カッコ内の数字は復元値を示す)

標目 番号	東洋 番号	器種	胎土	焼成	色調 (内/外)	器調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
									口径	高さ		
1	11-25	土師質土器・杯	角四石、長石、1mm程度の砂粒	良好	明灰色/黄褐色/土灰	ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	6区	6	7.1	2.1	4.1	
2	11-17	土師質土器・杯	角四石、1mm程度の砂粒	良好	黄/土灰	深ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	2区	埋土	8.0	2.5	4.3	底部に指頭押印痕
3	11-40	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒	良好	黄/灰黄褐色	皿ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	5区	5	(8.8)	3.0	-	底部に指頭押印痕
4	11-19	土師質土器・杯	角四石、1mm程度の砂粒	良好	黄/黄褐色	ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	2区	埋土	9.6	2.6	3.4	底部に指頭押印痕
5	11-18	土師質土器・杯	雲母、角四石、1mm程度の砂粒	良好	黄/黄褐色	ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	2区	埋土	9.7	2.7	3.4	底部に指頭押印痕、内面に付當物
6	11-11	土師質土器・杯	1~6mmの砂粒、雲母、角四石、長石	やや不良	黄/黄褐色	器底のため不明/蓋縁のため不明	3区	埋土	9.8	3.1	4.6	
7	11-24	土師質土器・皿	角四石、1mm程度の砂粒	不良	黄褐色/黄褐色	深ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	5区	2	(11.2)	3.2	8.4	
8	11-21	土師質土器・皿	角四石、長石、1mm程度の砂粒	やや不良	土灰/土灰	深ナズリ/椀ナズリ、蓋縁切り無し	6区	埋土	(12.0)	3.1	8.4	
9	11-29	土師質土器・皿	1mm程度の砂粒	やや不良	黄/黄褐色	器底のため不明/器縁のため不明	5区	8	(11.0)	3.4	7.7	
10	11-42	瓦質土器・水鉢	角四石、1mm程度の砂粒	良好	淡灰褐色/淡灰褐色	ナズリ/ナズリ	6区	8	-	6.6	-	
11	11-44	瓦質土器・水鉢	角四石、石灰、1mm程度の砂粒	良好	土灰/黄褐色/黄褐色	ナズリ/ナズリ	5区	2	-	7.6	-	
12	11-43	瓦質土器・水鉢	角四石、1mm程度の砂粒	良好	黄/黄褐色/黄褐色	ナズリ/ナズリ	6区	8	-	5.7	-	
13	11-34	瓦質土器・椀鉢	1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	6区	4	28.2	22.5	9.9	
14	11-49	瓦質土器・椀鉢	1mm以下の砂粒	やや不良	灰白/灰白	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	6区	4	(30.5)	11.6	-	
15	11-35	瓦質土器・椀鉢	1mm程度の砂粒	良好	灰/灰	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	6区	8	-	27.1	-	
16	11-46	瓦質土器・椀鉢	角四石	良好	灰白/灰白	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	5区	5	(23.2)	12.5	-	器目は5本単位
17	11-45	瓦質土器・椀鉢	角四石、1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	6区	4	-	11.4	-	内面に使用痕
18	11-32	瓦質土器・椀鉢	1~5mmの砂粒、小磯、雲母	良好	黄/黄褐色	ナズリ、器目/ナズリ、指オサエ	5区	2	31.8	22.8	-	器目は4本単位
19	11-38	瓦質土器・椀鉢	1~2mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ナズリ、器目/ナズリ	6区	7	(23.8)	-	-	
20	11-45	瓦質土器・表	1~2mm程度の砂粒	良好	灰黄/灰黄褐色	ナズリ/タタキ、ナズリ	5区	5	-	6.4	(12.2)	器底の不潔物付着
21	11-26	埴壇	1~5mmの砂粒が多量	良好	灰黄/灰黄褐色	不明/ナズリ	6区	5	-	14.3	-	器底の不潔物付着
22	11-27	埴壇	1mm程度の砂粒	良好	黄/黄褐色	不明/ナズリ	5区	6	-	3.8	-	器底の不潔物付着

SD02 (陶磁器)

標目 番号	東洋 番号	器種	胎土	焼成	色 調 (内面/外面もしくは輪縁/胎土)	器調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
									口径	高さ		
23	11-14	前期焼・椀鉢	黄帯	良好	内:灰赤~暗赤灰/外:赤帯~灰赤	ヨコナズリ、器目/ヨコナズリ	5区	6	-	10.3	-	器目は10本単位
24	11-22	黒胎陶器・盥	緻密	良好	黄:黒帯~暗赤帯/胎:灰白~淡黄	器底/器縁	5区	2	-	14.7	-	
25	11-29	白磁・皿	緻密	良好	黄:灰白/胎:灰白	器底/器縁	5区	4	-	12.0	-	
26	11-28	白磁・皿	緻密	良好	黄:灰白/胎:灰白	器底/器縁	6区	3	(13.2)	22.0	-	泉佐野陶器系、皿E群
27	11-5	白磁・碗	緻密	良好	黄:明灰灰/胎:灰白	器底/口クロケズリ、器縁	6区	8	-	11.6	6.2	
28	11-2	青磁・碗	緻密	良好	黄:明灰灰、緑灰/胎:灰白	器底/器縁	6区	5	-	13.7	-	龍泉系系、輪C-II類
29	11-3	青磁・碗	緻密	良好	黄:青子/胎:灰白	器底/器縁	5区	2	-	14.7	-	龍泉系系、輪B-I類
30	11-1	灰付・碗	緻密	良好	黄:明灰灰/胎:灰白	器底、器縁/器縁	6区	4	-	14.0	-	泉佐野陶器系
31	11-31	灰付・碗	緻密	良好	黄:明灰灰/胎:灰白	器底/器縁	5区	2	-	10.8	-	泉佐野陶器系
32	11-41	灰付・皿	緻密	良好	黄:明灰灰/胎:灰白	器底、器縁/器縁	5区	2	-	11.2	-	泉佐野陶器系

## SD02 (その他)

探目 番号	発掘 番号	種類	材質	色調	調査地点	層位	法量 (cm)	備考
33	11-10	石塔	阿蘇粘結凝灰岩	灰黒	6区	5	1.0	五輪塔火輪(ミニチュア?)
34	11-54	銅銭	銅銭	暗緑灰	6区	上層	2.4	0.2

## SE01 (土器)

探目 番号	発掘 番号	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査地点		法量 (cm)		備考
							調査地点	層位	口径	高さ	
35	11-6	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、雲母、角閃石	良好	橙/橙	凹転ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	上層	9.0	2.6	4.7
36	11-7	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、角閃石	良好	橙/橙	凹転ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	上層	9.2	3.0	4.4
37	11-21	土師質土器・水	1~3mm程度の砂粒	良好	橙/橙	凹転ナデ?/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	上層	0.4	2.7	3.4
38	11-8	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒、角閃石	良好	浅黄緑/浅黄緑	ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	下層	11.0	3.1	5.2
39	11-20	土師質土器・杯	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	こがれ色/こがれ色	凹転ナデ?/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	上層	9.8	3.2	6.2
40	11-33	瓦質土器・椀鉢	角閃石、1~2mm程度の砂粒	良好	浅黄緑/浅黄緑	ナデ、斜目/ナデ	2区	下層	-	残10.2	-

## SE01 (陶磁器)

探目 番号	発掘 番号	器種	胎土	焼成	色調(内面/外面もしくは胎面/胎土)	器面調整(内/外)	調査地点		法量 (cm)		備考	
							調査地点	層位	口径	高さ		底径
41	11-30	袋付・碗	緻密	良好	緑・明青灰/緑・灰白	緑釉/施釉	2区	埋土	-	残3.7	-	京徳新窯系

## 透櫛外出土遺物(土器)

探目 番号	発掘 番号	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査地点		法量 (cm)		備考
							調査地点	層位	口径	高さ	
42	11-9	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒	良好	こがれ・橙/橙	凹転ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	3区	-	8.9	2.8	4.6
43	11-16	土師質土器・杯	角閃石、雲母、1~2mm程度の砂粒	良好	橙/橙	凹転ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	-	0.7	2.7	5.5
44	11-23	土師質土器・水	角閃石、1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	凹転ナデ/凹転ナデ、底部糸切り履し	2区	-	(11.0)	3.0	6.2
45	11-47	瓦質土器・水鉢	1mm程度の砂粒	良好	こがれ/灰黄	ナデ/ナデ	5・6区	-	-	16.8	-
46	11-15	瓦質土器・椀鉢	1mm以下の砂粒	良好	灰白/灰白	ケズリ、ナデ、斜目/指オサエ、ナデ	5・6区	-	(20.4)	残8.9	-
47	11-38	瓦質土器・椀鉢	1mm以下の砂粒	やや不良	灰白/灰白	ナデ、斜目/指オサエ、ナデ	5・6区	-	-	残7.0	-
48	11-37	瓦質土器・椀鉢	1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ナデ、斜目/指オサエ、ナデ	1区	-	-	残6.7	-

## 透櫛外出土遺物(陶磁器)

探目 番号	発掘 番号	器種	胎土	焼成	色調(内面/外面もしくは胎面/胎土)	器面調整(内/外)	調査地点		法量 (cm)		備考	
							調査地点	層位	口径	高さ		底径
49	11-53	袋付・椀	緻密	良好	緑・明青灰/緑・灰白	施釉/施釉	5・6区	-	残2.7	4.8	-	京徳新窯系、藤C群
50	11-4	青磁・空押	緻密	良好	藍・オリーブ灰/胎・灰白	藍釉/施釉、施釉	3区	-	残3.3	-	-	藤原系、藤原系

## 遺構外出土遺物 (その他)

探 目 番 号	家 割 番 号	種 類	材 質	色 調	調査地点	層位	法 量 (cm)		備 考
							直径	厚さ	
51	11-32	鉄砲玉	鉛	灰褐	6区	-	1.2	-	整状の付着物
52	11-51	鉄砲玉	鉛	灰白	6区	-	1.3	-	
53	11-50	鉄砲玉	鉛	灰白	6区	-	1.2	-	
54	11-35	銃	青銅	暗緑灰、オリーブ灰	西園基区	-	残存径2.1	0.3	

## 第4節 小 結

本調査では史跡整備に伴い、千疊敷を圍繞する横堀跡SD02を中心とする発掘調査を実施したが、10次調査で確認した縦堀跡SD18と同様、SD02と直交方向に接する縦堀跡SD19を検出した。以下では、本調査におけるSD02の調査結果や、SD19との関係に主眼をおいてまとめた。

本調査でも10次調査でみつかった堀底の段差を検出したが、これは千疊敷北側の約60mの範囲にわたって凹部や凸部、段差がみられる未完成範囲の東端である。これより南側には通常の断面逆台形の箱堀であるが、後述する理由から当該範囲においても未完成であった可能性が高い。

SD02底面の遺存状態には明らかな違いがみられ、5区北側の深さが最も深い範囲は底面に凹凸がほとんどなく、比較的きれいに整形されているのに対し、先述した段差を境として、南側においては整形されているとは言えないように凹凸があり、検出面からの比高差も北側に比べて浅いことは注目すべきであろう。また、10次調査で検出した突出部の痕跡とみられる高まりも存在する。このことは、断面逆台形の形状を呈しているとはいえ、今回の調査範囲についても千疊敷南側や西側でみられるような完成した箱堀ではなく、未完成の区間であった可能性が高いといえよう。

また、SD02とSD19が掘削された時期の前後関係については、SD02がSD19を避けるようにしてやや内側に湾曲しているような配置状況であることや、SD02側からSD19側に向かって傾斜する排水溝状遺構の存在から推測すれば、SD19の完成後、SD02が掘削された可能性が高いとみられる。排水溝状遺構の存在は、SD02とSD19が同時期に機能していたことを傍証するものであろう。土層堆積の状況から両者に重複関係はみられないことから、廃城の時期まで並存していたものと想定される。

なお、SD19に関しては、当初の段階では検出規模がかなり大きいことから、縦堀とは断定できず、縦堀状遺構として報告しているが、14・15次調査と現況地形の観察の結果、本遺構は西岡台の丘陵裾部にまで達する幅約10mの大規模な縦堀跡であることが判明している。

### 引用・参考文献

- 藤本貴仁 2002『宇土城跡(西岡台)』V 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 宇土市教育委員会  
 藤本貴仁 2003『宇土城跡(西岡台)』VI 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上  
 藤本貴仁 2004『宇土城跡(西岡台)』VII 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上  
 藤本貴仁 2007『宇土城跡(西岡台)』IX 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上





## 第4章 平成12年度（第12次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図16・17）

平成12年度（12次）発掘調査は、千疊敷東側の虎口付近に調査区を設定した。11次調査の5・6区に引き続き当該調査区を7区とし、一時的な休止期間を含めて平成12年5月から同11月の約7ヶ月間にわたり調査を実施した。

本調査の主な目的は、千疊敷へと通じる道跡SF01の内容把握である。本調査区の周辺では、平成3年度（5次）調査や同5年度（7次）調査などで部分的な調査を実施しており、調査の結果、千疊敷の虎口が東側に位置することを確認し、スロープ状に延びて千疊敷へといたる通路として機能していたことが既に判明していた。このことから、周辺は千疊敷の虎口という極めて重要な場所であり、史跡整備のうえで内容を把握する必要がある。

調査の結果、近代に建立された記念碑の基礎工事によって一部に削平を受けていたが、おおむね遺存状況は良好で、城の生命を絶ち切る儀礼行為「城破り」の際に投げ込まれたと推測される数多くの石塔残欠が出土した。また、盛土整地が施され、少なくとも路面が2時期にわたることが判明したほか、本整地土層上面において、踏石や地覆石とみられる石材を伴う門跡SB23を検出した。

その他、本調査では10次調査で検出した整堀跡SD18の補足調査を11次調査に引き続き実施し、その内容がおおむね明らかになったことから本章で報告する。

#### （2）調査日誌抄

平成12年		27日	S F01第5次調査（平成3年度）後の埋戻し土を拂土。
5月23日	整堀跡SD18遺構保護盛土拂土。		
24日	SD18セクションベルトの掘り下げ。	8月11日	S F01セクションベルト実測。
6月5日	SD18下層で検出した古墳時代首長居館に伴う塚跡SD01埋土掘り下げ。	17日	S F01埋土掘り下げ（同月22日まで、他遺跡の発掘調査で一時的調査休止）。
8日	SD18周辺の実測図作成用杭打ち、平面図実測開始。	9月14日	第2回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。
17日	平成12年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。	11月14日	S F01埋土掘り下げ再開。
7月21日	千疊敷虎口付近に調査区（7区）を設定、表土剥ぎ（同月20日まで）。	18日	S F01で門跡（SB23）検出。
		21日	S F01調査状況写真撮影。

### 第2節 検出遺構

#### S F01（図17～19、巻頭図版2、図版8～12）

曲輪外から千疊敷に通じる道跡であり、千疊敷の虎口にあたる。S F01の前面には、千疊敷を囲繞する横堀跡SD02が途切れ、地山成形の土橋が存在する。これまで千疊敷で確認された出入口で、戦国期に存在したことが確実なのは本遺構だけである。千疊敷北側にも農作業用として使われていた斜路が存在するが、前章のとおり、発掘調査の結果から道（勝手）であったことを証明するような遺構は検出されていない。

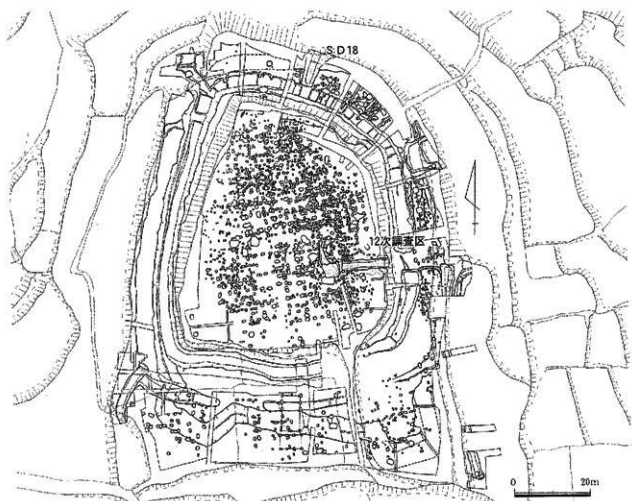


図16 12次調査区配置図 (1/1,000, アミは調査範囲)

平面形は「L」の字形で、切り通し状になっており、断面は逆台形を呈する掘り込み式枡形虎口である。検出規模は長さ22.3m、幅1.5～2.7m、底幅0.9～2.0m、壁面の傾斜角度は約85°である。東側の標高が最も低い地点と千畳敷との比高差は約2.7mである。傾斜角度約8°で西側に向けてスロープ状に高くなり、上りきったところでは千畳敷の遺構検出面と同一レベルとなる。

硬化面が認められるため、当初は素掘りの地山面が路面だったことがわかるが、後に5～30cm程度の盛土を行って整地したことが堆積土の状況から判明した。後述のように、本整地土層上面で門跡S B 23を検出したが、本遺構東側の整地土層上面は約3mにわたって平坦面を形成しており、盛土整地と門の構築が一連の作業であった可能性が高い。その他、炭化物を大量に含む土層が北側から本遺構に流れ込むように堆積しており、本土層の一部が整地土層上面を覆っていることは注目される。

埋土より中世の土師質土器の坏や瓦質土器の播鉢や火鉢、中国製の白磁、青磁、染付、五輪塔などの石塔、貝類遺体が出土した。

#### S B 23 (図17・18・20、図版11・12)

S F 01の整地土層上面で検出した門跡である。S F 01東端から約13m西側に位置しており、S F 01が北側に向かって直角に曲がる手前に配置されている。掘立柱2本一組からなり、控柱は確認されていない。S F 01の壁面をほぼ垂直に掘り込んで構築している。

検出規模は、幅2.6m、検出面からの深さ1.1m。柱の太さは抜き穴から推定して直径20cm程度で、

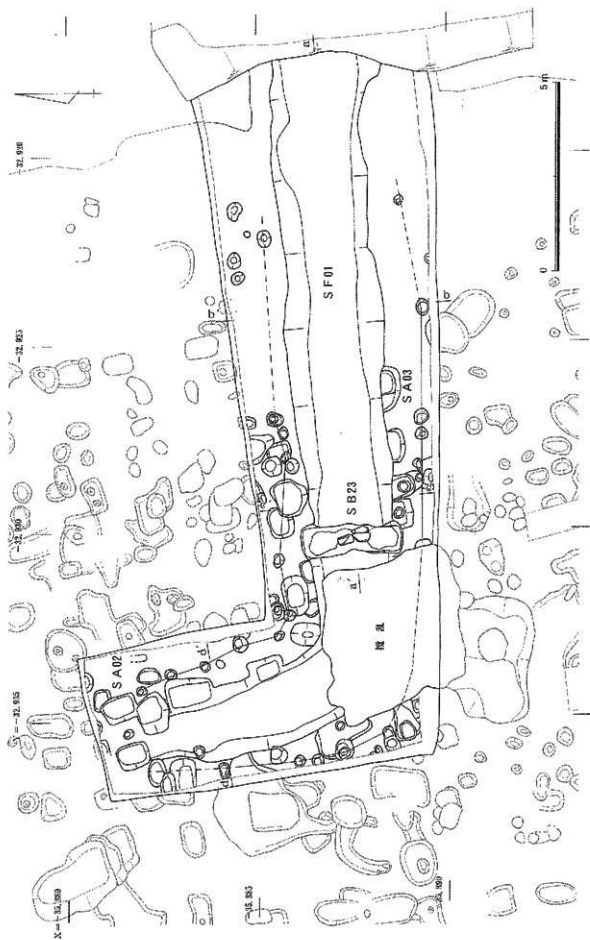


図17 SF01周辺遠構配置図(1/100)

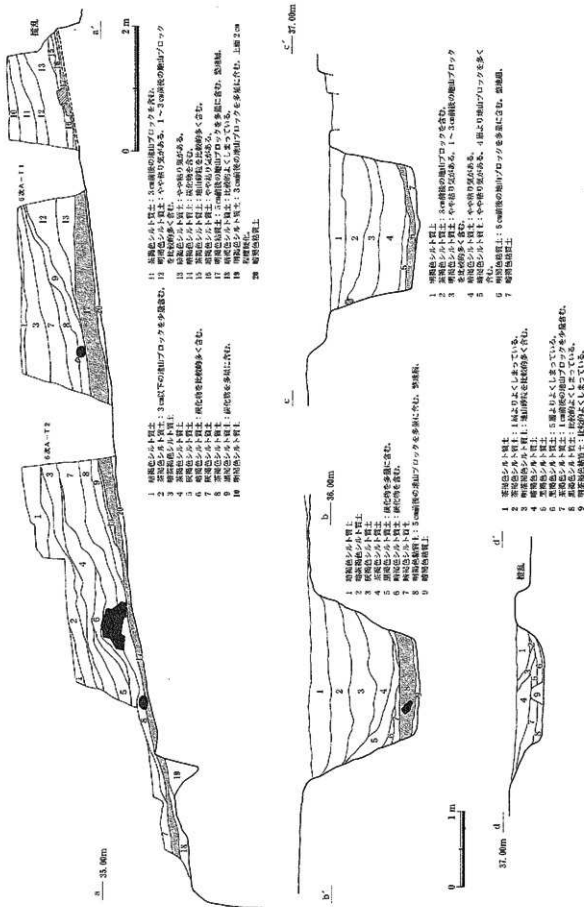


図18 SF01土層断面図 (a-a' は1/60、その他は1/50、濃いは凝灰岩製石塔、薄いは凝土製地盤)

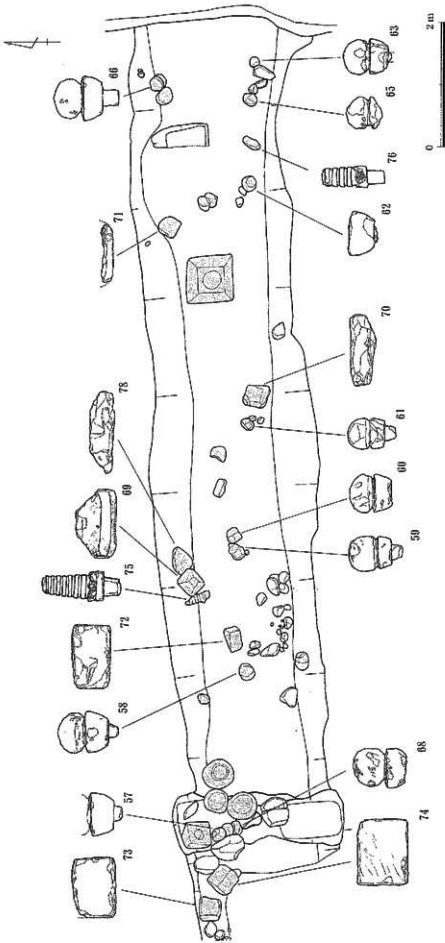
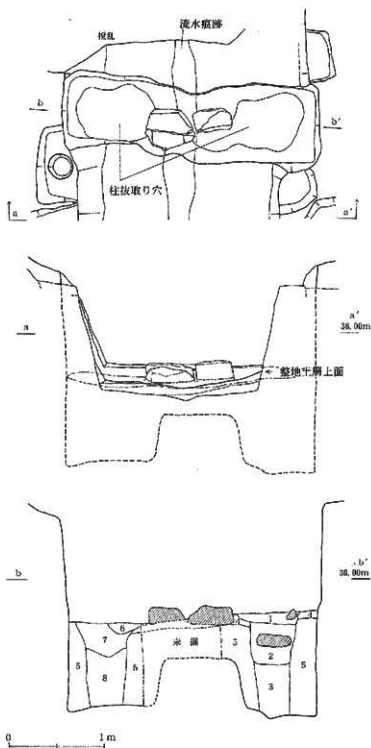


図19 SF 01石塔出土状況（1/60、了三は石塔で、実測図は1/20。番号は挿図と対応）



- 1 赤褐色シルト質土：比較的湿っており、地山ブロックを多量含む。
- 2 暗褐色シルト質土：地山ブロック及び砂礫を比較的多く含む。
- 3 黄褐色シルト質土：地山砂礫を多く含む。
- 4 暗褐色シルト質土：比較的湿っており、地山ブロックを少量含む。
- 5 暗褐色シルト質土：よく湿っており、地山砂礫及び5～10cm前後の地山ブロックを多量に含む。
- 6 赤褐色シルト質土：やや乾り気がある。
- 7 暗褐色シルト質土：やや湿りに欠ける。1～3cm前後の地山ブロックを多量に含む。2層に拡張。
- 8 黄褐色シルト質土：地山砂礫を多量に含む。3層に拡張。

図20 S B 23実測図 (1/40)

柱間は約1.8mである。柱穴間には人頭大の安山岩石材が3つ残存しているが、本来は4石存在したとみられる。配置状況から、奥側の石は地覆石とみられ、手前側の石は踏石として機能していた可能性が高い。

## S A 02 (図17、図版8)

S F 01の東から北側周縁に配された櫓列とみられるビット列である。検出規模は長さ14.6m、櫓柱穴の直径20～30cm前後と千疊敷の掘立柱建物跡の柱穴とくらべて小型で、櫓柱の間隔は一定ではないが、おおむね約1m前後である。現状では、虎口上端とは約1m離れているが、耕作などに伴う削平を考慮する必要があるため、本来は50cm程度と考えられる。

東側ではビットを検出していない範囲もあるが、この付近は盛土整地されており、他の遺構と同様に遺構検出が容易ではなかったことや、柱穴の深さが浅いため後世の改変などによって削平された可能性がある。

## S A 03 (図17、図版8)

S F 01の西から南側周縁に配された櫓列とみられるビット列で、検出規模は長さ18.4mである。S A 02と対をなしており、櫓柱穴の大きさや櫓柱の間隔もほぼ同様である。

## S D 01 (図21・22、図版13)

千疊敷を中心とする範囲に存在したとみられる古墳時代の首長居跡を圍繞する壕跡である。昭和49・50年の1次調査で検出し、以降、数次にわたる調査で確認している。後述する14次調査

では、千疊敷南東側で1次調査と同規模・同形態の張り出し部が確認された。また、千疊敷北側では堅堀跡SD18と重複している。本調査における検出規模は、幅約5m、傾斜角度は約50°である。埋土から古墳時代の土師器甕が出土した。

#### SD18（図21・22、図版13・14）

10次調査において千疊敷北側で検出した堅堀跡である。本遺構はSD02と直交方向に配置され、SD01と重複している。検出規模は長さ約9.0m、幅3.0～5.8m、底幅0.8～1.9m、深さ約2.0m、壁面の傾斜角度は約50°～60°である。SD02との境部分は、傾斜角度約55°で北側へ向って急激に落ち込んでいるが、それより北側は緩やかに下降する。

本遺構南端の埋土では、大小様々な大量の安山岩礫群が投棄された状態で出土しており、SD02との境界部分には拳大から人頭大の礫が列状に出土した。ただし、千疊敷の虎口周辺のように五輪塔などの石塔残欠は出土していない。一方、約9m北側の切岸下端付近にも同様に安山岩の礫群が切岸下端に平行するように広がっている。

また、埋土中層から上層は、土層が細かく水平に堆積しており、これらは比較的硬質であることから、意図的に版築状に突き固めながら埋められたと推測される。さらに、底面や壁面、周辺からピットを検出しており、本遺構に伴う何らかの構築物が存在した可能性もある。その他、SD02との境には排水溝状の掘り込みがあり、千疊敷北東側や同東側で検出した排水溝の可能が指摘できよう。

埋土より土師質土器の坏、中国製の白磁碗や青磁碗（『宇土城跡（西岡台）』Ⅹで報告）、三彩や染付の皿が出土した。

### 第3節 出土遺物

#### SF01（図23～25、図版15～17）

1～41は土師質土器の坏である。磨耗のため器面調整が不明なもの以外は全て内外面回転ナデを施し、底部は糸切り離しである。6と19の口縁部周辺には油痕が残り、灯明具として使用されたものであろう。同じようなプロポーションを呈するが、口径が6～8cm台の小型のもの（1～17・19）と、10～11cm台の大型のもの（18・20～36・40）に大別できる。

42～45は瓦質土器で、42～44は撞鉢、45は火鉢である。42は底部外面にケズリ、体部はユビオサエヤナデで整形し、内面は6本単位の撞目を底部から口縁部に向かって施す。底部内面には使用による磨耗がみられる。43の外面はユビオサエヤナデ、内面は5本単位の撞目を施す。2次的に火を受けている。44の外面はユビオサエヤナデ、内面に6本単位の撞目を施す。45は3つの脚が付く深鉢形の火鉢である。底部外面に1条の突帯が廻る。

52は瀬戸産の灰釉皿（卸皿）である。口縁部は強く外反し、内面に撞目を施す。口縁部から体部にかけて釉薬を施すが、それ以外は露胎。14世紀末から15世紀代。

46・47は白磁である。46は16世紀後半の景德鎮窯系の小杯で、全面施釉後、見込は蛇の目刺ぎを施す。畳付は露胎である。

48～51・53は青磁碗。15世紀後半から16世紀中頃の49は、具体的な産地が判然としないが中国製であり、残りは龍泉窯系である。48・50・53は外面に剣先蓮弁文を施すもので、15世紀後半から16世紀中頃。51は外面に界線を廻らせるもので、口縁部が短く外反する。14世紀後半から15世紀中頃。



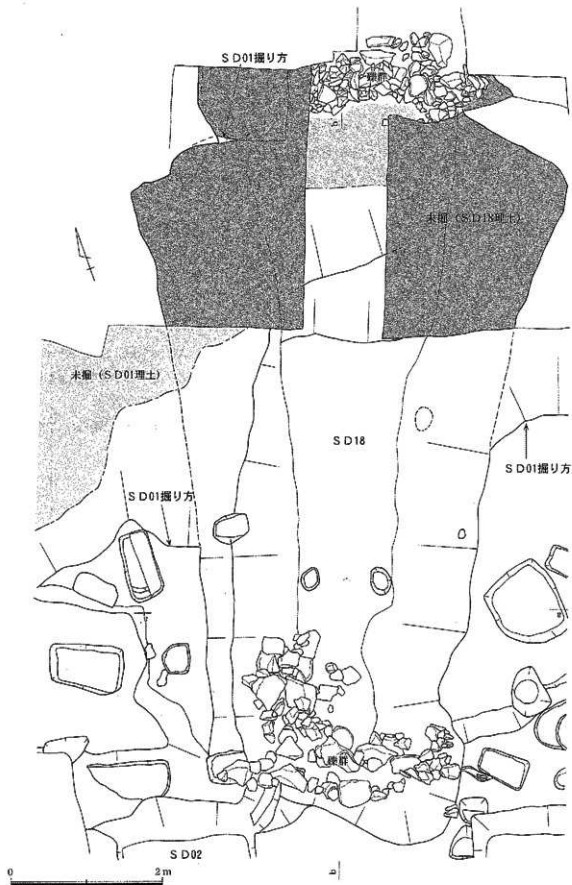


図21 SD18周辺遺構配置図 (1/50)



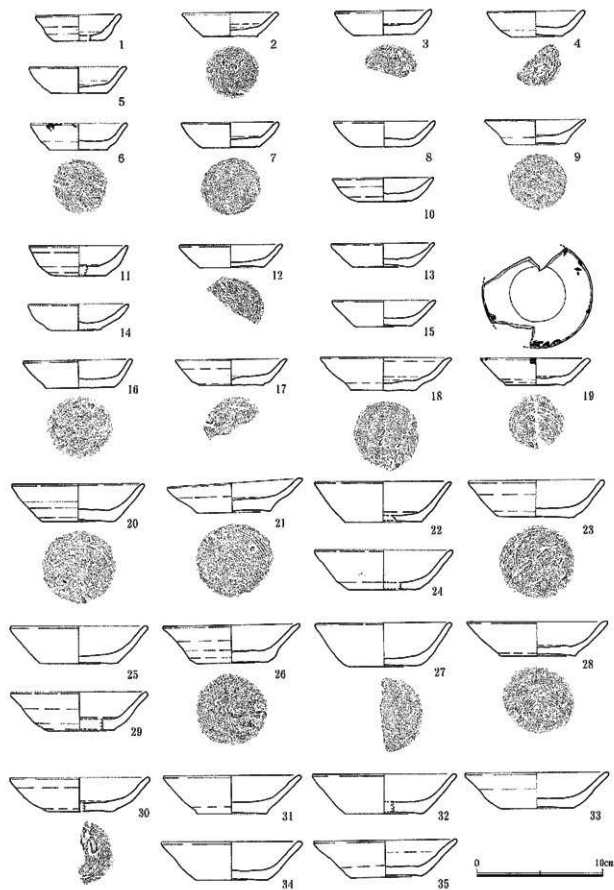


图23 S F 01出土遺物 1 (1/3)

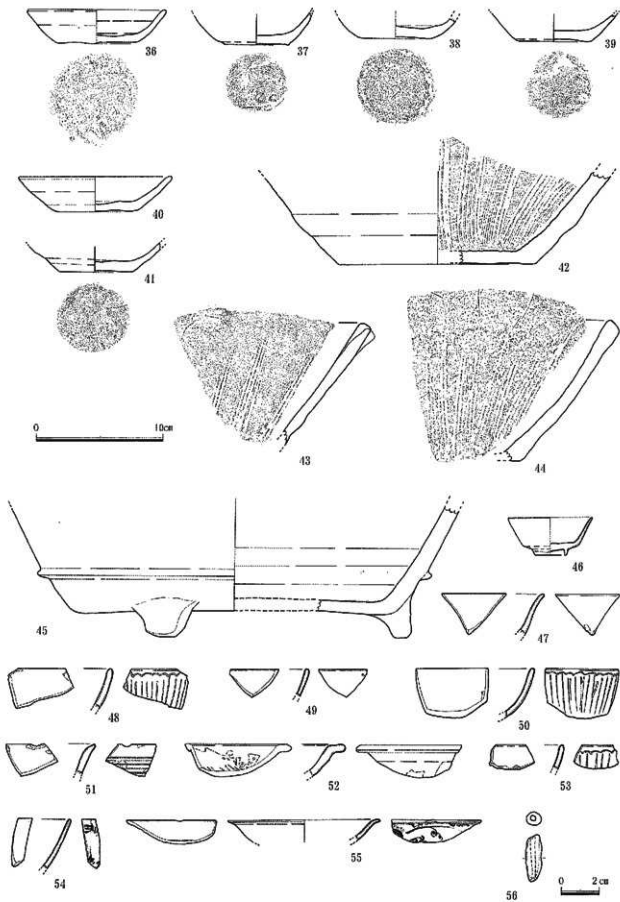


図24 SF01出土遺物2 (56は1/2、その他は1/3)

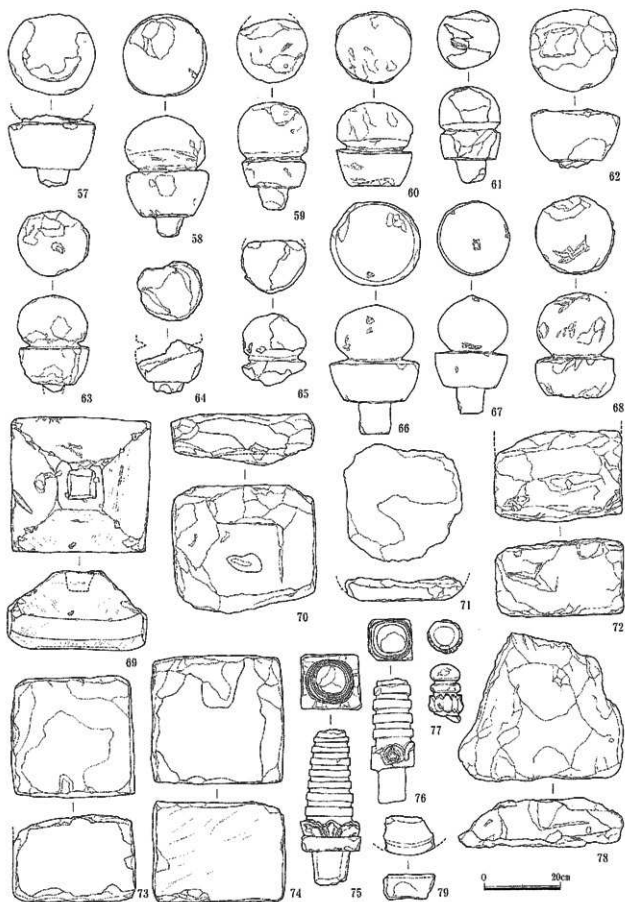


圖25 SF01出土遺物3 (1/10)

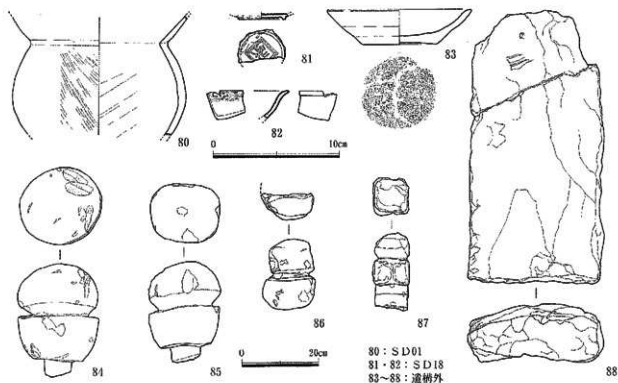


図26 S D 01, S D 18. 遺構外出土遺物 (80~83は1/3、その他は1/10)

54・55は景德鎮窯系の染付で、54は碗、55は皿である。54は外面に蕉葉文を描いており、16世紀前半から中頃。55は外面に唐草文を施文する。同じく16世紀前半から中頃のものである。

56は土鍾である。円錐状を呈し、両端部は中央部よりやや細くなっており、長軸に2~3mmほどの穿孔が施される。

57~78は阿蘇溶結凝灰岩製の石塔及び石製品で、57~74は五輪塔、75~77は宝篋印塔や宝塔などの相輪、78は不明、79は砂岩製の石臼とみられる石製品である。

57~68は空風輪で、1石で空輪と風輪を造作する。58・60・63・66~68のように空輪と風輪の大きさがほぼ同じのものが多く、59は風輪の高さが空輪の高さの1/2程度と小型である。60・70は火輪、69はほぼ原形を留めており、表面にはノミの痕跡が残存する。頂部には空風輪を差し込むためのほぞ穴がある。71は水輪、72~74は地輪である。72は1/3程度欠損しているが、73・74はほぼ原形を保っている。

75~77は宝篋印塔や層塔、宝塔などの頂部に位置する相輪である。75・76は宝珠と九輪の一部を欠損している。77は宝珠や請花などが表現されている。

#### S D 01 (図26)

80は古墳時代前期の土師器の甕である。口縁部はやや内湾気味に開く。底部を欠損するが、おそらく丸底であろう。内面はケズリやナデ、外面はハケメやナデを施す。

#### S D 18 (図26、図版17)

81は16世紀代の中国製三彩小皿である。陶器質であり、高台内に型押し「製」の文字を施す。内而

から外面にかけて黄釉を施し、高台内も一部に釉が付着するが大半は露胎。82は景德鎮窯系の染付皿で、口縁部内面に四方禪文を施す。16世紀後半。

**遺構外出土遺物（図26、図版17）**

83は土師質土器の坏で、内外面とも回転ナデを施し、底部は糸切り離しである。84～88は阿蘇溶結凝灰岩製石塔で、84～86は五輪塔の空風輪、87は宝蓋印塔や層塔などの相輪、88は板碑状の石塔である。84・85はほぼ原形を保っているが、86は1/2程度が残存する。いずれも空輪と風輪は同程度の大きさである。87は先端部付近の宝珠や九輪の一部が残存する。88は長方形状に加工されているが、銘などは施されていない。

表4 12次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

SF01(土層)

標高	発掘層	器種	土	産地	色調(内/外)	器型調整(内/外)	調査地点	器位	口径	器高	底径	備考
1	12-31	土師質土器・環	長石、1mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	磨耗のため不明/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	5	6(7)	2.1	4(1)	有残物付着
2	12-1	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	9	7.6	1.9	4.3	
3	12-24	土師質土器・環	1mm程度の砂粒、角四石	良好	淡黄緑/淡黄緑、緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	4(8)	1.9	4.8	内面に付着物
4	12-23	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	ナデ/凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	7.7	2.0	4.0	内面に付着物
5	12-15	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	4(7)	2.1	4.4	底面付着
6	12-7	土師質土器・環	1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	5	4(7)	2.1	4.6	
7	12-52	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	11	4(7)	2.0	4.6	
8	12-11	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	にぶい黄緑/緑/黄	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	3	4(5)	2.0	4.1	
9	12-41	土師質土器・環	1mm以下の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	4(7)	2.0	4.7	一部に黒付着
10	12-47	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	やや不良	緑/緑	凹紐ナデ/厚縁のため不明、底縁糸切り磨し	7区	13	4(5)	1.9	4(2)	
11	12-49	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	やや不良	緑/緑	磨耗のため不明/磨耗のため不明	7区	14	4(5)	2.1	4(4)	
12	12-30	土師質土器・環	1mm程度の砂粒、角四石	良好	淡黄緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	4(8)	1.8	5.0	
13	12-16	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	磨耗のため不明/磨耗のため不明、底縁糸切り磨し	7区	8	4(8)	2.1	4.8	
14	12-61	土師質土器・環	長石、1mm程度の砂粒	やや不良	緑/緑	ナデ/磨耗のため不明	7区	1	4(8)	2.1	3.8	
15	12-17	土師質土器・環	1mm程度の砂粒	良好	緑/淡黄緑、緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	8.2	2.1	4.4	内面に付着物
16	12-14	土師質土器・環	1mm程度の砂粒	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	8.5	2.2	5.2	
17	12-18	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/淡黄緑、緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	4(8)	2.1	5.0	
18	12-3	土師質土器・環	1mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑、緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	4	10.4	2.6	5.1	
19	12-13	土師質土器・環	1mm程度の砂粒、長石、角四石	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	8.6	2.2	4.6	縁付着
20	12-48	土師質土器・環	環、1mm程度の砂粒	良好	緑/緑	磨耗のため不明/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	13	10(1)	3.0	5.8	
21	12-40	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	12	10.7	2.6	6.2	底面、外面に付着物
22	12-53	土師質土器・環	角四石、1～3mmの砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	11	10(7)	3.2	4(6)	有残物付着
23	12-2	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	9	10.8	2.9	5.9	
24	12-44	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	14	10(7)	3.2	4(3)	有残物付着
25	12-8	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石、長石	良好	淡緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	8	10(8)	3.0	6.0	
26	12-21	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	10(8)	3.0	5.6	
27	12-45	土師質土器・環	角四石、1～2mmの砂粒	良好	緑/緑	磨耗のため不明/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	11	10(8)	3.5	4(6)	有残物付着
28	12-6	土師質土器・環	1mm程度の砂粒、長石、角四石	良好	緑/黄緑/緑、黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	5	11(10)	2.7	3.9	
29	12-43	土師質土器・環	角四石、長石、1mm程度の砂粒	良好	緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	6	10(3)	3.1	4(3)	
30	12-22	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	11(10)	2.7	3.0	内面に付着物
31	12-9	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石、長石	良好	淡黄緑/緑/黄	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	8	10.9	3.1	3.3	
32	12-10	土師質土器・環	1mm程度の砂粒	良好	緑/緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	8	11(3)	3.2	6.1	
33	12-4	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	緑/淡黄緑	凹紐ナデ/厚縁のため不明	7区	4	11(4)	2.9	5.6	
34	12-19	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒	良好	緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	11(1)	3.1	5.6	
35	12-16	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	11(3)	2.0	5.6	底面付着
36	12-42	土師質土器・環	角四石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	8	11(8)	2.7	6.3	底面付着
37	12-27	土師質土器・環	1～2mm程度の砂粒、石炭、角四石	良好	淡黄緑/淡黄緑	凹紐ナデ/凹紐ナデ、底縁糸切り磨し	7区	7	—	—	—	底面、5.0

※器位はa～n。土層



種別	家測番号	出土	土	焼成	色調(内/外)	調整調整(内/外)	調査地点	調査地点	法量(㎝)	備考
33	12-50	土師質土器・杯	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	淡黄褐色/淡黄褐色	回転ナズ/回転ナズ、底部糸切り無し	7区 6	口径 5.8	有限物付着	
38	12-12	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、角閃石	良好	緑/緑	回転ナズ/回転ナズ、底部糸切り無し	7区 3	口径 5.4		
40	12-25	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒、長石	良好	淡黄褐色/淡黄褐色	回転ナズ/回転ナズ、底部糸切り無し	7区 7	(12.1) 2.8	0.1	
41	12-26	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒	良好	淡黄褐色/淡黄褐色	回転ナズ/回転ナズ、底部糸切り無し	7区 7	口径 5.6		
42	12-30	瓦質土器・罐鉢	1mm程度の砂粒	良好	黄褐色/黄褐色	ヨコナズ、面目/ケズリ/ナズ、拵オサエ	7区 8	口径 9.0 (13.8)		
43	12-37	瓦質土器・罐鉢	角閃石、長石、1~2mm程度の砂粒	良好	緑、暗灰/緑、暗灰	ヨコナズ、面目/ケズリ/ナズ、拵オサエ	7区 5	口径 9.8	-	
44	12-38	瓦質土器・罐鉢	角閃石、長石、1~2mm程度の砂粒	良好	緑、暗灰/緑、暗灰	ヨコナズ、面目/ケズリ/ナズ、拵オサエ	7区 12	口径 11.2	-	
45	12-35	瓦質土器・火鉢	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	淡黄褐色/淡黄褐色	ヨコナズ、ナズ/ヨコナズ、ナズ	7区 8	口径 10.1 (30.6)		

※程度はa-a'の土層

S F 01 (陶磁器)

種別	家測番号	器種	施土	焼成	色調(内/外)	調整調整(内/外)	調査地点	法量(㎝)		備考
								口径	底径	
46	12-38	白磁・小杯	緻密	良好	粉：灰白/粉：灰白	施釉/施釉	7区 7	3.0	2.4	京地焼窯系、蛇の目輪小平
47	12-29	白磁・碗	緻密	良好	粉：灰白/粉：灰白	施釉/施釉	7区 3	口径 3.3	-	
48	12-32	青磁・碗	緻密	良好	粉：淡黄褐色、明黄褐色/粉：灰白	施釉/施釉	7区 7	口径 3.2	-	龍泉窯系、備B-IV期
49	12-36	青磁・碗	緻密	良好	粉：暗オリーブ灰/粉：灰	施釉/施釉	7区 3	口径 2.2	-	中国製
50	12-31	青磁・碗	緻密	良好	粉：オリーブ灰/粉：灰	施釉/施釉	7区 7	口径 3.0	-	龍泉窯系、備B-IV期
51	12-38	青磁・碗	緻密	良好	粉：オリーブ灰/粉：灰	施釉/施釉	7区 3	口径 2.5	-	龍泉窯系
52	12-35	灰磁・皿	緻密	良好	粉：オリーブ灰/粉：灰	施釉/施釉	7区 13	口径 2.6	-	龍泉窯系
53	12-33	灰磁・碗	緻密	良好	粉：淡黄褐色、暗黄褐色/粉：淡黄褐色	施釉/施釉	7区 3	口径 1.9	-	龍泉窯系、備B-IV期
54	12-30	赤付・碗	緻密	良好	粉：明緑灰/粉：灰白	施釉/施釉	7区 8	口径 3.0	-	京地焼窯系
55	12-54	赤付・皿	緻密	良好	粉：灰白/粉：灰白	施釉/施釉、施文	7区 6	(12.0) 境 1.8	-	京地焼窯系、皿B-I群

※程度はa-a'の上層

S F 01 (土製品)

種別	家測番号	種類	胎土	色調	調査地点	法量(㎝)		備考
						口径	底径	
56	12-59	土層	1mm以下の砂粒を含む	橙	7区 7	2.4	0.8	

S F 01 (石製品)

種別	家測番号	出土	種類	部位	材質	調査地点	層位*		測字	備考
							高さ	幅		
37	8	3	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 13	23.0	10.0		
38	25	13	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 17	21.7	32.1		
39	52	18	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 9	18.5	28.4		
60	9	19	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 9	20.0	21.0		
61	14	21	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 9	18.3	25.8		
62	22	26	五輪塔	空風輪	阿蘇産結晶灰岩	7区 8	23.5	13.7		

※程度はa-a'の土層

探出 番号	出土 地点	種類	部位	材質	調査地点	層位*	寸法(現状値)		別字	備考
							幅	高さ		
63	54	五輪塔	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	15.8	25.9		
64	18	-	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	埋土	17.3	14.2		
65	28	五輪塔	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	17.1	10.3		
66	55	五輪塔	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	23.8	34.2		
67	47	五輪塔	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	埋土	19.0	31.4		
68	46	4	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	13	21.1	27.9		
69	50	10	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	37.0	20.8		
70	53	22	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	38.1	13.7		
71	10	24	五輪塔	水輪	2	2	31.5	6.4		
72	48	14	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	17	33.8	25.5		
73	56	36	地輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	13	32.4	23.3		
74	60	1	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	13	35.2	28.9		
75	38	15	-	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	16.0	33.0		
76	37	27	-	相輪	7区	8	11.8	33.1		
77	12-60	-	-	阿蘇粘結凝灰岩	7区	10	9.0	13.5		
78	51	17	不明	阿蘇粘結凝灰岩	7区	7	43.7	13.5		
79	13	-	石臼	砂岩	7区	3	13.8	6.8		

\*層位はa-a'の土層

## SD 01 (土器)

探出 番号	出土 地点	器種	胎土	焼成	土	焼成	色調(内/外)	経圓調整(内/外)	調査地点	層位	法量(cm)		備考
											口径	器高	
80	12-39	土師質土器・甕	1~4mmの砂粒、小礫、雲母、ややく員	明赤焼	明赤焼/明赤焼	ケズリ、ナズリ/ハケス、ナズ	3区	埋土	3区	埋土	1	残0.5	-

## SD 18

探出 番号	出土 地点	器種	胎土	焼成	色調(内面/外面もしくは胎面/胎土)	経圓調整(内/外)	調査地点	層位	法量(cm)		備考	
									口径	器高		口径
81	12-84	三彩・小皿	磁器	良好	赤/胎: 淡黄 胎: 灰白、明赤灰/胎: 灰白	施釉/施釉 施釉/施釉	3区	埋土上層	1	残0.4	3.6	中国製、高台内に「琴」彫押し
82	12-37	染付・皿	磁器	良好	胎: 灰白、明赤灰/胎: 灰白	施釉/施釉	3区	埋土上層	-	残2.3	-	其他焼窯系、皿B 2群

## 遺構外出土遺物(土器)

探出 番号	出土 地点	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	経圓調整(内/外)	調査地点	層位	法量(cm)		備考	
									口径	器高		口径
83	12-5	土師質土器・杯	1~4mmの砂粒	良好	淡黄焼/淡黄焼	回転ナズリ/回転ナズリ、底面斜切り推し	7区	表段	(11.4)	2.8	5.8	

## 遺構外出土遺物(石製品)

探出 番号	出土 地点	種類	部位	材質	調査地点	層位	寸法		備考
							幅	高さ	
84	23	-	空風輪	阿蘇粘結凝灰岩	7区	-	21.5	30.0	
85	4	-	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	-	18.9	27.0	
86	33	-	五輪塔	阿蘇粘結凝灰岩	7区	-	13.9	18.8	

標記 番号	資源 番号	出土 地点	礎跡	部位	材質	調査地点	寸法		別子	備考
							幅	高さ		
87	44	-	-	柱輪	阿蘇海越凝灰岩	7区	9.6	20.8		
88	57	-	礎跡?	-	阿蘇海越凝灰岩	7区	36.1	72.2		

## 第4節 小 結

本調査では、千疊敷東側の虎口にあたる道跡SF01を中心に発掘調査を行った。また、10次調査で検出した竪堀跡SD18の補足調査を11次調査に引き続き実施した。

SF01は平面プランがLの字形を呈する掘込み式桁形虎口であり、一部削平を受けていたが、おおむね遺存状況は良好で、地山面を路面とする段階と5～30cm程度の盛土を施し、その上面を路面とする段階の少なくとも2時期にわたって使用されたことが判明した。

この整地土層上面において、踏石や地覆石とみられる石材を伴う門跡SB23を検出した。SF01の壁面をほぼ垂直に掘り込んでおり、SF01が北側に向かって直角に曲がる手前側に位置する。掘立柱2本一組で、控柱は確認されていない。SB23東側は約3mにわたって平坦面が形成されており、門の前面を意図的に平らに造作したとみられ、盛土整地と門の構築が一連の作業であった可能性が高い。

また、炭化物を大量に含む層がSF01の北側から流れ込むように堆積しており、その一部は整地土層上面を覆っていることは、廃城前後に千疊敷で火災が発生し、これに起因する炭化物を含む土で虎口を意図的に埋めたことを示唆するといえよう。これに関連して、千疊敷西側のSD02埋土でも同様の炭化物を多量に含む層が確認されており、当該土層からは廃城前後の16世紀後半から17世紀初頭を下限とする陶磁器が出土している。

その他、SF01の埋土下層からは、城の生命を絶ち切る儀礼行為「城破り」の際に投げ込まれたと想定される多くの石塔残欠が出土した。これらの石塔の大量投棄は、平成5年度(第7次)調査や、後述する13年度(第14次)調査におけるSD02の調査で明確になったように、虎口周辺部に集中することが判明している。

千疊敷北側に位置する竪堀跡SD18については、SD02と直交方向に配置され、SD02との境界部分は傾斜角度約55°で北側へ向って急激に落ち込んでいるが、それより北側は緩やかに下降する。平成15年度に実施した第16次調査結果より、北側に向かってさらに延びることが明らかになっている。

SD02に隣接する埋土からは、大小様々な大量の安山岩礫群が投棄された状態で出土しており、SD02との境界部分では、SD02の上端に沿うように拳大から人頭大の礫が列状に出土したが、千疊敷の虎口周辺のように五輪塔などの石塔残欠は出土していない。埋土中層から上層は、細かく分層できる土層が水平に堆積し、これらは比較的硬質であることから、意図的に版築状に突き固めながら埋められたと推測される。

このような丁寧な埋め立ての状況や、SD02の上端に沿うように出土した礫群の存在から、埋土の重複関係は明確ではないものの、SD02の掘削に伴って埋められたと推測される。

### 引用・参考文献

- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡(西岡台)』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会  
 藤本貴仁 2001『宇土城跡(西岡台)』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上  
 藤本貴仁 2002『宇土城跡(西岡台)』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 同上  
 藤本貴仁 2003『宇土城跡(西岡台)』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上  
 藤本貴仁 2004『宇土城跡(西岡台)』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上  
 藤本貴仁 2007『宇土城跡(西岡台)』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上



## 第5章 平成13年度（第14次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図27・28・34）

平成13年度（14次）調査は、史跡整備に伴い以前から継続している千疊敷周辺における遺構確認を主な目的とし、平成13年6月から12月の約7ヶ月間にわたって実施した。

本調査では、千疊敷南東側と北東側の2地点に調査区を設定し、前者を南調査区、後者を北調査区とした。南調査区は千疊敷南東側の横堀跡SD02が圍繞する帯曲輪に位置しており、前回の調査に引き続き8～10区の3つに地区割りした。一方、北調査区は11次調査で検出した竪堀跡SD19の未掘部分や11次調査区の5・6区を東側に拡張し、調査を行った。調査面積は南調査区が約950㎡、北調査区が約130㎡である。

南調査区では、SD02より石塔が大量に出土し、城破りとの関係で注目を集める成果が得られた。また、調査区南側から東側の一部は盛土整地層が広がっており、整地層中より15世紀後半から16世紀中頃の青磁剣先連弁文碗が出土していることから、この時期以降に整地が行われたことが判明した。その他、城郭遺構以外では、古墳時代の首長居館を囲む壕跡SD01や張り出し部などを検出した。また、北調査区のSD19の埋土下層からも五輪塔を中心とする数多くの石塔が出土した。

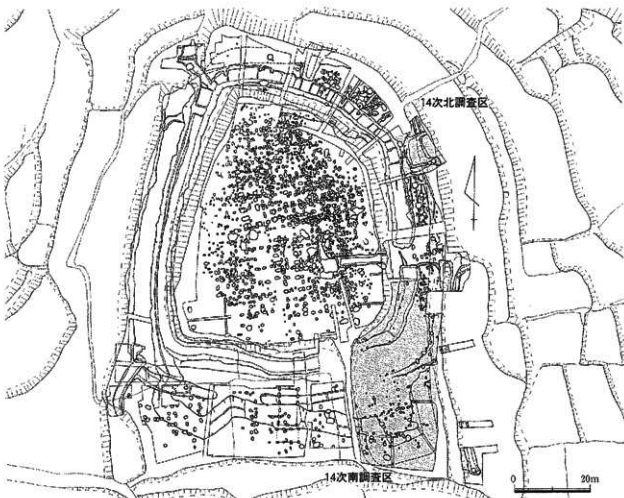


図27 14次調査区配置図（1/1,000、アミは調査範囲）

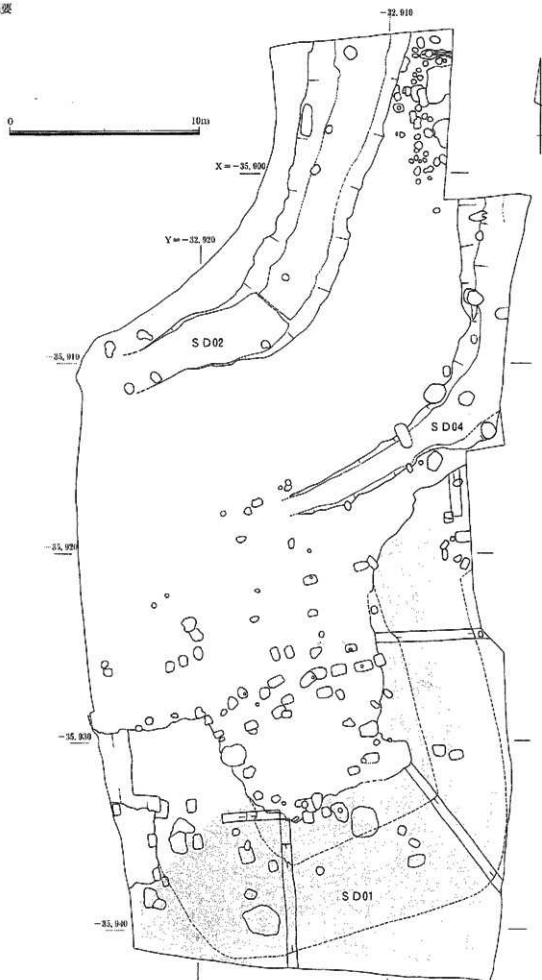


図28 14次南調査区遺構配置図 (1/200. アミは盛土築地範囲)

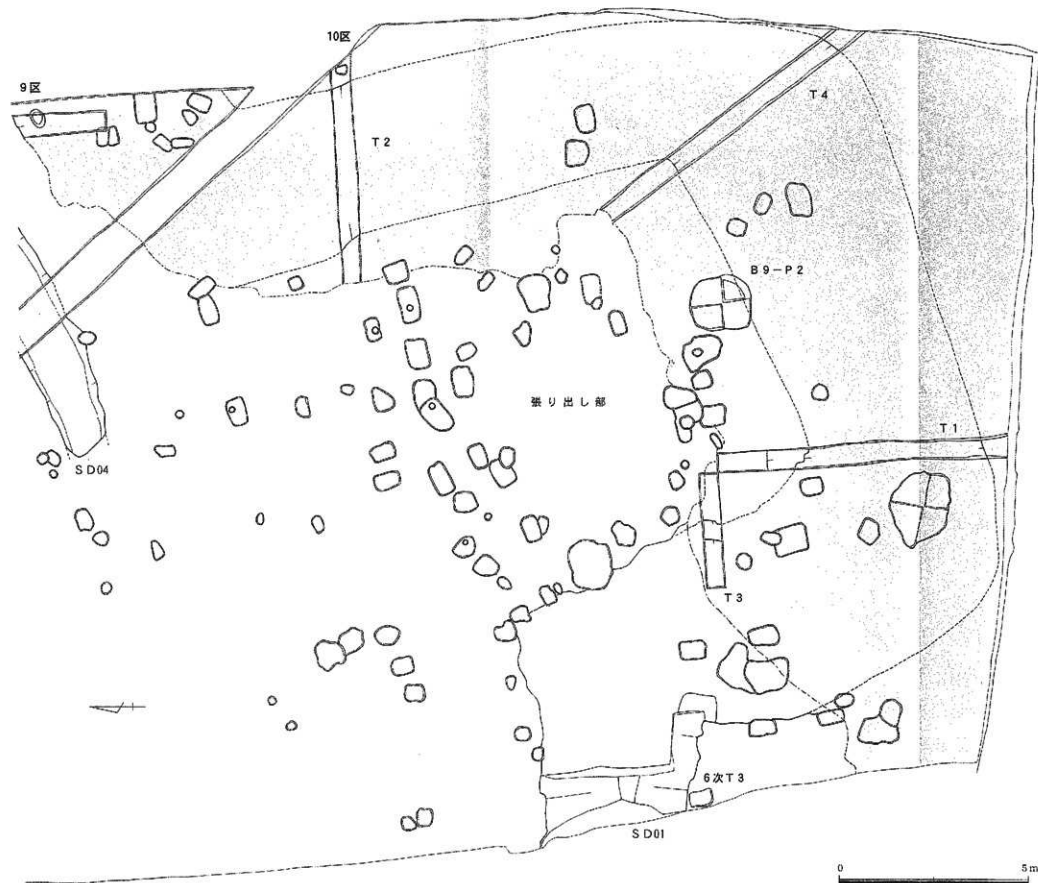


図29 SD01周辺遺構配置図（1/100、アミは盛土整地範囲）



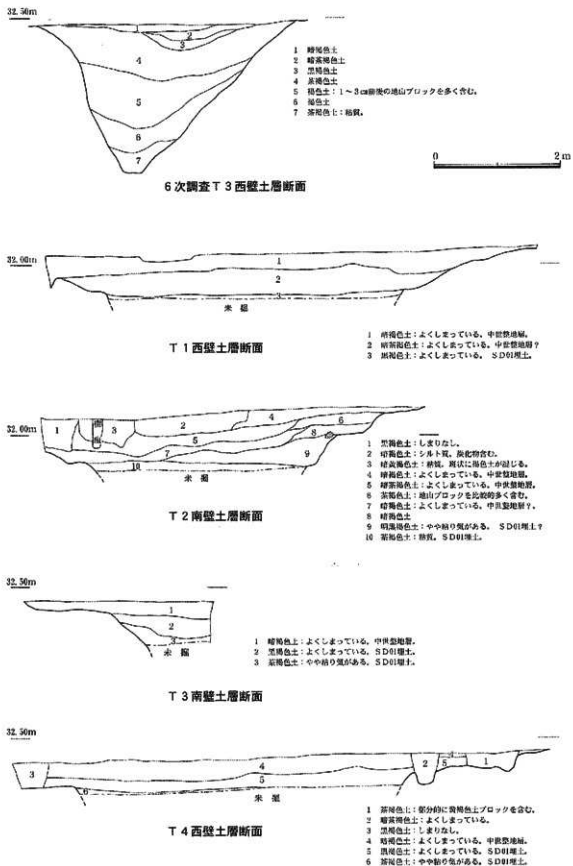


図30 S D01検出状況土層断面図 (1/60)

出土遺物は土師質土器の皿や坏、瓦質土器の搦鉢や火鉢、国産や中国製の陶磁器、五輪塔を中心とする石塔などであるが、本調査においては石塔の大量出土が特筆される。

なお、城破りに関連するとみられる前章報告のS F 01出土石塔は、保存整備工事に伴い取り上げたが、14次調査で出土した石塔については、城破りに伴う石塔として遺構的な取り扱いを行うべきとの見解に立ち、S D 02及びS D 19出土石塔は、調査後、出土した状態で保護盛土を施し、張芝やソイルセメントによる保存整備工事を行った。ただし、S D 02出土石塔の一部については野外展示を行うため、一旦取り上げて樹脂含浸処理を施し、出土位置に再配置した。本作業の合間に実測及び写真撮影を行った。

## (2) 調査日誌抄

平成13年		18日	8区遺構実測開始。S D 02埋土掘り下げ開始。
6月15日	5区と6区の東側に北調査区を設定。周辺の表土剥ぎ。	10月20日	S D 02より石塔残欠が多量に出土しはじめる。
26日	上層観察のため、北調査区に東西南北方向にセクションベルトを設定。	29日	第2回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。
7月4日	平成13年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会を開催。調査現場を視察。	31日	S D 02出土の石塔出土状況実測開始。
23日	S D 19を検出、写真撮影。	11月14日	9区の南側に10区を設定。表土剥ぎ。
24日	S D 19埋土の掘り下げ開始。	15日	10区遺構検出作業開始。
26日	S D 19埋土下層で五輪塔などの石塔残欠が多量に出土し始める。	28日	10区で古墳時代首長居館に伴う壕跡S D 01を検出。本遺構の状況把握のため、同区にサブトレンチT 1～3を設定。
8月2日	S D 19セクションベルト土層断面写真撮影及び掘り下げ。	30日	T 1～3掘り下げ。
9月26日	千畳敷南東側のS D 02が圍繞する平場に南調査区を設定。表土剥ぎ開始。	12月3日	T 1～3でS D 01を検出。
28日	8区遺構検出作業開始。	5日	発掘調査成果の記者発表を実施。
10月2日	9区遺構検出作業開始。	6日	古墳時代首長居館の張り出し部の規模をほぼ確定。
11日	8・9区遺構検出作業終了。検出状況の写真撮影。	8日	発掘調査現地説明会（見学者約100名）。
		18日	S D 19調査状況写真撮影。S D 01の状況確認のため10区にT 4を設定。
		26日	8～10区の調査状況写真撮影。

## 第2節 検出遺構

### S D 01（図28～30、巻頭図版3、図版18・19）

古墳時代の首長居館を圍繞する断面Vの字形の壕跡である。昭和49・50年度の1次調査で検出され、以後、数次の調査で部分的に確認している。

本調査における検出規模は、長さ42.5m、幅3.8～5.3m、底幅0.3～0.5m、深さ2.4mで、傾斜角度は内側が約50°、外側が60°と外側がより急峻である。埋土中・下層は細かな分層が不可能で、上層は硬質の暗茶褐色土や黒褐色土が堆積している。1次調査のH-1区E T土層断面における黒色土層（IV層）が対応する層と考えられ、平安から鎌倉時代頃にはほぼ埋没したと推定される。また、本遺構の大部分は戦国期の盛土整地上で数十cm程度覆われている。

検出範囲の平面プランはコの字形を呈し、南東側へ突出しているが、この突出部は首長居館に伴う張り出し部であり、1次調査で検出した千畳敷南西側だけでなく、南東側にも張り出し部が存在することが明らかになった。この張り出し部は最大幅10m、同長8mと1次調査で検出されたものとはほぼ同じ形態・大きさであり、対をなすものであろう。

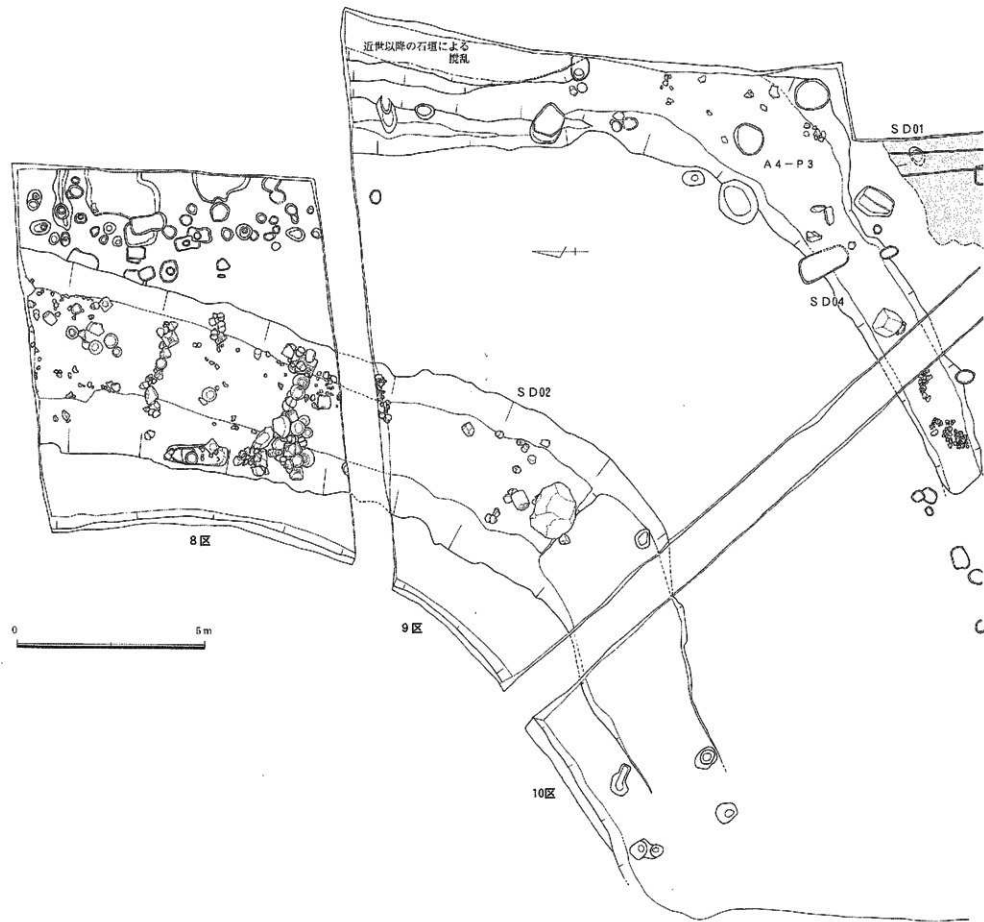


図31 SD02周辺遺構配置図（1/100、アミは盛土盛地範囲）

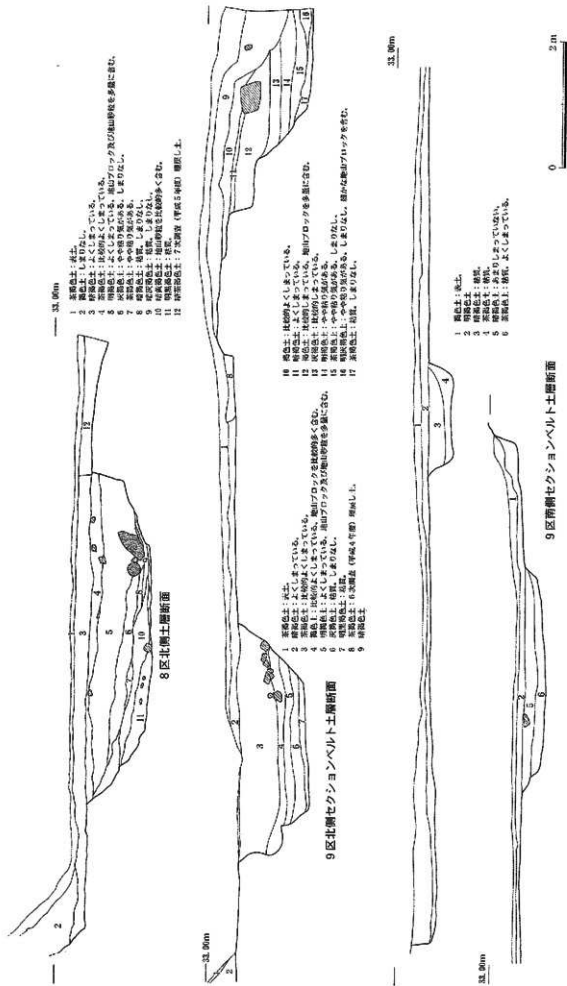


図32 S D02・SD04土層断面図(1/60)

## SD02 (図28・31~33、巻頭図版3、図版18・20・21)

本調査における検出規模は、長さ22.7m、最大幅5.1m、底幅1.8~2.8m、最深部1.1m、堀壁の傾斜角度は約35°~55°である。西側に向かって徐々に浅くなり消失するが、表土直下が遺構面であることや、遺構の周辺は重機で削平された痕跡があることから、後世の削平が主な原因とみられ、本来は千畳敷東側の虎口部分を除いて全周していたと推定される。

堀底の標高は31.3~32.4mで、堀底の小段部分からスロープ状に西側に向かって急激に浅くなる範囲を除くと、ほぼ水平である。堀の内側壁面には長径1.5m、短径0.5m、深さ0.5mの狭長なピットが1ヶ所掘りこまれている。

8区北側部分から南側にかけての約15mの範囲内に、五輪塔を中心とする石塔の残欠が多数出土した。これらは上層と下層に分けられ、前者は埋土上位から中位にかけて、後者は堀底に近い下位から出土しており、圧倒的に上層の出土数が多い。上層の石塔のなかには堀に直交方向に並べられたような状態で出土したものもある。下層の石塔は地山のブロックや砂粒を多く含んだ土砂で覆われており、石塔投棄直後に人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

石塔以外では、土師質土器の坏や皿、瓦質土器の播鉢などが出土した。

## SD04 (図28・31・32、図版22)

断面逆台形の小規模な竈塚である。検出規模は長さ22.3m、幅1.2~3.3m、底幅0.9~2.3m、深さ約0.4mを測り、堀壁の傾斜角度は約50°~55°で、西側から東側に向かって緩やかに下降している。

SD02と同じく後世の削平に伴い西側部分が消失しており、東側は城郭遺構とは無関係の近世以降の石垣で破壊されているため、当該部分より北側は外側の立ち上がりを確認できなかった。

埋土より土師質土器の坏や皿、鉄輪や染付などの陶磁器が出土した。

## SD19 (図34・35、図版22~24)

11次調査で検出した堅堀跡である。検出規模は長さ9.3m、幅5.4~9.8m、底幅3.4~7.0m、平場面との最大比高差3.6m、傾斜角度40°~55°で、等高線に直交するように配置される。SD02が圍繞する平場を分断する位置にあるが、埋土の重複が認められないことや、SD02の排水溝と連結していることから同時期に並存していたとみられる。

また、SD02と同様に、本遺構の下層からも石塔残欠が多数出土した。その多くが同一の層から出土しており、同時期に投棄された可能性が高い。石塔以外では、土師質土器の坏や皿、播鉢、瓦質土器の播鉢、火鉢、羽釜、唐津焼の灰軸碗などの国産陶磁器、青磁や染付、色絵の碗や皿などの中国製陶磁器が出土した。

## 第3節 出土遺物

## SD02 (図36~45、図版25~27)

1~11は土師質土器で、1~8・10は坏、9は皿、11は甑形土製品である。1~8・10は磨耗により器面調整が不明なものを除き、全て内外面回転ナデ、底部は糸切り離しである。口縁部が残存する1~7は口径が7~8cm台の小型のものである。10の底部には2ヶ所の穿孔がある。9は口縁部が外反し、内外面回転ナデ、底部は糸切り離し。11は筒抜け状を呈し、筒部中央付近に1条の突帯がめぐる。12は

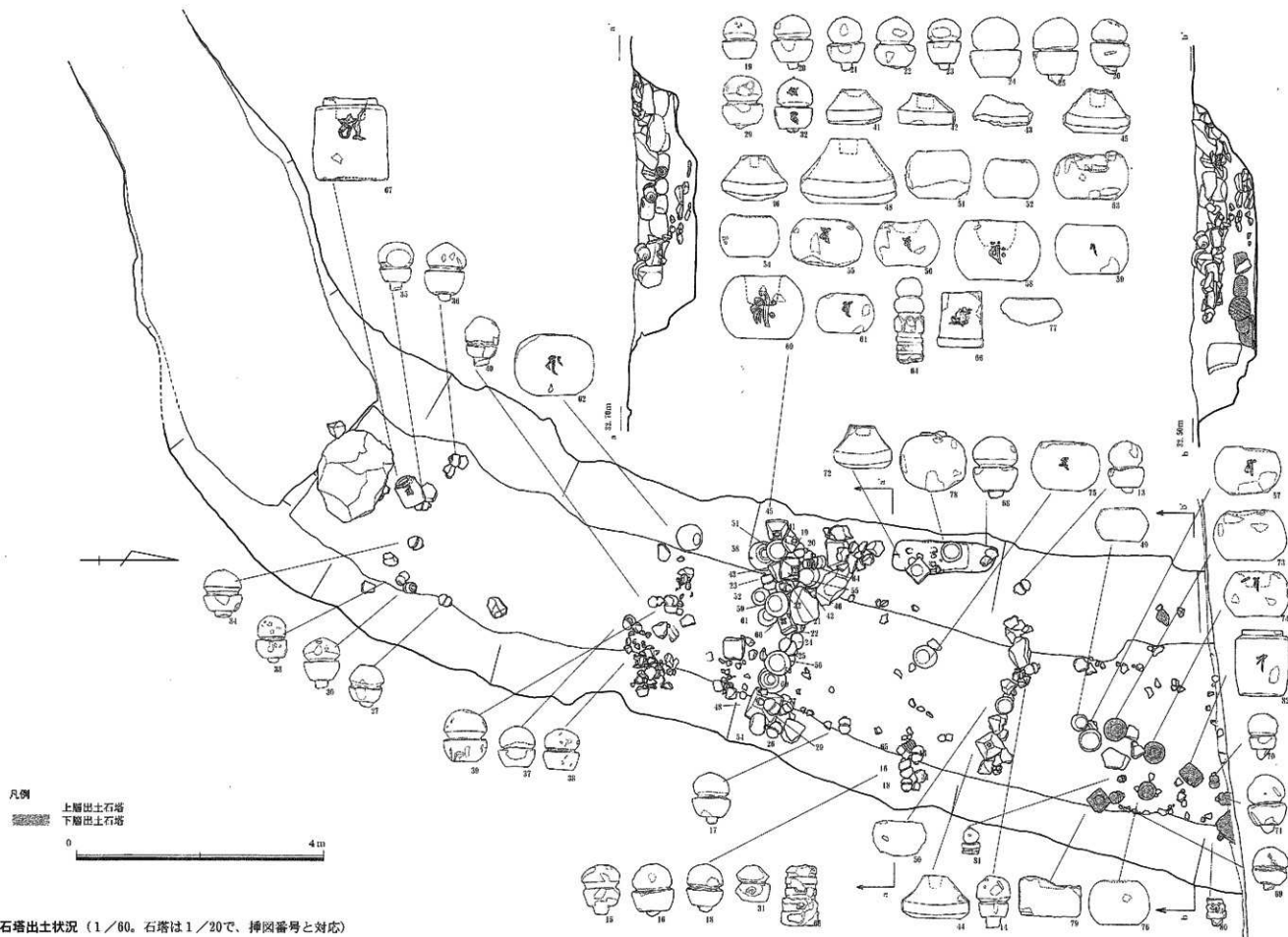


図33 S D02石塔出土状況（1/60。石塔は1/20で、挿図番号と対応）

瓦質土器の掘鉢で、内面に6本単位の掘目を施す。

13～82は阿蘇溶結凝灰岩製石塔で、13～67、77は上層、68～76、78～82は下層出土のものである。

13～40は空風輪で、全て空輪と風輪が1石で作られている。空輪と風輪の大きさがほぼ同じものが多いが、14・40は風輪がかなり小さい。32は空輪に葉研形でキャ・キャー・ケン・キャク、風輪はカ・カー・カン・カクの梵字が刻まれており、この部分を黒色顔料で塗色している。

41～48は四方屋根形の火輪。頂部に空風輪のほぞを差し込むための穴が穿たれている。この穴の平面形は、42は四角形で、それ以外は円形である。ほぼ原型と留める41・42・44～46・48のうち、42は頂部から軒口までが扁平で、下り棟の傾斜が緩く、あまり両端に反り上がらないタイプであるのに対し、そ

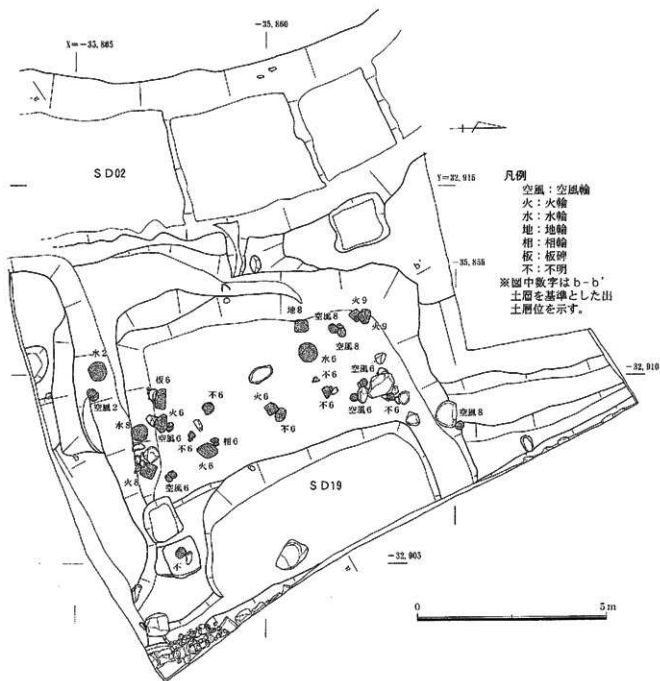


図34 SD19周辺遺構図(1/100、アミは石塔)

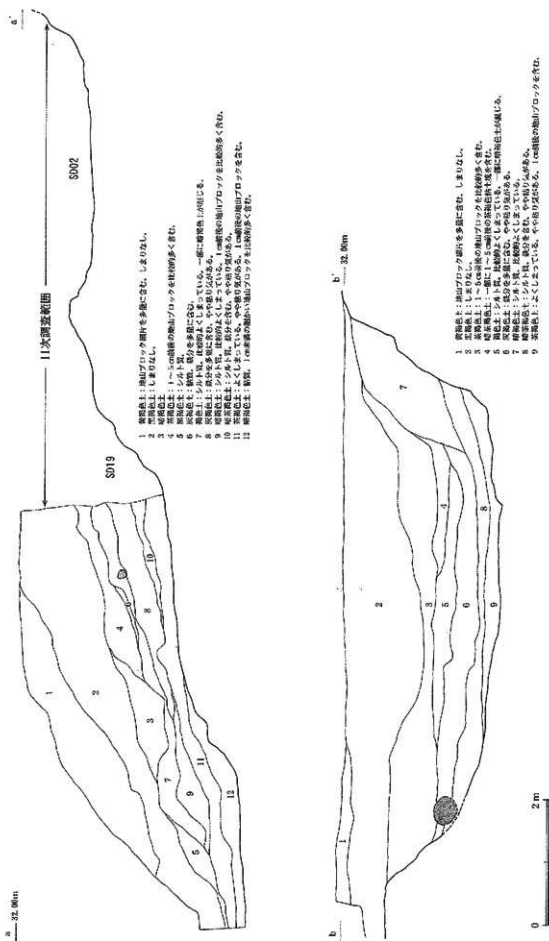


図35 SD19土層断面図(1/60, アミは石塔)



れ以外は頂部から軒口までが厚く、下り棟がやや急であり、両端に緩く反り上がるタイプである。また、48は幅が50cmを超える大型のもので、それ以外は30cm台である。

49～62、77は水輪で、53・56・58・60の上面には舍利孔がある。55～62は葉研彫の梵字が刻まれており、60は四方、61は三方にキリクを施す。また、55・58の1ヶ所にバ、57～59には四方にバ・パー・バン・バクを施す。

63～65は宝篋印塔や層塔、宝塔などの頂部に位置する相輪である。63は細い線を刻んで宝輪を表現しており、64は宝珠や竜車、水瓶、宝輪を表現する。65では請花にあたる部分に猪目文が刻まれている。

66・67は宝篋印塔で、両者とも葉研彫でア・アー・アン・アクの変形とみられる梵字が四方に刻まれている。66が基礎で、67は塔身である。

68～76、78・79は五輪塔である。68～71は空風輪。72は四方屋根形の火輪で、頂部のほぞ穴は円形で、下り棟がやや急であり、両端に緩く反り上がるタイプである。73～76・78は水輪で、74・75には四方にバ・パー・バン・バクの変形とみられる梵字が刻まれる。また、74には舍利孔がある。79は地輪で上面にほぞ穴がある。

80・81は相輪、82は宝篋印塔の塔身である。80には宝輪や請花、路盤？、81には宝珠の表現がある。82の四方にはキリクとみられる梵字が刻まれている。

#### SD04 (図46、図版28)

83～87は土師質土器で、87は皿、それ以外は坏である。磨耗により器面調整が不明なものを除き、全て内外面回転ナデ、底部は糸切り離しである。

88は肥前系の可能性が高い天目形の鉄軸碗で、内面及び外面上半分に施軸する。1590～1610年代、89は染付(碗?)である。16世紀前半から第3四半期頃の景德鎮窯系染付(碗?)で、外面に蓮弁文を描く。

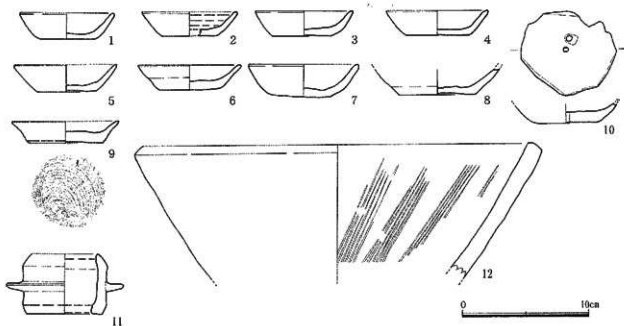


図36 SD02出土遺物1 (1/3)

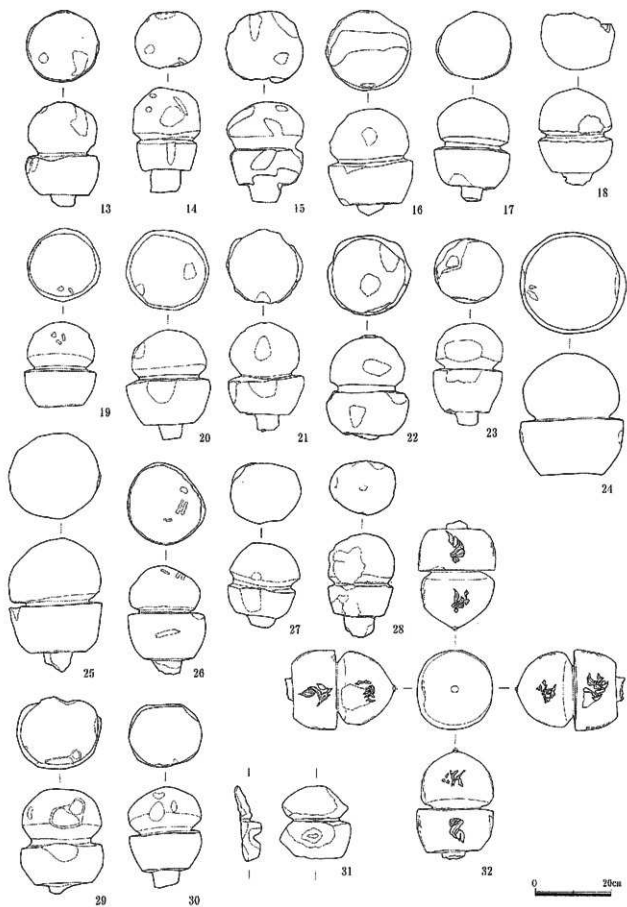


図37 S D 02出土遺物 2 (1/10)

## SD19 (図47~50, 図版28~31)

90は平底の古墳時代の土師器壺である。

91~110は土師質土器で、91~104は坏、105~107は皿、108は短頸壺、109・110は搦鉢。91~107は磨耗により器面調整が不明なものを除き、全て内外面回転ナデ、底部は糸切り離してある。103は底部に1ヶ所穿孔が施されており、104の内面には紐状の付着物の痕跡がある。108は石灰岩の砂粒を比較的多く含んでおり、在地産の土器の胎土とは異なる。109・110は6本単位の搦目を施し、底部に近い部分は

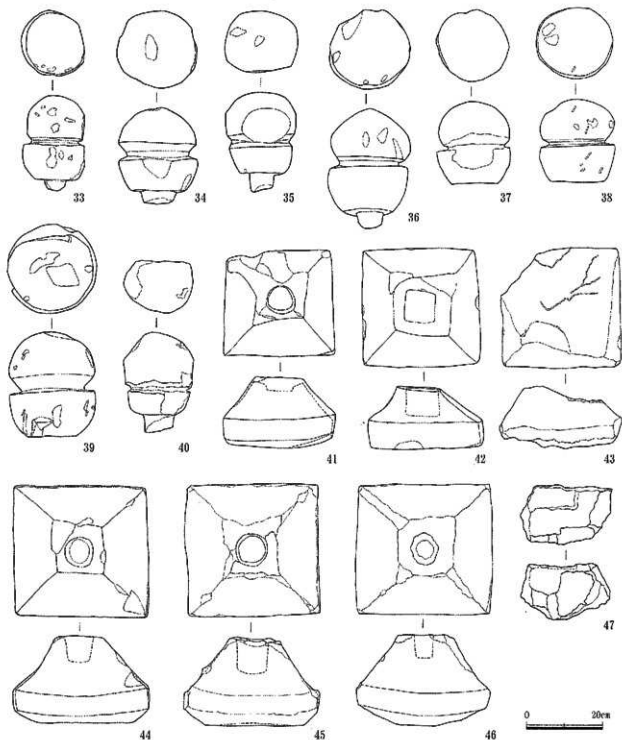


図38 SD02出土遺物3 (1/10)

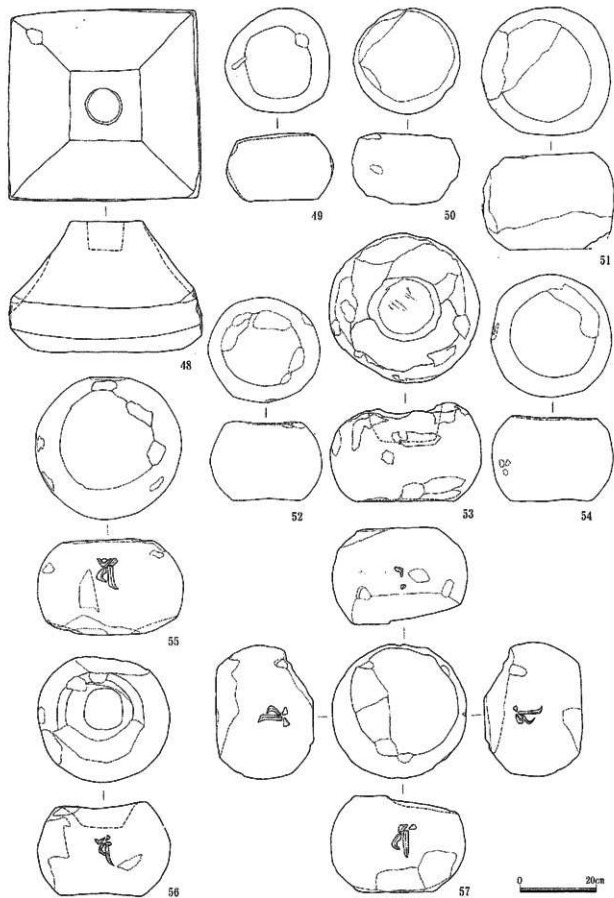


図39 SD02出土遺物4 (1/10)

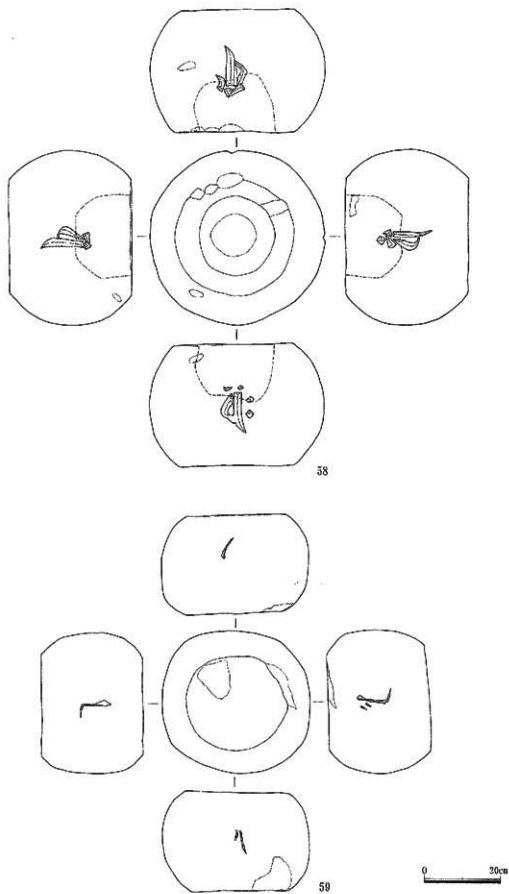


図40 S D02出土遺物 5 (1/10)

使用により磨耗している。

111～121は瓦質土器で、111～117は播鉢、118～120は深鉢形の火鉢、121は羽釜である。112の底面には6本単位の播目を巴状に施しており、内面に炭化物が付着している。113は6本単位の播目を施しており、使用により播目が磨耗している。114は外面にユビオサエの痕跡が残り、内面に5本単位の播目を施す。

118・120は口縁端部とその直下に突帯を有し、突帯間に118は三つ巴文、119は菊文を施文する。119は口縁部に粘土帯を貼り付け、その直下にスタンプによる桐文を施す。121は肩部に耳穴を有する。

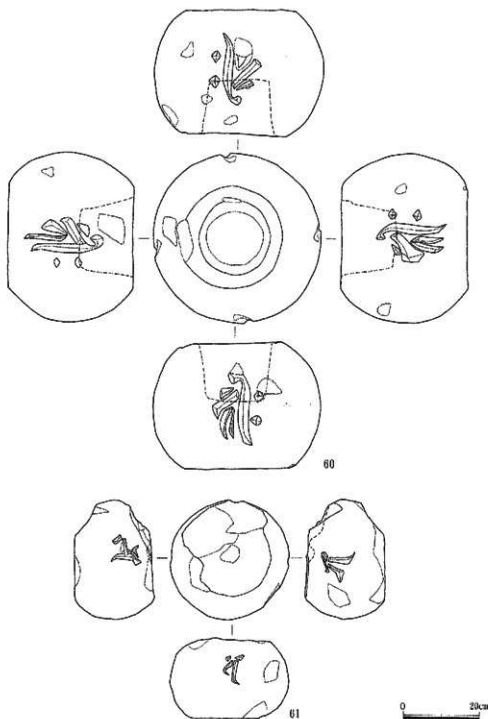


図41 SD02出土遺物6 (1/10)

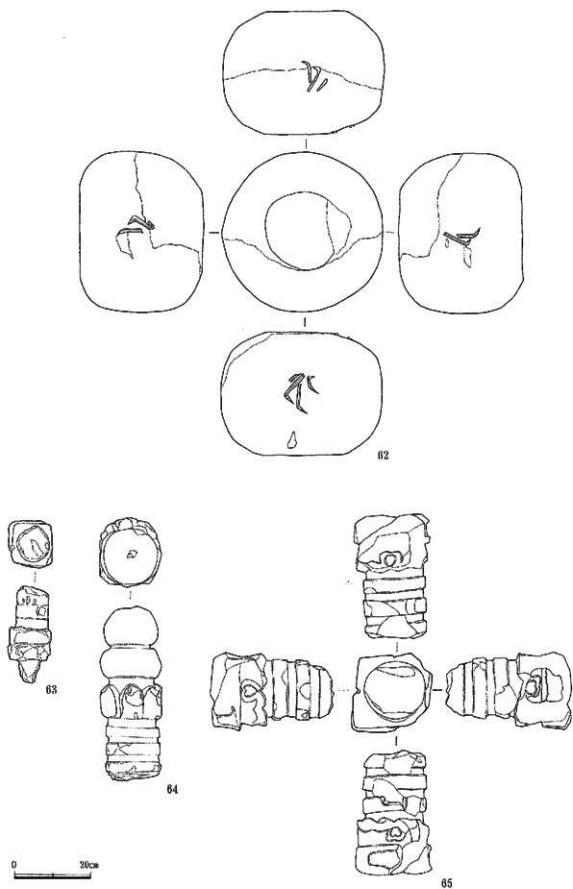


図42 S D02出土遺物 7 (1/10)

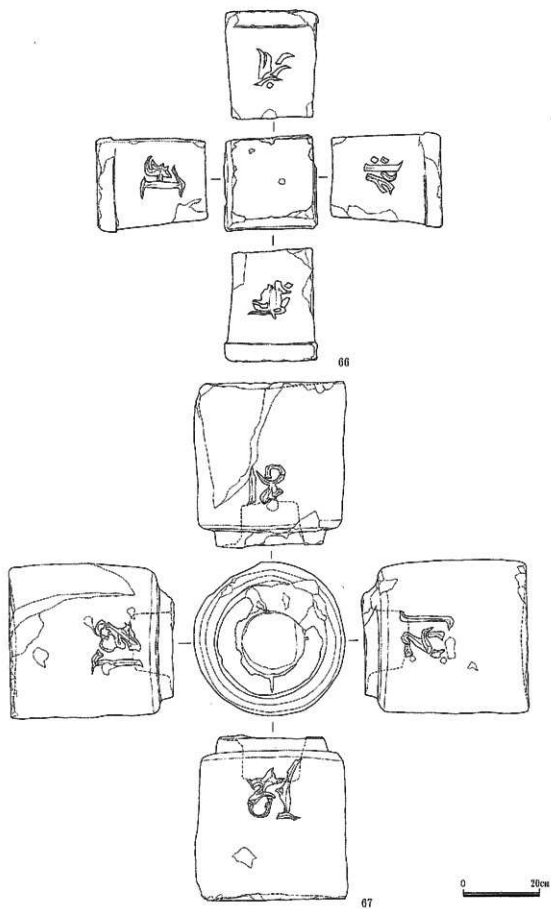


圖43 S D02出土遺物 8 (1/10)



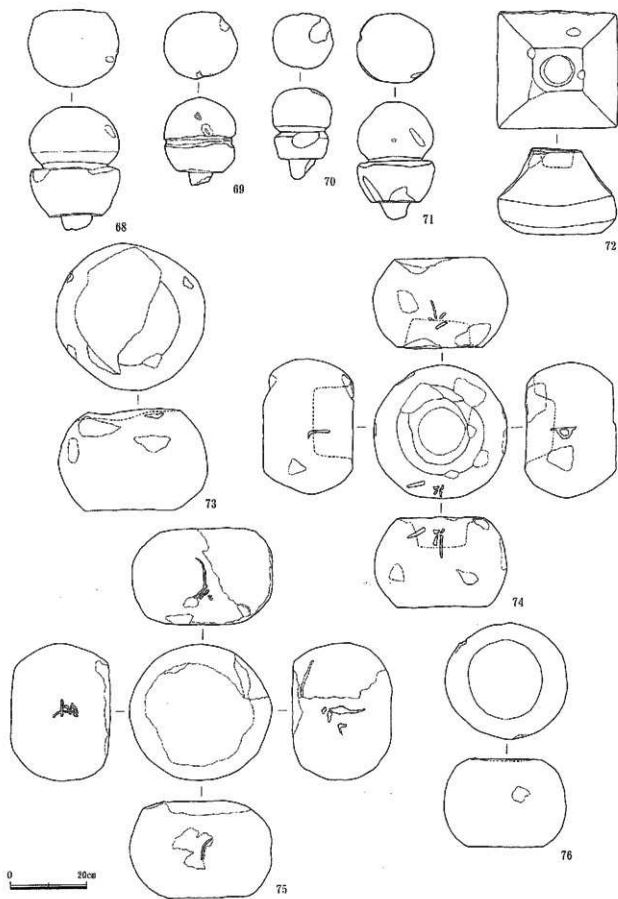


図44 S D02出土遺物 9 (1/10)

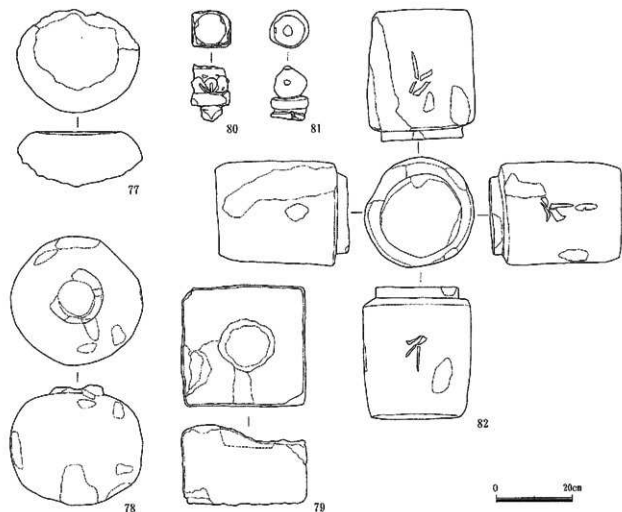


図45 SD02出土遺物10 (1/10)

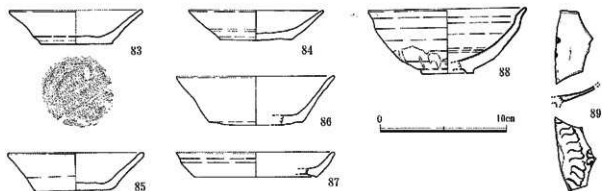


図46 SD04出土遺物 (1/3)

122は須恵器質の台付瓶で、円盤状の台を有する。九州産とみられ鎌倉期の製作である。

123・134は国産陶磁器である。123は唐津焼の灰釉碗で、内面及び外面体部中央までオリーブ灰色の釉薬を施す。それ以外は露胎である。見込に胎土目の痕跡が残る。1590～1610年代。134は肥前系京焼風陶器皿で、畳付や高台内は露胎。見込に楼閣山水文を描くもので、1690～1700年代。

124～130は青磁。128は碗か鉢、それ以外は碗で、124・125は福建・広東系、それ以外は龍泉窯系で

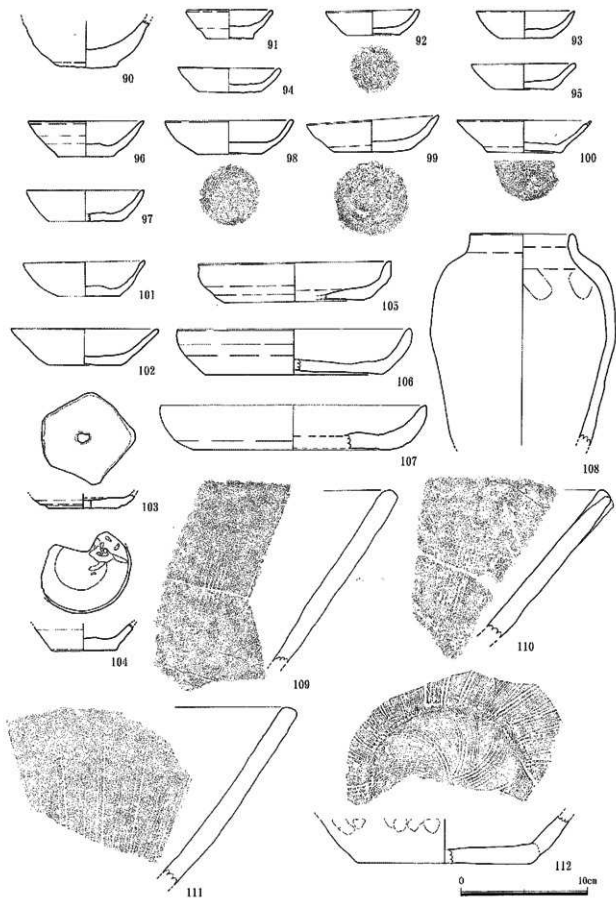


図47 SD19出土遺物1 (1/3)

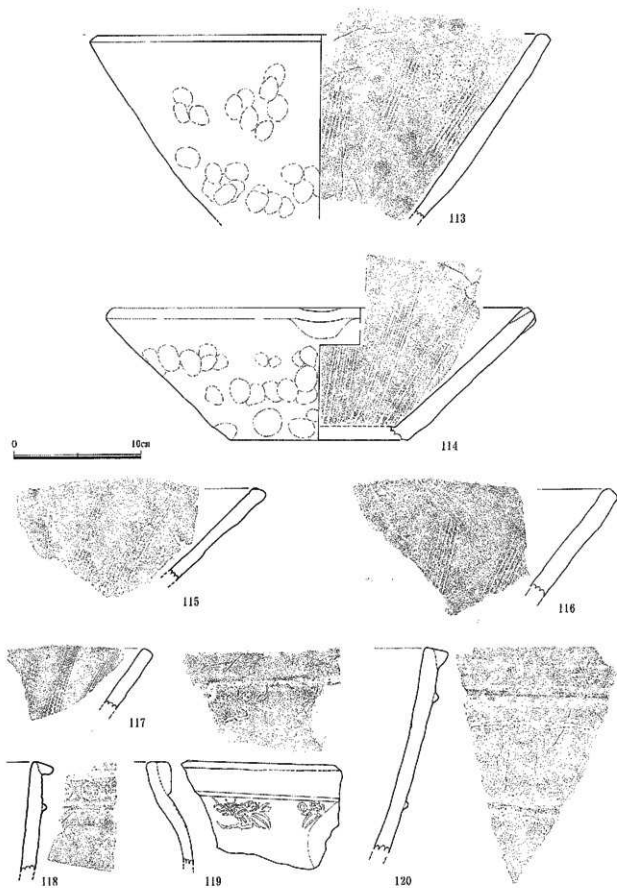


圖48 S D19出土遺物2 (1/3)



図49 SD19出土遺物3 (1/3)

ある。124は粗製の青磁碗で、畳付と高台内は露胎である。15世紀後半から16世紀中頃。125は外面に不鮮明な剣先蓮弁文を施す。15世紀後半から16世紀中頃。126は外面に鎮蓮弁文を施すもので、13世紀から14世紀中頃。127は見込に片切彫で文様を施す。13世紀から14世紀中頃。128は口縁部が外反し、ヘラ彫で内外面に文様を施す。14世紀後半から15世紀中頃。129は内面に櫛描文を施すもので、12～13世紀。130は焼成不良のもので、15世紀後半から16世紀中頃。

131～133・135～139は染付で、131～133・136は碗、135・137～139は皿である。139は漳州窯系、136は福徳産の可能性はあるが、漳州窯系のものより焼成は良好である。残りは全て景德鎮窯系である。

131は見込に玉取獅子とみられる文様を描き、全面施釉後、畳付を釉剥ぎする。16世紀前半から中頃。132はレンツ一碗で、内外面に施文する。16世紀前半から中頃。133は外面に唐草文を描き、全面施釉後、畳付を釉剥ぎする。16世紀後半から17世紀初頃。135は16世紀後半のもので、見込に松のような文様を描き、高台内に「大明年造」の銘を施す。136は見込に花卉文を描くもので、16世紀後半。137は見込に十字花文、外面に唐草文を施文する。16世紀前半から中頃。138は基筒底で、見込に草花状の文様を施

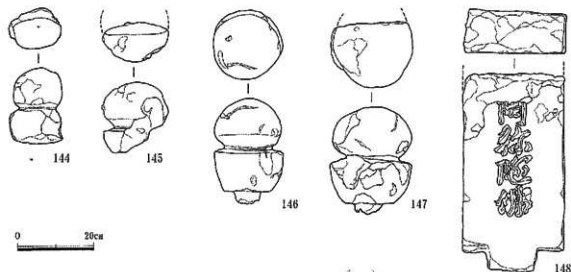


図50 S D 19出土遺物 4 (1/10)

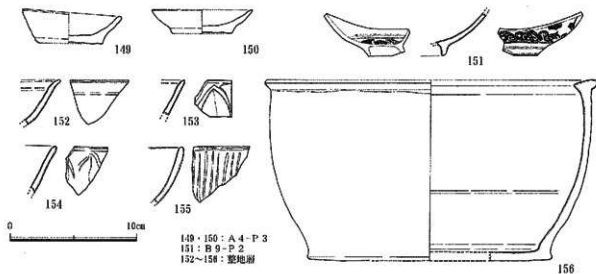


図51 ビット及び整地土層出土遺物 (1/3)

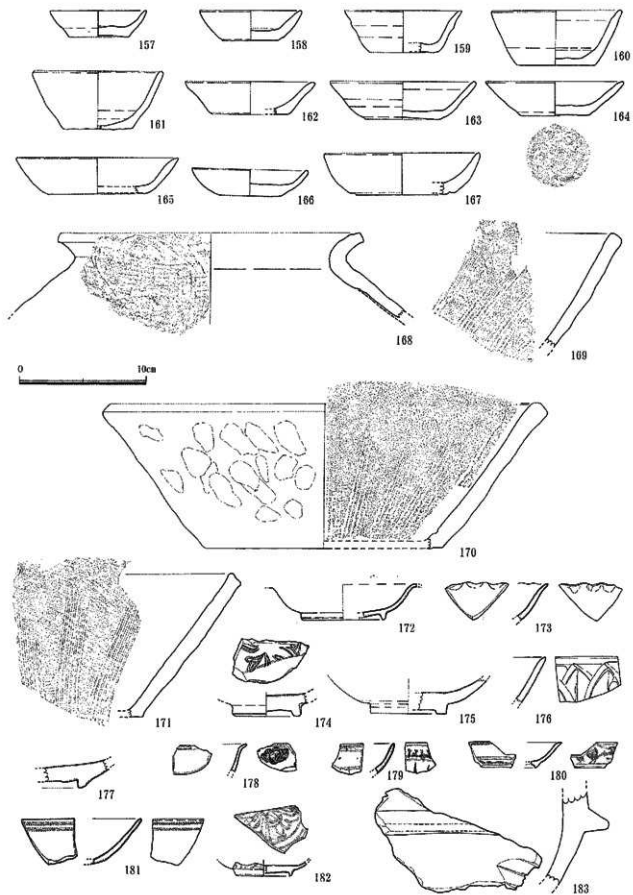


図52 遺構外出土遺物 (1/3)

す。16世紀前半から中頃。139は碁笥底で焼成不良品である。見込に寿字文が施されている。16世紀後半。

140は16世紀前半から中頃の端反りの色絵（皿か？）。141は施釉陶器の皿で、人形の器台の部分とみられ、翡翠釉を施す。15～16世紀代。142・143は13～14世紀前半の三彩盤で、福建・広東付近で製作されたいわゆる華南三彩である。外面に濃緑色や緑色、内面に緑色や黄褐色などの釉を施す。

144～148は阿蘇溶結凝灰岩製の石塔である。144～147は空風輪。148は長方形に加工された板碑で上部を欠損する。下部にはほぞを有し、前面には薬研形で「阿弥陀佛」と刻まれているが、欠損部分に「南無」の刻字があったとみられる。

#### A4-P3 (図51、図版31)

149・150は土師質土器の坏である。両者とも底部は糸切り離しである。

#### B9-P2 (図51、図版31)

151は景德鎮窯系染付のレンツウ碗である。外面に如意頭文と唐草文を描いており、全面施釉後、疊付を釉剥ぎする。16世紀前半から中頃。

#### 整地土層 (図51、図版31)

152は13世紀から14世紀前半の中國製白磁で、口禿げの碗である。153～155は龍泉窯系青磁碗である。153・154は外面に蓮蓮弁文を施すもので、13～14世紀中頃。155は15世紀後半から16世紀中頃のもので、外面に剣先蓮弁文を施す。156は福建・広東系の施釉陶器盤である。口縁部から内面に黄色がかかった白釉を施す。13～14世紀中頃。

#### 遺構外出土遺物 (図52、図版32)

157～168は土師質土器で、157～164は坏、165～167は皿、168は瓿である。160は内外面回転ナデで底部はヘラ切り離しであり、磨耗のため判然としないが161や166も同様とみられる。それ以外の坏や皿は磨耗で器面調整が不明なものを除き、内外面回転ナデで底部は糸切り離しである。168の外面は格子状タキが施される。169～171は瓦質土器の播鉢で、169は5本単位、170・171は6本単位の播目が施される。

172・173は白磁皿である。172は16世紀代の景德鎮窯系の端反り皿で、全面施釉の後、疊付を釉剥ぎする。173は国産のもので19世紀初頃から中頃。

174～177は龍泉窯系青磁で、177は皿、それ以外は碗である。174は見込に印花文を施すもので、疊付と高台内は露胎。13～14世紀中頃。175も同時期のものである。176は外面に蓮蓮弁文を施すもので、13～14世紀中頃。177は高台内の一部が露胎で、14世紀後半から15世紀中頃。

178～182は染付で、178は碗、179・180・182は小皿、181は皿である。181は漳州窯系、それ以外は景德鎮窯系である。178は口縁部が短く外反するもので、16世紀代。179は碁笥底の皿とみられ、外面に波濤文と蕉葉文を描く。16世紀第2・3四半期。180は全面施釉後、疊付を釉剥ぎする端反り皿で、16世紀前半から中頃。181は口縁部内外面に2重の界線を施す。16世紀後半。182は見込に十字花文を描く。16世紀前半から中頃。

183は滑石製石鍋である。下部には使用によるとみられる煤が付着している。



表5 14次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

## SD02(土器)

検出 層位 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	割面調整(内/外)	調査 地点	層位 <sup>0</sup>	法 量 (cm)		備 考
									口径	高さ	
1	14-14	土師質土器・杯	1~3mmの砂粒	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	8区	5	7.3	2.1	4.1
2	14-18	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒、雲母	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	9区	3	7.5	2.0	4.3
3	14-40	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、角閃石	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	8区	4	7.8	2.0	4.0
4	14-39	土師質土器・杯	1~4mmの砂粒、小磯、雲母	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	8区	4	7.9	2.0	5.0
5	14-75	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	9区	3	8.1	2.1	4.7
6	14-28	土師質土器・杯	角閃石、1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	8区	4	8.1	2.0	4.0
7	14-26	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、長石	良好	橙/橙	同底ナデ/同底ナデ	8区	5	8.7	2.7	4.4
8	14-41	土師質土器・杯	1~6mmの砂粒	良好	橙/橙	割縁のため不明/割縁のため不明	8区	5	-	残2.1	6.0
9	14-43	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒、雲母、角閃石、長石	良好	橙/橙	割縁のため不明/割縁のため不明	8区	5	8.4	1.7	5.7
10	14-42	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	割縁のため不明/割縁のため不明	8区	5	-	残1.5	5.0
11	14-45	埴土器、楕鉢	1mm程度の砂粒	良好	橙/黄緑	同底ナデ/同底ナデ	8区	5	5.2	4.8	-
12	14-37	埴土器、楕鉢	1~5mmの砂粒、長石、角閃石	良好	灰白/灰白	ナデ、楕円/ナデ	8区	4	32.2	残10.7	-

調査層位は8区が8区北側土器所産、9区が9区北側クワンベットの土器

## SD02(石塔)

検出 層位 番号	実測 番号	種類	部位	材質	調査地点	層位	寸法(現状値)		跡字(文字)	備 考
							幅	高さ		
13	石19	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	10.2	27.8		
14	石21	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	18.0	27.3		
15	石30	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	20.7	26.4		
16	石32	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	22.2	28.1		
17	石36	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	20.0	27.2		
18	石35	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	9区	上層	19.5	25.6		
19	石12	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	18.9	22.5		
20	石44	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	22.1	29.0		
21	石32	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	20.2	28.8		
22	石37	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	22.0	27.8		
23	石50	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	18.1	27.0		
24	石38	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	22.2	32.1		
25	石59	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	24.1	33.3		
26	石66	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	20.5	28.9		
27	石70	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	9区	上層	10.0	22.8		
28	石83	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8-9区	上層	18.8	27.4		
29	石81	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	21.8	27.8		
30	石71	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	19.5	26.7		
31	石33	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	18.5	19.1		
32	石51	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	30.1	29.5		笠輪:キヤ・キヤー、クワン、風輪:カ、カー、カン、カク
33	石72	五輪塔	笠風輪	阿曇系新凝灰岩	8区	上層	16.7	25.0		梵字部分を線で塗色

調査 番号	発掘 番号	種 類	位 置	材 質	調査地点	層位	寸法 (現状値)	測 量	測 量	測 量	備 考
34	石73	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	9区	上層	90.9	25.1			
35	石74	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	9区	上層	18.6	26.2			
36	石75	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	9区	上層	22.0	31.6			
37	石77	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	9区	上層	19.5	21.2			
38	石79	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8・9区	上層	10.9	21.8			
39	石80	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8・9区	上層	23.1	28.0			
40	石81	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8・9区	上層	13.3	20.2			
41	石90	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	29.8	18.9			
42	石18	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	31.1	16.9			
43	石19	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	31.2	16.3			
44	石24	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	35.6	23.0			
45	石39	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	30.0	23.2			
46	石47	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	36.2	24.1			
47	石78	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	34.0	14.9			
48	石63	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	50.5	34.5			
49	石17	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	28.2	17.3			
50	石23	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	28.3	18.7			
51	石41	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	34.8	25.5			
52	石53	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	29.8	20.8			
53	石61	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	39.9	26.1			
54	石67	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	31.8	22.8			
55	石68	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	38.3	25.4			
56	石60	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	35.0	24.9			パ・バー・パン・バク
57	石16	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	35.1	25.5			パ・バー・パン・バク
58	石43	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	48.2	32.7			パ・バー・パン・バク
59	石54	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	39.1	27.0			パ・バー・パン・バク
60	石62	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	41.2	33.3			四方キリーク
61	石55	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	31.2	21.2			パ・バー・パン・バク
62	石69	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	42.5	32.7			パ・バー・パン・バク
63	石82	宝篋印塔?	相輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	11.8	25.9			
64	石45	宝篋印塔?	相輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	18.2	46.1			
65	石31	宝篋印塔?	相輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	20.4	33.0			
66	石56	宝篋印塔	基礎	阿蘇溶結凝灰岩	8区	上層	24.3	28.8			ア-の變形
67	石75	宝篋印塔	塔身	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	40.2	43.8			ア-の變形
68	石25	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	23.5	32.4			
69	石14	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	18.9	23.2			
70	石4	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	15.9	24.1			
71	石3	五輪塔	空圓輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	20.8	31.0			
72	石27	五輪塔	火輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	31.8	22.9			
73	石11	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	39.4	26.9			
74	石8	五輪塔	水輪	阿蘇溶結凝灰岩	8区	下層	35.0	24.0			パ・バー・パン・バクの變形

数字部分を黒で塗色

ア-の變形  
ア-の變形

探出 番号	実測 番号	種類	部位	材質	寸法(単位値)		調査地点	刻字(数字)		備 考
					幅	高さ		調査地点	刻字	
73	石29	五輪塔	水輪	阿蘇岩凝灰岩	37.2	25.9	パ・バー・パン・バウの東側			
76	石9	五輪塔	水輪	阿蘇岩凝灰岩	32.1	23.1				
77	石65	五輪塔	水輪	阿蘇岩凝灰岩	32.8	14.9				
78	石20	五輪塔	水輪	阿蘇岩凝灰岩	35.0	31.7				
79	石15	五輪塔?	相輪	阿蘇岩凝灰岩	32.5	21.0				
80	石1	宝篋印塔?	相輪	阿蘇岩凝灰岩	10.2	15.0				
81	石13	宝篋印塔?	相輪	阿蘇岩凝灰岩	9.9	14.3				
82	石5	宝篋印塔?	塔身	阿蘇岩凝灰岩	28.6	35.1				

## SD04 (土器)

探出 番号	実測 番号	種類	胎土	胎成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査地点		法 量(cm)	備 考
							調査地点	器位		
83	14-55	土師瓦土器・坏	1mm程度の砂粒、角四石、長石	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
84	14-54	土師瓦土器・坏	1～2mmの砂粒、角四石、長石	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
85	14-51	土師瓦土器・坏	1～2mmの砂粒、角四石	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
86	14-72	土師瓦土器・坏	角四石、石灰、1mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
87	14-70	土師瓦土器・皿	長石、1mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考

※器位は9区北側セクションA～Dの土器

## SD04 (陶磁器)

探出 番号	実測 番号	種類	胎土	胎成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査地点		法 量(cm)	備 考
							調査地点	器位		
88	14-54	絞輪・網	絞密	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
89	14-85	絞輪・網	絞密	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考

※：南オリーブ陶/器：にぶい黄褐色  
※：明緑灰/器：灰白

## SD19 (土器)

探出 番号	実測 番号	種類	胎土	胎成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査地点		法 量(cm)	備 考
							調査地点	器位		
90	14-81	土師器・壺	角四石、灰、石灰、1～3mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
91	14-80	土師瓦土器・坏	角四石、1～3mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
92	14-55	土師瓦土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
93	14-51	土師瓦土器・坏	1mm程度の砂粒、角四石	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
94	14-82	土師瓦土器・坏	角四石、灰、1～2mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
95	14-56	土師瓦土器・坏	角四石、石灰、1～2mm程度の砂粒、角四石	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
96	14-23	土師瓦土器・坏	1～3mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
97	14-83	土師瓦土器・坏	角四石、1～2mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
98	14-33	土師瓦土器・坏	1mm程度の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
99	14-37	土師瓦土器・坏	1～3mm程度の砂粒、或母	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
100	14-88	土師瓦土器・坏	角四石、1mm以下の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考
101	14-81	土師瓦土器・坏	1mm以下の砂粒	良好	色調(内/外)	色調(内/外)	調査地点	器位	法 量(cm)	備 考

1層部に陶質孔

種別	出土層	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	器面調整(内/外)	器蓋	胎位	法量(高)	備考
102	14-32	土師質土器・坏	1~2mmの砂粒、角閃石	良好	緑/にぶい緑、白	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	6	(11.4) 2.9	5.8
103	14-30	土師質土器・坏	1~3mmの砂粒	良好	緑/白	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	6	環1.1	5.5
104	14-31	土師質土器・坏	1mm程の砂粒	良好	灰黄緑/灰黄緑	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	6	環2.2	5.0
105	14-74	土師質土器・皿	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	緑/白	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	1・2	(13.2) 3.1	(10.8)
106	14-24	土師質土器・皿	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	黄緑、にぶい黄緑/黄緑	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	2	(18.4) 3.5	(14.0)
107	14-20	土師質土器・皿	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	緑/白	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	2	(21.0) 3.3	(18.2)
108	14-23	土師質土器・皿	黄緑、角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	にぶい黄緑/にぶい黄緑、明黄緑	同配子/配子ナリ、底縁巻切り磨し	5-6区皿	2	環18.7	11.7
109	14-106	土師質土器・杯	角閃石、1~3mm程の砂粒	やや不良	にぶい緑/灰黄	ナリ、窪目/ナリ	5-6区皿	6	環6.8	-
110	14-64	土師質土器・杯	1~2mm程の砂粒、角閃石	やや不良	緑/にぶい緑	ナリ、窪目/ナリ	5-6区皿	6	11.8	-
111	14-109	瓦質土器・椀	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	灰黄緑/灰黄緑	ナリ、窪目/コビオサエ、ナリ	5-6区皿	7	環13.8	14.0
112	14-105	瓦質土器・椀	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	灰黄、灰白/灰白	ナリ、窪目/ナリ、コビオサエ、ナリ	5-6区皿	2	環14.5	-
113	14-110	瓦質土器・椀	角閃石、1~2mm程の砂粒	やや不良	にぶい緑/にぶい黄緑	ナリ、窪目/ナリ、コビオサエ、ナリ	5-6区皿	7	(38.4) 環14.5	-
114	14-107	瓦質土器・椀	1mm程の砂粒	良好	灰黄/灰黄	ナリ、窪目/コビオサエ、ナリ	5-6区皿	2	環3.8	10.4
115	14-61	瓦質土器・椀	1~3mm程の砂粒	良好	にぶい緑/にぶい黄緑	ナリ、窪目/コビオサエ、ナリ	5-6区皿	4・5	環8.9	-
116	14-103	瓦質土器・椀	角閃石、1~3mm程の砂粒	良好	にぶい緑/にぶい黄緑	ナリ、窪目/コビオサエ、ナリ	5-6区皿	3	環6.9	-
117	14-101	瓦質土器・椀	1mm以下の砂粒	良好	灰黄/灰黄	ナリ、窪目/コビオサエ、ナリ	5-6区皿	3	環8.7	-
118	14-80	瓦質土器・水鉢	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	黄緑/灰白	ナリ/ナリ	5-6区皿	6	環8.3	-
119	14-89	瓦質土器・水鉢	角閃石、黄鉄、1~3mm程の砂粒	良好	にぶい緑/にぶい黄緑	ナリ/ナリ	5-6区皿	2	環10.2	-
120	14-89	瓦質土器・水鉢	角閃石、長石、1~2mm程の砂粒	良好	灰黄/灰黄	ナリ/ナリ	5-6区皿	1・2	環10.6	-
121	14-104	瓦質土器・割蓬	角閃石、1~2mm程の砂粒	良好	灰黄/灰黄	ナリ/ナリ	5-6区皿	6	環5.8	(14.8)
122	14-103	須恵器・台付皿	1mm程の砂粒	良好	黄緑/黄緑	カキオサエ、ナリ/ナリ	5-6区皿	6	-	-

※胎位はb-b'の土層、以下同じ。

S.D.19(陶磁器)

種別	出土層	器種	胎土	焼成	色調	(内面/外面)もしくは縁裏/胎土	器面調整(内/外)	器蓋	胎位	法量(高)	備考
123	14-87	灰緑・筒	磁赤	良好	緑：オレンジ/胎：にぶい緑	縁裏/コウケズリ、胎土	5-6区皿	2	環1.8	(3.7)	筒縁、胎土目
124	14-81	灰緑・碗	磁赤	良好	緑：オレンジ/胎：黄緑	縁裏/コウケズリ、胎土	5-6区皿	3	環2.2	(5.4)	筒縁、広葉系、縁B類
125	14-2	青緑・碗	磁赤	やや不良	青灰、胎土/胎：灰白	縁裏/コウケズリ、胎土	5-6区皿	7	環1.9	-	筒縁、広葉系、縁B-IV類
126	14-7	青緑・碗	磁赤	良好	胎土/胎：にぶい緑	縁裏/胎土	5-6区皿	3	環1.2	-	縁裏磨き、縁B-1類
127	14-3	青緑・碗	磁赤	良好	胎土/胎：にぶい緑	縁裏/胎土	5-6区皿	5	環1.0	5.5	縁裏磨き、縁B類
128	14-9	青緑・碗	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環3.8	-	縁裏磨き
129	14-10	青緑・碗	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	3	環2.9	-	縁裏磨き
130	14-79	青緑・碗	磁赤	やや不良	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	6	環2.7	5.4	縁裏磨き
131	14-15	染付・碗	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環2.0	-	縁裏磨き
132	14-15	染付・碗	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環2.7	-	縁裏磨き
133	14-87	陶器・皿	磁赤	良好	胎土/胎：灰黄	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環1.2	-	縁裏磨き
134	14-87	陶器・皿	磁赤	やや不良	胎土/胎：灰黄	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環1.5	3.8	縁裏磨き
135	14-25	染付・皿	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環0.5	-	縁裏磨き
136	14-14	染付・碗	磁赤	良好	胎土/胎：灰白	縁裏/胎土	5-6区皿	2	環3.0	(2.3)	縁裏磨き

採掘 番号	器種	器種	焼成	色調		器面調整(内/外)		法量(cm)		備考	
				内面/外面もしくは輪溝/胎土	胎土	口徑	器高	口徑	器高		
137	14-16	袋付・直	軟密	良好	輪：明緑灰/胎：灰白	縦文、流輪/胎文、流輪	3-凹底 2	-	残1.1 (4.8)	京都府京高系、ⅢB-1群	
138	14-16	袋付・直	軟密	良好	輪：明緑灰/胎：灰白	縦文、流輪/胎文、流輪	3-凹底 2	-	残1.2 (4.8)	京都府京高系、ⅢC群	
139	14-20	袋付・直	軟密	やや良	輪：緑灰、灰白/胎：灰白	流文、流輪/胎文、流輪	3-凹底 下割	(10.5)	2.9	-	津州京高系、ⅢC群
140	14-21	色絵・直?	軟密	良好	輪：緑赤胎、緑、灰白/胎：灰白	流輪、流文/胎文、流文	3-凹底 3	-	残2.3	-	京都府京高系
141	14-22	藍彩陶器・直	軟密	良好	輪：黒、(トルコブルー)/胎：灰白	ナデ/流輪	3-凹底 4・5	-	残3.1	残3.3	中国製
142	14-35	三彩・壺	軟密	良好	輪：黒、緑、明緑、黄胎/胎：黄灰	ナデ、流輪/ケズリ、流輪	3-凹底 2	-	5.5	-	静岡三彩
143	14-80	三彩・壺	軟密	良好	輪：緑、赤、オリーブ/胎：灰	流輪/流輪	3-凹底 2	-	残1.6	-	静岡三彩

## SD19 (石燈)

採掘 番号	器種	器種	部位	材質	調整地点	寸法		器面調整(内/外)	色調	焼成	土質	法	法量(cm)	備考
						幅	高さ							
144	石83	五輪塔	空層輪	阿蘇溶結凝灰岩	5・6区Ⅲ	14.2	20.1							
145	石84	五輪塔	空層輪	阿蘇溶結凝灰岩	5・6区Ⅲ	17.4	18.9							
146	石85	五輪塔	空層輪	阿蘇溶結凝灰岩	5・6区Ⅲ	18.1	27.9							
147	石86	五輪塔	空層輪	阿蘇溶結凝灰岩	5・6区Ⅲ	21.5	28.2							
148	石87	板碑	-	阿蘇溶結凝灰岩	5・6区Ⅲ	26.9	52.6							別子部分を割で灰色

## A4-P3

採掘 番号	器種	器種	部位	材質	調整地点	色調	焼成	土質	法	法量(cm)	備考
149	14-77	土師質土器・杯	角形石、1~2mm程度の粒粒	良好	近島津/浅黄院						
150	14-76	土師質土器・杯	角形石、1~3mm程度の粒粒	良好	近島津/浅黄院						

## B9-P2

採掘 番号	器種	器種	部位	材質	調整地点	色調	焼成	土質	法	法量(cm)	備考
151	14-59	袋付・碗	軟密	良好	輪：明緑灰/胎：灰白						

## 整地器

採掘 番号	器種	器種	部位	材質	調整地点	色調	焼成	土質	法	法量(cm)	備考
152	14-12	臼紐・碗	軟密	良好	輪：明緑灰/胎：灰白						
153	14-6	青磁・碗	軟密	良好	輪：オリーブ灰/胎：灰白						
154	14-8	青磁・碗	軟密	良好	輪：灰白/胎：灰						
155	14-4	青磁・碗	軟密	良好	輪：オリーブ灰/胎：灰白						
156	14-38	藍彩陶器・壺	軟密	良好	輪：流黄/外：灰黄						

## 遺構外出土遺物(土器)

探出 番号	類別 番号	器種	土	地焼	色調(内/外)		器面調整(内/外)		調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
					内	外	内	外			口径	高さ	
157	14-50	土師質土器・杯	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	同転ナズリ/同転ナズリ	同転ナズリ/同転ナズリ	9区	—	(7.6)	2.1	4.6	
158	14-52	土師質土器・杯	1~3mmの砂粒、雲母、角閃石	良好	淡黄緑/にぶい黄緑	同転ナズリ/同転ナズリ?	同転ナズリ/同転ナズリ	10区	—	(8.1)	2.4	(4.4)	
159	14-73	土師質土器・杯	1mm以下の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	磨耗のため不明/磨耗のため不明	磨耗のため不明/磨耗のため不明	9区	—	(9.2)	3.3	(5.4)	
160	14-47	土師質土器・杯	1~2mmの砂粒	良好	橙/橙	同転ナズリ/同転ナズリ	底部へう切り跡ナズリ	9区	—	10.2	4.4	6.0	
161	14-67	土師質土器・杯	石英、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	同転ナズリ/同転ナズリ	底部へう切り?	9区	—	(10.2)	4.6	(5.5)	
162	14-71	土師質土器・杯	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	同転ナズリ/同転ナズリ	底部糸切り跡ナズリ	8区	—	(10.2)	2.6	(6.0)	
163	14-46	土師質土器・杯	角閃石、1mm程度の砂粒、角閃石	良好	橙/橙	同転ナズリ/同転ナズリ	底部糸切り跡ナズリ	8区	—	(11.5)	3.1	(5.8)	
164	14-49	土師質土器・杯	1~2mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	同転ナズリ/同転ナズリ	底部糸切り跡ナズリ	8区	—	10.5	2.7	5.3	
165	14-53	土師質土器・重	石英、角閃石、1~2mm程度の砂粒	良好	淡黄緑/淡黄緑	同転ナズリ/同転ナズリ	底部糸切り跡ナズリ	9区	—	(12.3)	3.3	(7.3)	
166	14-53	土師質土器・重	1~2mmの砂粒、雲母	良好	橙/橙	ナズリ/磨耗のため不明、底部へう切り?	ナズリ/磨耗のため不明、底部へう切り?	10区	—	(9.2)	2.1	4.8	
167	14-69	土師質土器・壺	雲母、1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	同転ナズリ/同転ナズリ	底部糸切り跡ナズリ	9区	—	(12.7)	2.8	(7.8)	
168	14-85	土師質土器・壺	1~3mm程度の砂粒、角閃石、長石	やや不良	にぶい橙/にぶい黄緑	ナズリ/ナズリ、タケナ	ナズリ/ナズリ、タケナ	9区	—	(21.4)	5.8	—	
169	14-78	瓦質土器・壺鉢	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰白/灰白	ナズリ、器目/コヒナナ工、ナズリ	ナズリ、器目/コヒナナ工、ナズリ	8区	—	—	9.1	—	
170	14-66	瓦質土器・壺鉢	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	黄灰/黄灰	ナズリ、器目/ナズリ	ナズリ、器目/ナズリ	9区	—	33.8	11.4	18.7	
171	14-82	瓦質土器・壺鉢	1~2mm程度の砂粒	良好	黄灰/黄灰	ナズリ、器目/コヒナナ工、ナズリ、ケズリ	ナズリ、器目/コヒナナ工、ナズリ、ケズリ	9区	—	—	11.3	—	

## 遺構外出土遺物(陶磁器)

探出 番号	類別 番号	器種	陶土	焼成	色 調		器面調整(内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
					内	外				口径	高さ	
172	14-11	白磁・皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	京徳製窯系、重E群
173	14-13	白磁・皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	京徳製窯系、重E群
174	14-88	青磁・碗	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
175	14-1	青磁・碗	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
176	14-9	青磁・皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
177	14-82	青磁・皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
178	14-10	灰付・碗	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
179	14-83	灰付・小皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
180	14-84	灰付・小皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
181	14-84	灰付・皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群
182	14-17	灰付・小皿	緻密	良好	灰白/青	灰白	施釉/施釉	10区	—	—	—	瀬京窯系、南B群

## 遺構外出土遺物(石製品)

探出 番号	類別 番号	器種	石 材	色 調	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
							直径	底径		
183	14-83	石鍋	滑石	和灰/黄灰	9区	—	—	—	—	厚さ1.1~2.1cm

## 第4節 小 結

本調査では、千疊敷南東側と北東側の2地点に調査区を設定した。前者を南調査区、後者を北調査区とし、調査面積は南調査区が約950㎡、北調査区が約130㎡である。

まず、南調査区については、調査区南側から東側の一部で盛土整地層を確認した。本整地層中より15世紀後半から16世紀中頃の青磁剣先蓮弁文碗が出土していることから、この時期以降に整地が行われたと想定される。

検出遺構については、SD02より石塔が大量に出土し、城破りとの関係で注目を集める成果が得られた。本調査で検出した範囲については、西側に向かって徐々に浅くなり消失するが、これは後世の削平によるもので、本来は千疊敷東側の土橋部分を除いて全周していたと推定される。五輪塔を中心とする石塔の残欠が多数出土したのは、南調査区北側部分から南側にかけての約15mの範囲内で、これらは上層と下層に分けられる。前者は埋土上位から中位にかけて、後者は堀底に近い下位から出土している。出土数は圧倒的に上層が多く、下層の石塔は地山のブロックや砂粒を多く含んだ土砂で覆われており、石塔投棄直後に人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

層序を大別すると、①最下層の自然堆積層→②下層の石塔を含む層→③地山の砂粒やブロックを多量に含む層→④上層の石塔を含む層の順で堆積しており、②～④は人為的な埋め戻し土とみられる。特に下層の石塔を覆い尽くす③は重要であり、人為的に城の構造物や対象物(石垣、瓦など)を地山の土砂などで覆い尽くす事例は、長崎県原城跡、佐賀県肥前名護屋城跡などで知られている。④の段階になると虎口周辺の堀はほぼ完全に埋まったと推定される。約234mにわたり千疊敷を取り囲むほどの大規模な遺構であるにもかかわらず、明治22年作成の字図においても本遺構の存在を示す字境は図示されておらず、また、1次調査前まで千疊敷を囲む堀が全く確認できないほどの平場だったことは、城破りに伴う埋め戻しと密接に関連するのではないかと考えられる。

また、城郭遺構以外では、古墳時代、千疊敷の範囲に存在した首長居館を圍繞する壕跡SD01や張り出し部などを検出したことは注目される。1次調査で検出した千疊敷南西側だけでなく、南東側にも張り出し部が存在することが明らかになり、最大幅10m、同長8mと1次調査で検出されたものとはほぼ同じ形態・大きさであり、対をなすものであろう。現況の地形から判断すれば、おそらくその他の部分に張り出し部は存在しなかった可能性が高い。

一方、北調査区については、11次調査で検出した塹壕跡SD19の未掘部分を調査した。本遺構はSD02が圍繞する平場を分断する位置にあるが、埋土の重複が認められないことや、SD02の排水溝と連結していることから同時期に並存していたとみられる。また、SD02と同様に、本遺構の下層からも石塔残欠が多数出土した。その多くが同一の層から出土しており、同時期に投棄された可能性が高い。

両調査区から出土した遺物は、土師質土器の皿や杯、瓦質土器の摺鉢や火鉢、国産や中国製の陶磁器、五輪塔を中心とする石塔などであるが、本調査においては石塔の大量出土が特筆される。

これらの石塔群は、形態の特徴から鎌倉期から南北朝期にかけてのものであり、城破りが行われた時期と推定される16世紀後半から末頃とはかなりの時期差がある。千疊敷周辺の調査では3基の土塙蓋が確認されているが、これほど多くの石塔が出土するような墓跡と想定される地点はなく、西岡台周辺にも当該期の石塔が確認できるような墓跡は未確認である。石塔の時期が鎌倉期から南北朝期に時期が絞れるため、おそらく西岡台周辺に主に当期の石塔で構成される墓跡が存在し、16世紀後半から末頃、石塔を用いた城破りのために千疊敷まで運ばれ、虎口を中心とする範囲に投棄されたと想定される。

引用・参考文献

- 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』V 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 宇土市教育委員会  
藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』VI 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 宇土市教育委員会  
藤本貴仁 2007『宇土城跡（西岡台）』IX 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集 宇土市教育委員会



## 第6章 まとめ

### 第1節 横堀跡SD02について

14次調査を最後に、一部を除いて千疊敷を圍繞する横堀跡SD02の調査を終了した。これまで行った本遺構の調査を列記すれば、昭和49・50年度に実施した1次調査では千疊敷南側から西側の桁曲輪に調査区を設定、平成9年度の9次調査では1次調査のセクションベルト部分などの調査を実施した。また、10年度の10次調査では千疊敷北側、11次調査では北東側、平成5年度の7次調査では千疊敷東側の土橋を含む虎口付近、14次調査では千疊敷南東側に調査区を設定し、発掘調査を行った。以下では、これまで実施した本遺構の調査の内容とその特徴についてまとめたい。

#### (1) 規模及び形態の特徴

検出規模は長さ約234m、幅約3.5～5.7m、底幅約1.3～3.0m、深さ約0.2～3.0mで、千疊敷東・南・西側では整形された断面逆台形のいわゆる箱堀であり、堀底に大きな段差や凹凸はみられず、一定程度の深さがある。これに対し、千疊敷北側では堀底に凹凸を有し、深さも場所によってかなりのばらつきがあり、一見すると堀内部に仕切り状の施設を設けて堀底を移動する敵兵の侵攻阻止をねらった「敵堀」状を呈するが、本遺構はいくつかの点で敵堀とは認め難い特徴がある(図6)。

まず、凸部の形態は幅広く、低い土手状の高まりであり、一般的な敵堀のように幅が狭い高い土の壁が堀内部を仕切るというような形態ではない(池田1998、井上1998)。また、凸部が存在する区間約20mの深さは、その他の区間にくらべて極めて浅く、防衛施設としては貧弱な印象を受ける。さらに、6箇所の凹部のうち、2箇所の堀底直上で掘削時に生じたとみられる地山の掘削土が堆積していた。このことは、掘削時に生じた土が排出されず、そのまま堀底に残されたとみられる(藤本2007)。

これらの状況を総合的に考えれば、何らかの理由で千疊敷北側では堀普請が中止された可能性が高く、未完成だったと想定される。堀底の凹凸は堀普請の途中で中止された結果として残された掘削単位(小間割)の痕跡と想定できよう<sup>1)</sup>。

本遺構の掘削過程を推定すると、堀をある間隔ごとに区画して掘削を進め、この区間ごとの進捗状況が堀底の凹凸に現れており、最終的には凸部が掘削されて千疊敷南・西側のような状態に仕上げる予定だったと推察される。つまり、断面逆台形の箱堀を成形する工事のある段階を示しているであろう。おそらく凹部区間で見本形を造った後、その形に基づいて隣接する凸部をこの見本形のかたちに合わせて掘削することにより、完成形である断面逆台形の形状に仕上げたと想定される。

発掘調査で未完成と認定される中世城郭の堀跡が確認されたのは、全国的にも初めての事例とみられ、歴史学や土木史的観点からみても重要な発見といえよう。

#### (2) 時期について

本遺構の埋土からは、13～16世紀代を中心とする土師質土器や瓦質土器、国産及び貿易陶磁器などの遺物が多量に出土しており、出土遺物から掘削時期を特定することは難しい。しかし、全国的にみて曲輪全体を取り囲むような横堀が登場するのは、16世紀中頃から後半の永祿期頃であり、その時期以降の造作である可能性が高く、本遺構が未完成とみられることからこのことを傍証するといえよう。

さて、1次調査では千疊敷西側埋土で黒褐色土に灰や炭化物を含む層が確認され、『八代日記』に記載された天文7（1538）年と11（1542）年の2度の火災との関係が指摘された（平山・高木ほか1977）。1次調査H地区の一部と重複する9次調査においても、同様の層を確認し、土師質土器を中心とする多くの遺物が出土したが、この層から出土した遺物の時期の下限は16世紀後半～17世紀初頭とみてよい（藤本2007）。

つまり、当初指摘された嘉靖年間より新しい時期の陶磁器を含んでおり、豊臣秀吉の九州平定に伴い名和顕季が宇土城を退去した天正15（1587）年から小西行長が宇土に入り、新城（宇土城跡城山）の築城を開始したとされる天正16（1588）年の16世紀末と、前述した層中出土の陶磁器の年代はほぼ合致する。

また、この層の堆積状況から判断して、千疊敷側から急激にSD02に流入しており、あたかも堀に掻き入れたような状況を呈する。堀を意図的に埋め戻す意図があったとまでは断言できないものの、廃城前後の千疊敷の生活面が削平され、堀側へ炭化物を含む土砂が流入したとみてよい。千疊敷虎口付近では城郭の生命を断ち切る儀礼的行為である「城破り」が行われており、SD02の埋め立ても城破りに伴う行為であった可能性を指摘しておきたい。

なお、これに関して注目されるのがSF01に堆積した炭化物を多量に含む層のあり方である。本層はSF01北側から流れ込むように堆積しており、その一部は盛土整地された路面直上を覆っている（図18）。SF01は千疊敷の虎口であり、この路面は廃城まで機能していたとみられるため、廃城前後に千疊敷で火災が発生し、これに起因する炭化物を含む土で虎口が意図的に埋められたことを示唆するといえる。想像をたくましくすれば、廃城に伴い曲輪の建物が焼き払われ、虎口や堀が意図的に埋められた可能性を指摘できよう。

## 第2節 千疊敷の虎口と城破りについて

本報告で特筆されるのは、千疊敷の虎口周辺で城破りに用いられたとみられる石塔残欠が大量に出土したことであろう。以下では、千疊敷の虎口における城破りについて、他地域での事例をふまえて検討したい。

まず、SD02で出土した石塔の出土層位については、下層と上層に大きく分けられ、石塔の投棄が2度行われたことが判明した（図33）。出土遺物からは上層と下層の時期を特定するにはいたらなかったが、これまでの調査で出土した陶磁器の下限は16世紀後半から17世紀初頭であり、文献資料でも上述のとおり16世紀末に廃城になっていることから、16世紀末から17世紀初頭にかけて実施されたとみてほぼ間違いないだろう。

投棄された石塔の時期については、その形態的特徴から鎌倉期から南北朝期にかけて製作されたもので、城破りが行われた時期とはかなりの時期差がある。千疊敷周辺の調査では3基の土壇墓を検出しているが、これほど多くの石塔が出土するような墓地跡と比定し得るような地点は確認されておらず、西岡台周辺にも中世前期の石塔が確認できるような墓地跡は確認されていない。石塔の時期が絞れるため、おそらく西岡台周辺に主に当期の石塔で構成される墓地跡が存在し、16世紀末頃、石塔を用いた城破りのために千疊敷まで運ばれて、虎口を中心とする範囲に投棄されたと推測される。

上層は下層よりも石塔の出土数が圧倒的に多く、上層出土の石塔の一部は列状に並べられたような状況で出土した。同じような事例として、佐賀県肥前名護屋城跡の二ノ丸で意図的に並べられた軒丸瓦・丸瓦が確認されている（高瀬2001）。また、下層から出土した石塔は地山のブロックや砂粒を多く含む

だ土砂で覆われており、石塔投棄直後に人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。人為的に城の構造物や対象物（石垣、瓦など）を地山の土砂などで覆い尽くす事例は、長崎県原城跡、肥前名護屋城跡などで知られている。

その他、出土部位ごとの数量差が顕著であることは注目すべきである。12・14次調査においてSF01及びSD02の虎口付近で出土した五輪塔（80点）に限れば、空風輪41点（51.25%）、火輪15点（18.75%）、水輪20点（25%）、地輪4点（5%）と著しい偏りがあり、空風輪が圧倒的に多く、地輪はあまり出土していない点が際立つ。

なお、石塔の使用に関連してキリシタン大名・小西行長が16世紀末に築城した近世の宇土城跡（城山）では、石垣や石塁に地輪が大量に使用されており（木下1981）、地輪が少ない千疊敷とは対照的なあり方を示す。城破りを行った主体者は現段階では特定できないが、その実施主体者を考えるうえで興味ある事例といえよう。

以上のことから、宇土城跡における城破りの特色をまとめれば次のとおりとなろう。

- ① 虎口という城において重要な場所に対して意図的に大量の石塔を投棄する。
- ② 石塔の投棄が2時期に分けられ、用いられた石塔の部位に著しい偏りがある。
- ③ 下層の石塔は地山の砂粒・ブロックを多量に含む土砂で覆われている。
- ④ 石塔の投棄に伴って虎口周辺の堀の埋立が行われている。

石塔を用いた城破りは九州で初めての確認例であり、全国的にみても千葉県の篠本城跡、同笹子城跡、同和良比羅込城跡など数例に限られる（柴田1992、柴田2001）。全て中世城郭であり、近世城郭では確認されておらず、中世から近世へと時代が移り変わる頃に行なわれなくなった城破りの一手法ではないかと推察される。

なお、近世城郭の城破りは、石垣を壊したり曲輪への出入口を塞いだり毀すのが一般的である。近世宇土城跡でも本丸の堀跡から意図的に崩されたとみられる大量の石垣が出土しており（木下1981、木下1982）、「宇土之城を割給ふ」、「宇土之古城も石垣等取崩堀八埋め申候二付其形今相見へ不」とする『肥後宇土軍記』の記述から（井上1977）、城破りが行われたことは疑いない。県内でも玉名郡南関町鹿ノ原城跡で石垣を崩したり、虎口の破壊を意図したと推定される事例が確認されている（坂本2000）。葦北郡芦北町佐敷城跡でも石垣の角石を大規模に破壊した痕跡が確認されている<sup>21</sup>。

宇土城跡の事例は中世城郭における城破りの性格や実態、ならびに近世城郭へと受け継がれる城破りの意味を探る上で極めて重要といえよう。

### 第3節 堅堀跡について

10次調査以降、千疊敷周辺の発掘調査において、千疊敷北半側で堅堀跡ないしそれに類する遺構を検出し、既にその概要を報告しているが（藤本2004、藤本2005など）、以下では、14次調査までに判明した堅堀跡SD18及びSD19の内容を中心にまとめ、それ以外の詳細については今後作成予定の本報告書に譲ることとした。

SD18及びSD19の位置については、千疊敷下段の幅の狭い帯曲輪や切岸を分断するような形で配置されており、千疊敷を圍繞する横堀跡SD02が位置する平場付近から丘陵裾部にまで達するものもあったと考えられる。規模に関しては、SD18は幅や深さがSD02とほぼ同規模であるのに対し、SD19はSD02と比べ幅では約2倍の規模を有し、深さも2mを越える。

掘削時期については、出土遺物からは時期を特定することはできなかったが、これらがSD02とほぼ同時期に機能していたとすれば、千畳敷北側を中心とする放射状の配置が想定されるが、ある程度離れた間隔で配置されているため畝状堅堀群のような連続した堅堀群ではない。廃絶時期に関しては、SD18はSD02の掘削に伴い埋め戻された可能性が高いが、SD19は城破りに伴う石塔の大量投棄や、出土した陶磁器の時期などから判断して、SD02と同時期に機能を停止したと考えられる。

なお、千畳敷南側の緩傾斜地では堅堀は確認されておらず、地形の形状から千畳敷北側に限られるものと推測される。三城では横堀跡、堅堀跡とも確認されていないが、今後継続的な調査を行うことによって発見される可能性も否定できず、そのような調査の積み重ねによって縄覆りの全体像を明らかにできるものと思われる。

## 註

- 1) 小間割の確認例として、群馬県の未完成中世用水路「女堀」が著名である。幅約30m、深さ約5mと大規模で、掘削範囲を設定して掘削を行っている。規模が大きな土木工事を行う場合は、掘削する範囲などを設定して計画的・体系的に工事を進めたとみられる。
- 2) 発掘調査を担当した芦北町教育委員会深川裕二氏のご教示。

## 引用・参考文献

- 池田 光雄 1998「障子堀について」第15回全国城郭研究者セミナー資料
- 井上 正枝訂 1977「肥後宇土軍記『宇土城跡（西岡台）』史料編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 井上哲朗 1998「堀内障壁の分類と編年試案」第15回全国城郭研究者セミナー資料
- 木下洋介 1981『宇土城跡（城山）』調査概報（1）宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇土市教育委員会
- 木下洋介 1982『宇土城跡（城山）』調査概報（2）宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集 同上
- 木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡（西岡台）』II 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集 同上
- 坂本重義 2000『鷹ノ原城跡』I 南岡町文化財調査報告書第5集 南岡町教育委員会
- 柴田龍司 1992「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』第6号 中世城郭研究会
- 柴田龍司 2001「籬小城・笹子城・和良比堀込城 石塔を堀に投棄する」『城破りの考古学』吉川弘文館
- 高瀬哲郎 2001「肥前名護屋城 天下人秀吉の夢の跡」『城破りの考古学』同上
- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』III 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 同上
- 藤本貴仁 2001『宇土城跡（西岡台）』IV 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上
- 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』V 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 同上
- 藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』VI 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 同上
- 藤本貴仁 2004『宇土城跡（西岡台）』VII 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上
- 藤本貴仁 2005『宇土城跡（西岡台）』VIII 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上
- 藤本貴仁 2007『宇土城跡（西岡台）』IX 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集 同上

# 図 版

## PLATES

図版 1～7：第11次発掘調査

図版 8～17：第12次発掘調査

図版 18～32：第14次発掘調査

図版 1



11次調査区航空写真  
(南東より)



11次東調査区航空写真  
(上が北)

## 図版 2



S D02調査状況（北より）



11次東調査区調査前状況（南より）



S D02検出状況（南より）



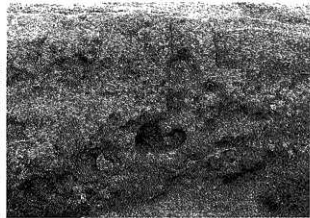
S D02底面の段差（北より）



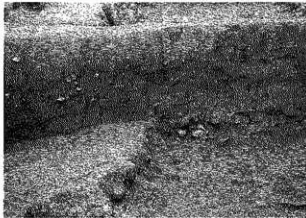
S D02調査状況（北より）



11次西調査区調査状況（東より）



S X04検出状況（東より）



S D02とS D19の土層堆積状況（北より）



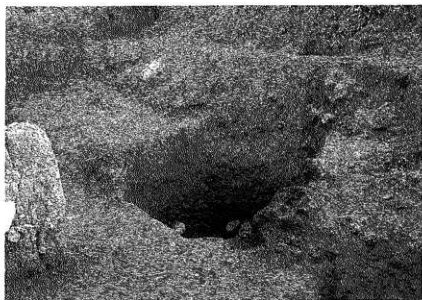
S D02排水溝状遺構検出状況（西より）



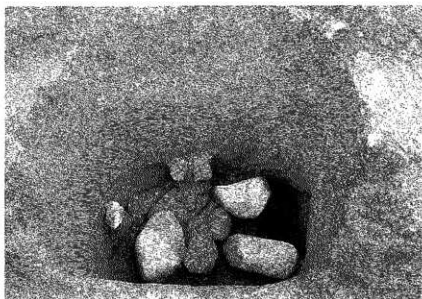
S D19検出状況（北西より）



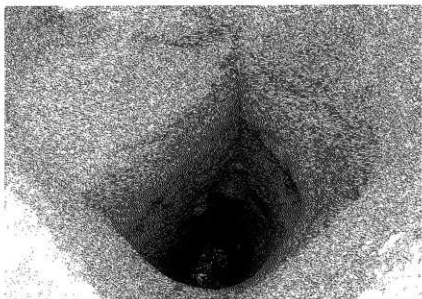
図版 4



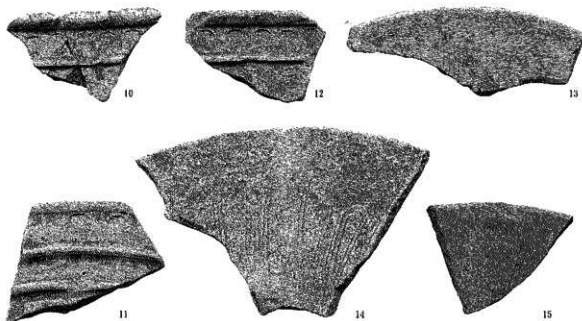
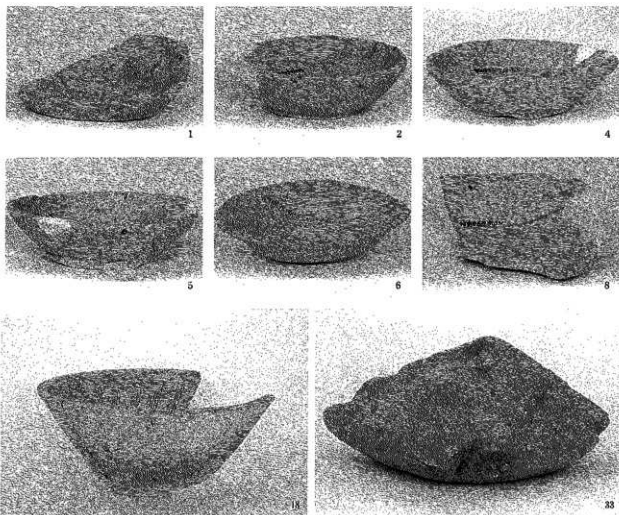
SE01調査状況（西より）



SE01礫群出土状況（北より）

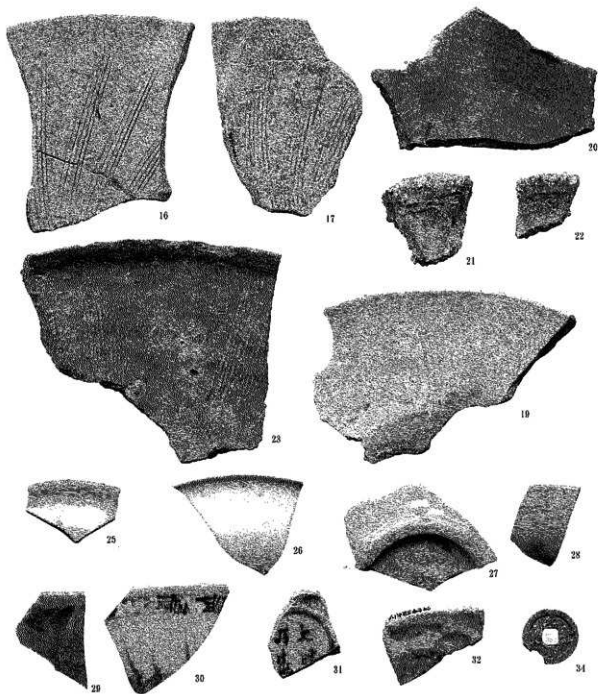


SE01埋土半葬状況（西より）

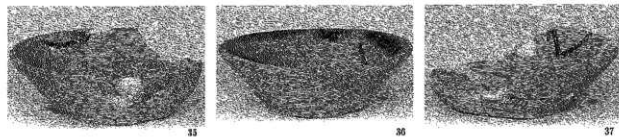


S D02出土遺物 1

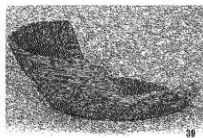
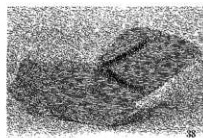
図版 6



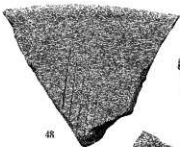
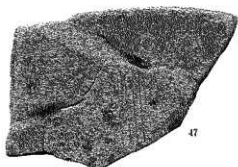
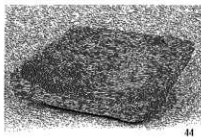
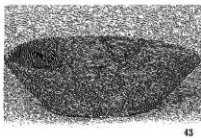
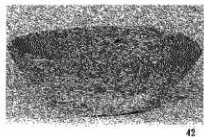
S D02出土遺物 2



S E01出土遺物 1



SE01出土遺物 2

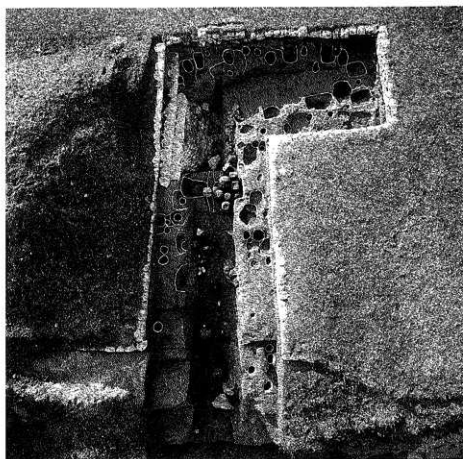


遺構外出土遺物

図版 8



12次調査区航空写真  
(上が北)

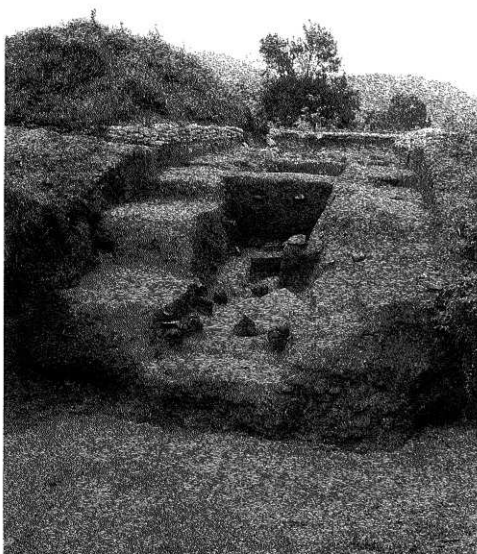


S F 01調査状況航空写真  
(上が西)

S F 01調査前状況  
(東より)



S F 01調査状況  
(東より)



図版 10



S F 01調査状況（北より）



S F 01土層堆積状況（東より）



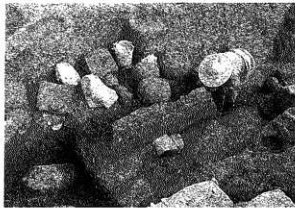
S F 01土層堆積状況（西より）



S F 01出土石塔及び貝類（南より）



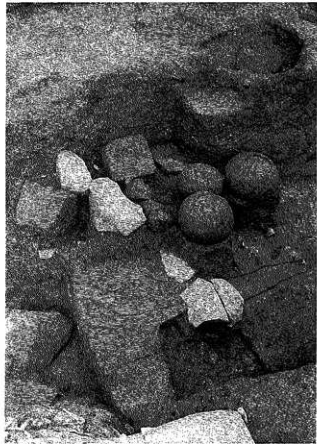
S F 01出土石塔（東より）



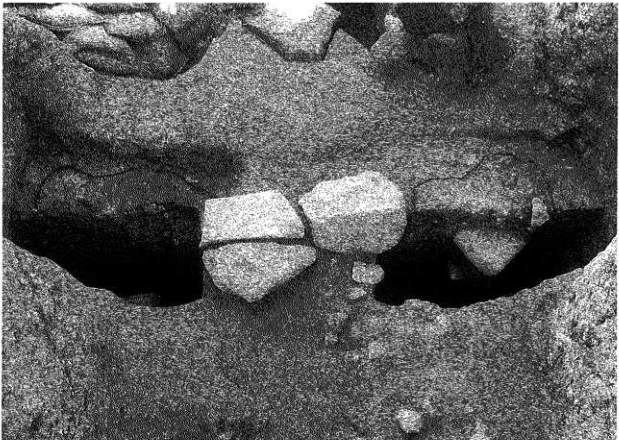
S B 23周辺調査状況 (南より)



整地層検出状況 (西より)



S B 23検出状況 (南より)



S B 23調査状況 (東より)



図版 12



S F01調査状況（東より）



S F01石塔など出土状況  
（西より）

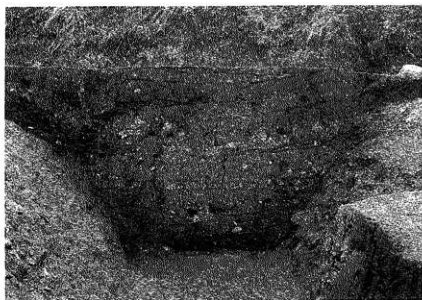


S D18調査状況（北より）

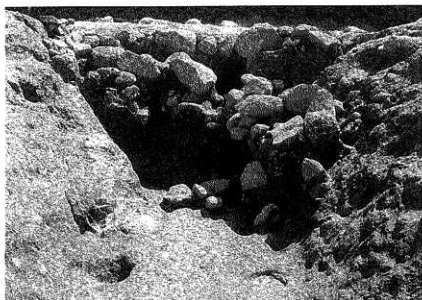


S D18調査状況（南より）

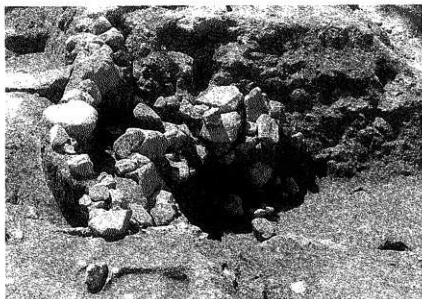
図版 14



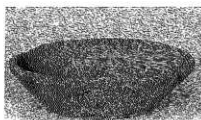
S B 18土層堆積状況（北より）



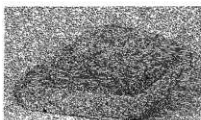
S B 18礫群出土状況（北より）



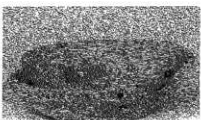
同上（東より）



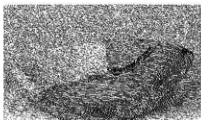
2



3



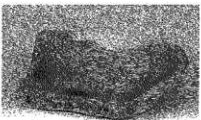
5



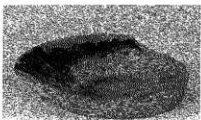
6



7



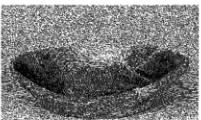
8



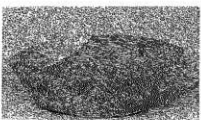
9



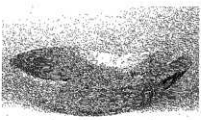
14



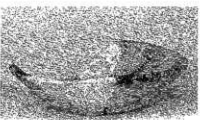
15



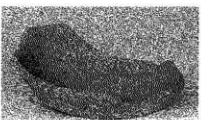
16



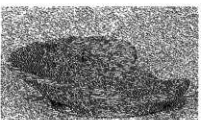
18



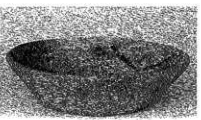
19



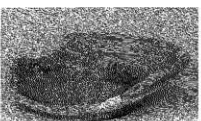
20



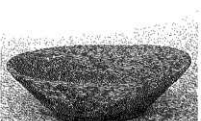
21



23



28

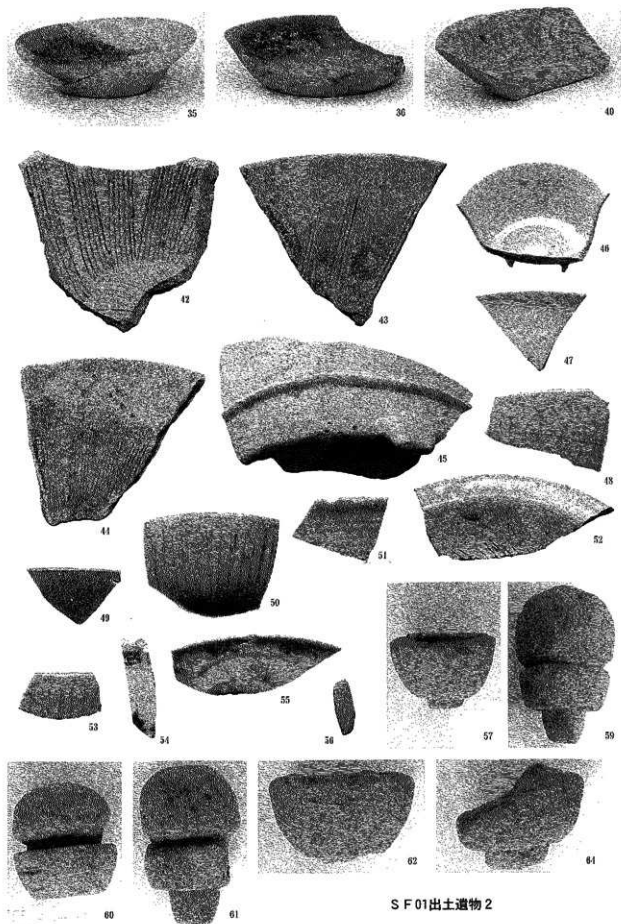


31

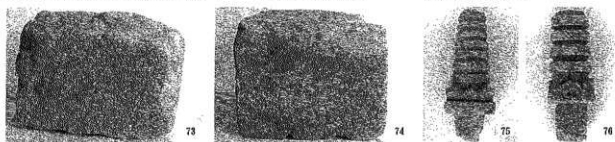
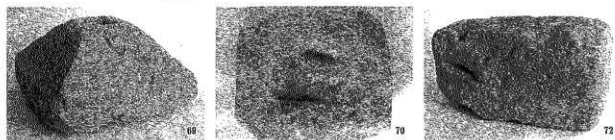
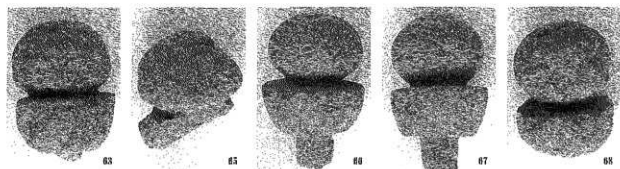


34

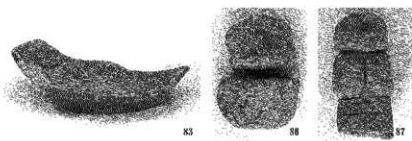
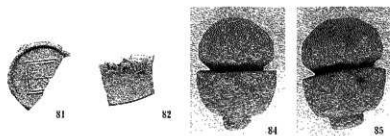
图版 16



S F 01出土遺物 2



79 S F 01出土遺物 3



SD18 : 81・82  
遺構外 : 83~87

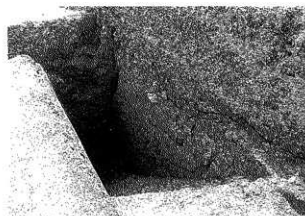
SD18及び遺構外出土遺物



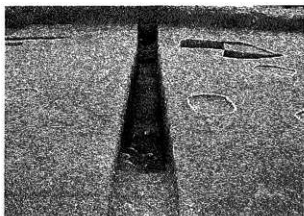
14次南調査区航空写真  
(上が北)



S D 01周辺航空写真  
(上が北)



SD01調査状況 (6次T3、北より)



SD01検出状況 (T1、北より)



SD01検出状況 (T3、西より)

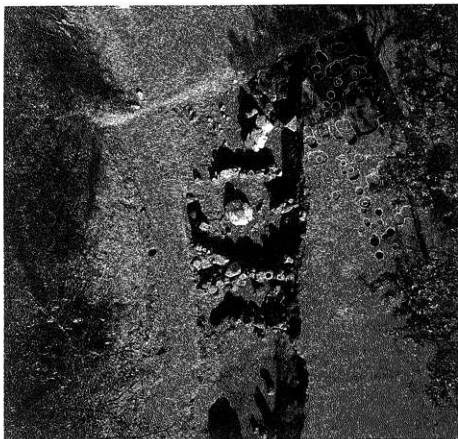


SD01検出状況 (T4、北西より)

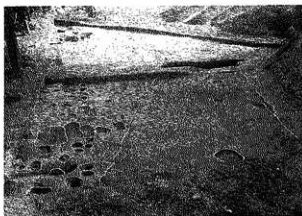


首長居館に伴う張り出し部検出状況 (西より)

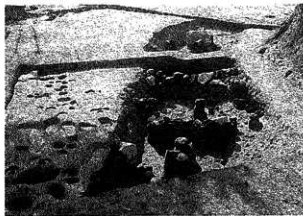




SD02調査状況航空写真  
(上が北)



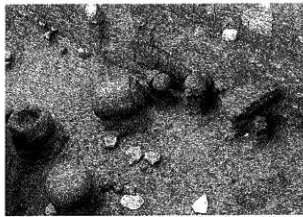
SD02検出状況 (北より)



SD02調査状況 (北より)



SD02調査状況 (南西より)



SD02下層出土石塔出土状況 (東より)



SD02上層出土石塔出土状況（南西より）



SD02上層出土石塔出土状況（東より）

図版 22



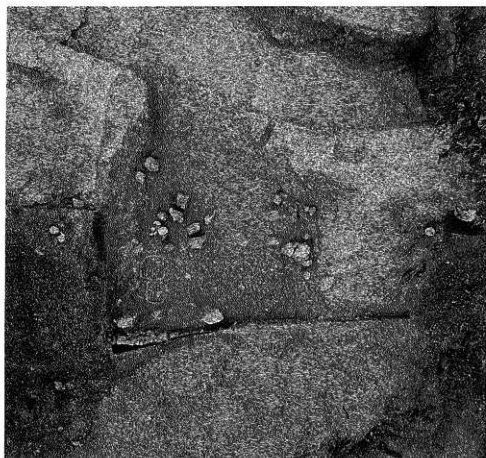
SD04検出状況（北より）



SD04調査状況（南西より）



SD19調査前状況（南東より）



S D19調査状況航空写真  
(上が西)



S D19調査状況 (西より)

図版 24



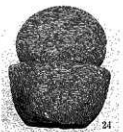
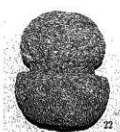
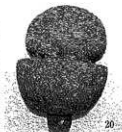
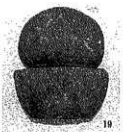
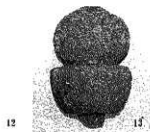
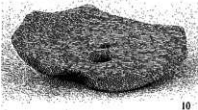
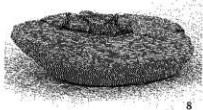
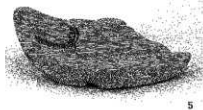
S D19検出状況（北東より）



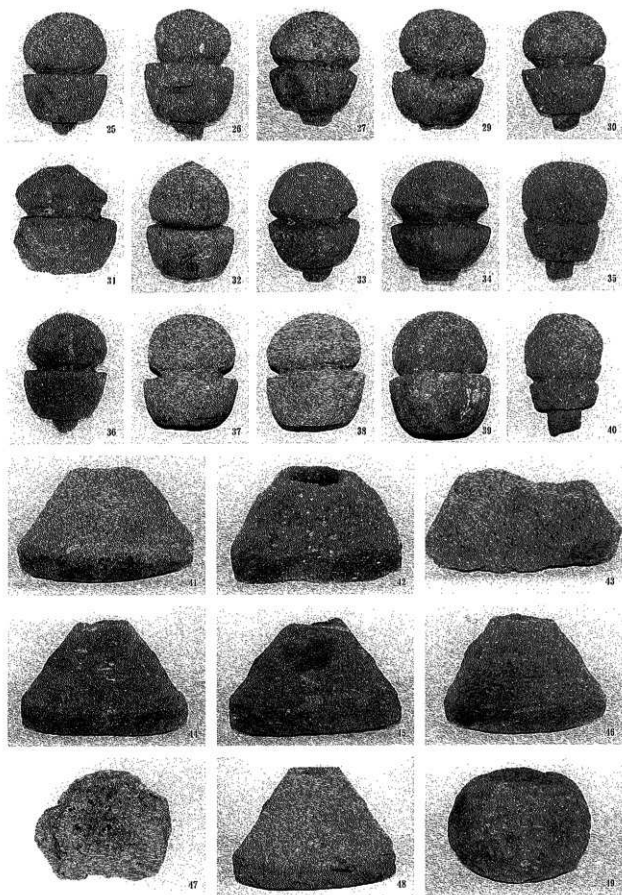
S D19土層堆積状況（東より）

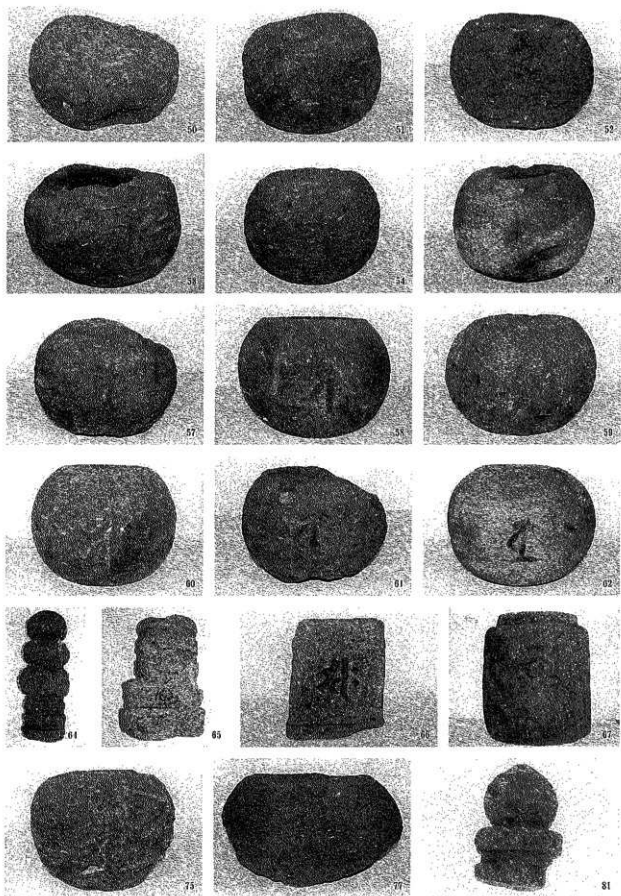


S D19石塔出土状況（南より）



图版 26

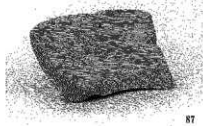
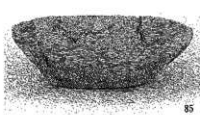




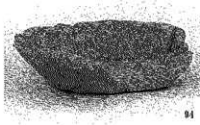
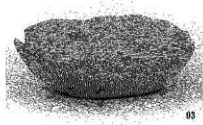
S D 02出土遺物 3



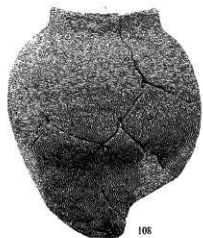
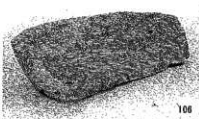
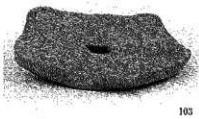
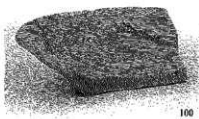
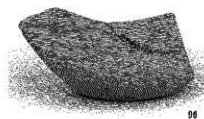
図版 28



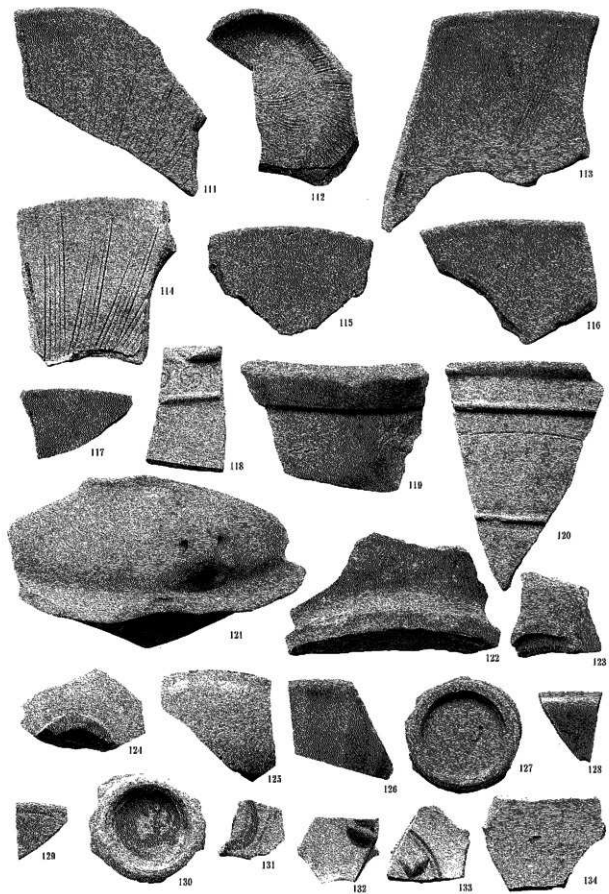
S D04出土遺物



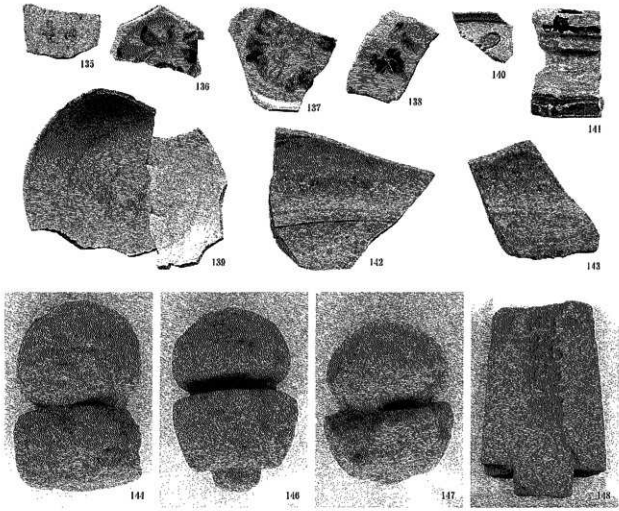
S D19出土遺物 1



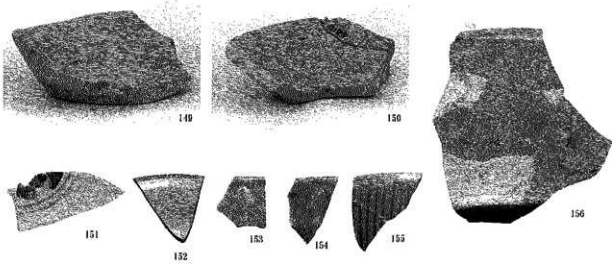
图版 30



SD19出土遺物 3



S D 19出土遺物 4



ビット及び整地土層出土遺物

図版 32



157



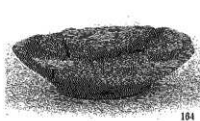
158



160



165



164



166



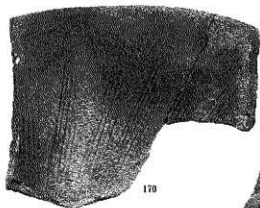
168



169



171



170



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183

遺構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと (にしおかだい)							
書名	宇土城跡 (西岡台) X							
副書名	平成11～13年度発掘調査報告書							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第31集							
編著者名	藤本貴仁							
編集機関	宇土市教育委員会							
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	道跡番号	北緯	東経	調査 回数	調査 面積	調査 原因
うとじょうあと 宇土城跡	くまもとけん うとじょう 熊本県宇土市神馬町	43211		32° 40° 46°	130° 38° 45°	11次 12次 14次	426㎡ 185㎡ 1,080㎡	保存整備事 業に伴う発 掘調査
あまじょうじよ 宇土千疊敷								
所収遺跡名	種別	土器時代	主な遺構		主な遺物			
宇土城跡	中世城	古墳時代 中世	壕跡 (古墳時代)、横堀跡・ 縦堀跡・道跡・門跡・欄跡・ 井戸跡 (中世)		土師器、土師質土器、瓦質土器、備 前・唐津などの国産陶磁器、白磁・ 青磁・染付などの貿易陶磁器、石塔、 鉄砲玉			
特記事項								
【11次調査】 主郭・千疊敷を圍繞する横堀跡や縦堀跡を検出。								
【12次調査】 千疊敷東側の虎口で、切り通し状に掘り込まれた道跡が2時期にわたることが判明。盛土整地 が施された新しい段階の道に伴う門跡を検出。城破りに関連するとみられる石塔が出土。								
【14次調査】 千疊敷の虎口付近の横堀跡や千疊敷北東側の縦堀跡より、城破りに関連するとみられる石塔が 多量に出土。千疊敷を中心とした範囲に存在した古墳時代の首長居館を囲む壕跡や張り出し部 を検出。								

※北緯及び東経は世界測地系を使用。

## 宇土城跡（西岡台）X

—平成11～13年度発掘調査報告書—  
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第31集

発行年月日 2009年3月31日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会  
〒869-0433 宇土市新小路町95  
TEL 0964-22-6500(代) FAX 0964-58-1005

印刷 コロニー印刷  
〒860-0051 熊本市二本木3丁目12-37  
TEL 096-353-1291(代) FAX 096-353-1294

The Report of The Research of  
Burial Cultural Properties  
Uto City Vol.31

# **Ruins of Uto Castle (Nishiokadai) X**

2009

Kumamoto Prefecture Uto City  
Board of Education